
physical pain

みゅうじん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

physical pain

【Nコード】

N2182L

【作者名】

みゅうじん。

【あらすじ】

全寮生高校生活1年目のゴールデンウィーク間近。矢西蘭はこの高校で一番の問題児、黒澤静に絡まれてしまう。BL、ボーイズラブです。

Finders, keepers. に出てきた矢西を主人公にしたショートストーリーです。

■実際ロングすぎになりました。

出会い（前書き）

どうも、お久しぶりです。

初めましての方は初めまして、みゅうじん。です。

さて……今回はFinders, keepers. の脇役？としてでていた矢西の話しを書かせてもらう事にしました（＾ω＾）感想、アドバイス。何かあったら何でも言っ頂いて構わないです。※本作と違って暴力シーンが少しあります。気をつけてください。

出会い

黒澤 静は俺の一つ年上で、先輩。一番最初にあったのは俺がこの高校に入って、4月下旬。もうすぐゴールデンウィークの時のことだった。

見ただけで不良と分かる、金髪と少し赤色に染色された髪の毛。俺より結構背も高く、着崩ししまくりで、少しドン引いてしまった制服。

印象は、最悪の最悪。

こんな奴とかかわりは持ちたくねえなあと思って目線を少し下に合わせたそのときに、俺とアイツの歯車は、間違った方向に動いてしまった。

「おい」

そう、この一言。

「無視してんじゃねえよ」

この二言目。

さっきまでうじゃうじゃいた人達は、俺とコイツの近くから遠ざかっていく。遠ざかっていった人達の事も気にせず、どんどん先へ向かっていく。

勿論、黒澤 静が呼んでいるのが俺とも知らず。

「待てつつってんだろ」

肩を掴まれたときに、ハッとした。

2回も無視してしまった。

昨日みたドラマを見て、俺は思った。不良はすぐに切れる……そしてすぐに殴りにかかる。本当にそうなのか？

何故だか急に試してみたくなくて、俺は態度を悪くするように、顔を黒澤に向けずに返事をした。

「……なんすか」

「てめえ、俺が話しかけてんのに何無視してんだよ」

「ごめん先輩。気付かなかった」

愛想を悪くし、だんだん切れ始めた黒澤。

「ふざけてんじゃねえぞ」

「ふざけてないっすよ。だって、呼んでるときに俺の名前なんて一度も出てきてませんし、『おい』とか『待て』なんて、誰にでも言えますもん。気付かないのはさも同然……うぐっ！」

いきなり、重い痛みが俺の頬を突いた。俺の体はアスファルトの地面に叩きつけられ、頬の痛みと一緒に体の痛みさえも俺を襲っていた。

「お前、俺のこと知ってるか？」

「つつ……2年の……黒澤先輩でしょ？ 噂で知ってますよ、……顔は今見るのが初めてですけど……一発でわかりました」

昨日のドラマでやっていた事は、本当だった。

スグ切れて、スグ殴る。そうして自分がめっちゃくちゃ有名だと自惚れているから、すぐこうやって人に自分の事を聞いてくる。

……こういう奴は、すごい腹立つ。すごく嫌いだ。

「良い度胸してんじゃねえか、お前、矢西 蘭だよな……？」

「な……んで知ってんだよ。気持ち悪い……忘れろ、ぐあっ?!」

また、今度は頬じゃなく腹に一発入れられた。みぞおち付近で、俺ははんばない痛みに地面に膝立ちし、両手で腹を抱えた。

「先輩に対する口の聞き方には気をつけろよ、高校は中学とは違えぞ」

どの口が言っただコイツ……。お前だって、先輩の前じゃタメ口なんだろ……？ 何を偉そうにしてんだ……。

「で……なんで俺に話しかけたんスカ……、肩ぶつかった分けでも、別に先輩に何かしたわけでもない……ん……っ、顔が気に入くわないとか言わないでよ……？」

「んなんじゃねえよ。……お前、いつも有沢 壺の隣にいるだろ……？」

「い……ち………？」

その時黒澤の口から出た言葉は、中学校の時に同じクラスになって、それから急激に仲良くなっていった、この学校に入学しても同じクラス。今一番仲の良い壺だった。

「そ、だけど。なんで……？　なんか接点でも、あんの？」

それにしても、腹が痛かった。

「まだねえよ。俺さあ、あいつのこと結構好きなんだよな。仲取り繕ってくんない？」

は……、結構好き？」

「取り繕って……なんだよ……？」

「そのまんまの意味だろ、お前馬鹿か。……あいつと、セックスしたいんだよ。分かったか？」

「セックスって……はっ。てめ、ホモかよ。……うせろ……うあっ！」
また一発。いい加減視界がハッキリしなくなってきた。

腹も痛いし、頬も痛い。

「だから口の聞き方に気をつけろって」

「はあ……うぐっ……はあ……痛っ……」

人に殴られたのは高校に上がって、これが初めてだった。中学2の頃に一回親父に殴られて、それっきり。

久しぶりに感じる肌がピリピリする感覚は、俺には耐えられなかったようだ。

俺は屈辱にも、痛みに失神してしまった。

逃亡

「ん……んん？」

目を覚ますと、そこは誰もいない部屋だった。

その部屋の隅にある2段ベッドの下の方で、俺は眠っていたらしい。

多分寮だと思うけど、俺の部屋とは違うベッドの位置、机。明らかに殺風景すぎる装飾品の少なさ。

少し怖くなり、早くこの部屋から出ようと思ったけれど、さっき殴られた腹がつきんつきんと痛くなり、俺の動きを止める。

「はぁ……ここ誰の部屋だ？」

辺りを見渡しても、人の名前が書いてあるものはどこにもない。

「動かないほうがいいと思うけどなぁ」

「?! 誰……?」

2段ベッドの上のさくから勢いよく顔を出す、人がいた。

男っ……て言う事はここは男子寮?

「ごめんね、驚かせた? 僕、静と同室生でさ……あ、同じ2年生。

……今アイツ、飲み物買いに行ってるよ」

「……先輩……すか」

アイツとは真逆に優しそうな人だった。黒髪眼鏡……どっからどう見てもガリ勉系。そんな人が黒澤 静を呼び捨てなんて……しかも苗字じゃなくて下の名前。

「俺、黒澤に殴られて失神して、それからどんな経緯でこの部屋に辿りついたんですか? ……まさか自分で来たとは思えないし」

「ん? そんなん決まってるじゃん。静が連れてきたんだよ。君の事担いで」

「かつっ……っ?!」

拉致? 俺まさか……黒澤が飲み物買って帰ってきたらボコられるとかないよな?

「俺……もう帰っ」

「君も馬鹿じゃないんだから、逃げるとか思わない方がいいよ」
言葉をさえぎられ、俺はギクつとした。『君も馬鹿じゃない』って……逃げんなって言ってるのと同じじゃん！ 逃げてても無駄なことだろ？！

「まあ、なんだ。災難だったね。……アイツ、友達になったら結構いい奴って思えるんだけど、初対面とかアイツに関わり少ないと、ただの暴力野郎にしか思えないからさ……」

結構いい奴って思えるのは数少ないと思うけどなあ……。

「君、……矢西君であってるよね？」

「ん……、まあ」

何でアイツもこの先輩も俺の名前知ってんだ？ ……俺は先輩に目付けられるようなことはしてないと思う。

「やっぱり、壱ですか？」

「ん？」

「先輩も、壱のこと、知ってる……狙ってるんですか？」

有沢 壱。俺の中学時代からの友達。

「僕？ あはは、まさか。僕はノーマルだよ。でも、あの子は僕から見ても結構凄いと思うよ。弓道のスポーツ推薦で入ったのに入学したと同時に止めたって。……しかも、頭が凄く良いんだってね？ 学年トップだから、校長も理事長も何も言えないって……」

「どこまで知ってんすか」

「少なくとも……君も有名だけどね。『有沢 壱の友達なのに、頭脳普通。特技もとれない矢西君』って……」

低評価じゃないですか……。

「ちなみに言うと……その何もない矢西君に仲を取り繕ってもらえば？ って静にアドバイスしたのも僕、ボコるとはさすがに思っ
てなかったけど……ごめんね」

手を合わせて謝る先輩に、俺は絶句してしまう。
軽すぎねえか。

意味もなくあんな不良に絡まれて、意味もなく……っというかちよっと俺にも非があるけど、殴られて、意味もなくここに連れてこられて…。

それで……上から顔出して手会わせてごめん？

「……っふざけんな」

「あれ」

ここは抑えろ、俺。さっき黒澤 静にきもいだのうざいだの言っ
てボコられた事を忘れるな。

そう自分の中で何でも唱え続けながら、俺は急いでここから出る
覚悟を決めていた。

腹は痛いけど、少し我慢すればいいだけ。いつまでもこんなところ
にいたら、黒澤が帰って来たとき、どうなるかわからない。

この先輩も先輩だ。何でわざわざ俺なんかに話しかけるみたいなの
事を言ったんだ。そんな事言わなければ、俺は今頃楽しいゴールデン
ウィークを迎える準備をしていたはずなんだ。

「怒ったかな？」

「めっちゃ怒ってねえっす！」

「……分かりやすいなあ」

「自分の部屋に帰ります！」

ベッドにつかまりながら、俺は必死にそう訴えていた。腹が痛す
ぎて、背が曲がる。足もカクカクしすぎ。

……俺、こんなに弱かったっけ？ つうか体力なさすぎ……中学
3年間ずっと帰宅部だったからか？ なんにせよ、屈辱的。

壁に手をつきながら、少しずつ扉に近づいていく。もうすぐ、ド
アノブに手がつく。帰ったら部屋で存分に休もう。とりあえず寝る。
手を伸ばし、ドアノブに触ろうとしたときに、ゆっくりと、ドア
が開いた。

人間は何かに必死に全力を出しているとき、全身からアドレナリ
ンがでて時間がゆっくり感じるなんて先生が言ってたけれど、まさ
にそんな感じ。

DVDとかビデオでスローモーションを見ているような、そんな感覚。

手を伸ばしたら届く距離にあるドアノブが、ゆっくりと、遠ざかっていく。

そのかわりに届く距離に来るのが、着崩ししまくりの制服を身にまとった、黒澤 静。

身代わり

ふと少し上を向けば、驚いたような、うざったいような目で俺を見下ろす黒沢の顔。後ろを振り返れば、ベッドでこうもりみたいに逆さになった状態でこっちをみる黒沢の同室生。

完全に逃げ場が無くなってしまった。

「逃げてんなよ」

冷たい一言。上下関係を思い知らされたような気がした。

「……っつ」

「オラ、中入れ。っーか俺が入れねえ……」

胸倉を掴まれ、奥へと連れて行かれる。投げられるなんて思ってたけど、それは俺の勘違いみたいで、ゆっくりと床に座らされた。

「飲め、おごってやる」

渡されたのは、炭酸入りグレープ味の缶ジュース。

……俺、炭酸系苦手なんだけどな。

「どーした？」

「あ、いや……」

この状態で殴られるのは辛い……っというか嫌だ。

ここは我慢して飲もうと……俺は缶の蓋をあけ、一口含んでみれば、歯と舌に染みる。飲み込めば、胃に染みた。この感覚は、やっぱり嫌い。

「静ー、僕頼んだやつは？」

「オラヨっ！」

ベッドでこうもりみたいな格好を通常体制に戻しながら、先輩は黒澤に一言。

その言葉にペットボトルを何の躊躇もなくベッドの上へと放り投げる。それを平然と受け取る先輩。なんとも意気投合しすぎている。

「……」

「……？」

黒澤が俺の睨みあげたかと思えば、いきなり、俺の目の前にドカ
つと座り込んだ。

「な、なんで俺の目の前座るんだよ？」

「はあ？　ここは俺の部屋だ。どこに座ろうが俺の勝手だろ。文句
あんのか？」

「まあ……そだけど。別に、文句はない」

何か、一つでも否定的な台詞をはいたら、殴られそうでも言え
ねえよ……。

あんまり雰囲気怖くないベッドの上の先輩にチラチラ目を配る
けれど、それを無視して飲み物を飲むのに集中している。もうどう
したらいいか分からない状態だった。

「っ……有沢は」

「え？」

「有沢は、好きな食いモンとかあんのか？」

「好きな……食い物？」

突然、あいかわらず睨みながら、凄いういウイしい質問をして来
た。

ていうか、好きな食べ物？　……そんなん聞くことねえからわか
んないぞ！　えーと……？

俺は脳を全力でフル回転させながら、壺が良く食べている食べ物
を探した。そこで、俺は思いつく。

「強いて言うなら……食堂の……おにぎり、かな」

「おにぎり？」

「安さと手軽さと……具が好きらしい……デス」

「そうか」

コイツ……本当に、壺のこと好きなのかな？　……好きな食べ物
聞いてくるなんて、モロ初恋をしてしまった小学生じゃないですか
？　ドラマの不良って、こんなだったっけか？　もっとこう、暴
力しか取り柄がなくて、恋愛観が軽くて、無理矢理に奪おうとして
さ。

でも、忝にそんな事されたら俺……コイツの事すげえ怨むな。

「お前は——有沢が好きか？」

やっぱり、モロ初恋した奴の言うような質問。

「え？」

「有沢が好きか？」

「……好きって言ったら……？」

「潰す」

「……」

前言撤回。

奪う気まんまんじゃないスカ。あーあー、そんな「殺します」って言ってるようなぎらぎらした目で見ないでくださいよ……。

「好きですけど、それは友達として……だから。勘違いしないで……くだ、さい」

「矢西、そんなにビクビクしなくていいよ。この部屋に俺がいる限り、暴力なんてさせないから」

ベッドから階段も使わず、ジャンプをして床へと降りる黒髪眼鏡先輩。大きな音がして、俺はびっくりして目を閉じた。

もう一度目を開けると、すぐ近くに黒髪眼鏡先輩から差し伸べられた手があった。

俺はその手を半信半疑で握る。

「俺は柴田^{しばた} 奈緒^{なお}、嫌いな事は喧嘩、流血、暴力沙汰全般だ。よろしくな」

さすがに黒澤と友達とは思えないほどの嫌いなモノが勢ぞろいだな。……まあ、見た目からして「高校卒業したら大学に行きます！」宣言しそうな格好だからな。——シワのない制服、染色のしてない黒い髪の毛、それに加えて黒ぶち眼鏡。

黒澤とは逆すぎる。

「てめえな、自己紹介なんてみみっちい事してなくていいんだよ！」
真逆すぎる。

「お前の方こそ、意味もなく殴ったんだろ？ 謝れ」

それに加え律儀。モロ真面目じゃねえか。

「いや……謝るとか、それはいいんで、部屋に戻させてください」
そうだ、俺はこの部屋から出て行きたい。早く出たい。いつも俺の吸う空気とはとても違いすぎている。いつも吸っている空気は、安心で安全。それなのにここは、何かあったらすぐ悪い方向に進むような空気しかしない。

「てめえが有沢との仲を取り繕ってくれたら一発で戻れるけどな」

「ちょ、静。直球すぎるよ」

「断る」

「矢西も直球だなあ、全く」

いくら俺でも、友達を売るようなマネは絶対にしない。しかも、コイツにはもつとしない。

壱は妙に男らしいところがある。きっとコイツにも冷たくせつする筈だ。そう、黒澤にボコられる前の俺みたいな感じ。そんな態度でコイツに接したら、いくら好きと言っても、壱もボコボコにされる可能性がある。

別に壱が弱いと言っているわけではない。むしろ俺より断然強い。だから態度も強いし、存在もでかい。

「壱は大きな目標でもあるし、俺の友達なんです。だから、仲を取り繕うなんてしないし、アンタなんか絶対にやりたくないし、近づけさせない」

「てめえ……」

「アンタなら街に行って可愛い女の子にでも会えば、きっと忘れるよ、壱のこと」

「コレは真面目な話だよ……」

やっぱり、キレル寸前のような顔をしている。俺は今もびびりまくって手が震えている状態だけど、柴田先輩が近くにいるという事で、なんとか耐えている。

「ふん……じゃあ、俺ならいいの？」

柴田先輩が自分を指差し、不思議そうに聞いてきた。

少し答えに迷ってしまった。

「ていうか……なんで壱が『男も恋愛に入る人間』前提な話に進んでるんですか。もしノーマルだったら……」

「関係ねえっ！」

俺の言葉を最後まで聞かず自信満々な声で、また俺の胸倉を掴みあげ黒澤は言った。

「そんなんその気にさせちまえばコッチのもんだろ」

その男らしい考えに、少し共感できるところもあったけれど、俺は逆に黒澤の胸倉を震える手で掴みこう言った。

「アンタがするのはただの脅しだろ？ アンタはずっと喧嘩してるから、その辺歩けば他校の生徒に絡まれることもあるだろうし、壱はそういう面倒なことを嫌がる性格なんだ。アンタと壱は合わないよ！」

「んなの付き合ってみなきゃ分からねえだろ！」

「付き合わなくても大体分かるだろ？！ ていうか何でお前は壱が好きなんだよ？ 何で壱なんだよ？！ 理由なんてちよっとすれ違って『あ、いけるかも』とか思っただけだろうしさ！ そんな男なら誰でも良かったって言ってるようなもんじゃん！」

黒澤の俺を睨み込む目が、俺のへたれ心を震わす。

「壱は俺の大事な友達だから！ 男ならいいんだろ？！ じゃあ、俺が相手にでもなってやるから、壱には手え出さないでよ！」

「は……てめえ、男とやったことあんのか？」

「……っある！」

大きな嘘をついてしまった瞬間だった。

「だから……手え、ださないであげて……」

「ふざけんなよ、……お前」

そう面倒臭そうにむかついた声を上げたあと、胸倉を自分の方に引き寄せ、コイツは力強く俺にキスしてきた。

「……っ！」

人の目も気にせず。

今夜

吸い付く舌が、俺の脳をビリビリと麻痺させていく。気持ち良いより、気持ち悪い。気持ち悪いというか、グロテスク。

「はぁ……んんっ」

何度逃げようとしても、顔を抑えられてしまえば何もできない。どンドン俺の酸素が無くなっていく。何とか呼吸をしても、それを許さないかのように激しさを増していく。

「静、やめとけ」

柴田先輩に口で言っても黒澤は止めはせず、柴田先輩が無理やり俺と黒澤を剥がすと、ようやく黒澤はキスをやめた。

「てめえ、男とやった事あったんじゃなかったのか？」

「……あるに、決まってんだろ」

酸欠状態スレスレ。俺、あのまま死ぬと思った。

肩で息を整えながら、俺は唇から垂れた唾液をシャツで拭う。

「キス、下手だな。本当に経験あるのか？」

キスに上手いも下手もないだろ。……しかも、あんないきなりされて、思考が追いついてくるとでも思ってたのか？ 俺には無理な話だ。

「はぁ……あ、りがとうございました。…柴田先輩……んっ」

お礼を言くと、苦笑いをした先輩に対して、俺は羞恥心でいっぱいになってしまった。

「俺……っ、もう行くんで。——お願いだから、壺には手をださないで」

痛む腹、頭。まだ感触の残る、口の中。

今日は嫌な事が多すぎるよ。

「おい矢西」

「……あ？」

金髪に、少しの赤髪。自分の髪の毛をくしゃりとしながら、黒澤

は言った。

「今夜、またここに来い」

「……」

壱のため、友達のため。体一つなんだよ、男にされたからって、俺はどうでもいい。大丈夫。怖がらなくていい。震えなくていい。これは対したことのないことなんだ。

自分に言い聞かせ、俺は腹を抑えながら部屋をゆっくりとあとにした。

――柴田Side.

「どういうつもりだ？」

矢西がいなくなった僕達の殺風景すぎる部屋に、僕の低い声が響いた。

静はそつと僕の顔を見てから目をそらす。

「アイツ、俺が有沢好きな理由……軽く当てたからムカついた」

「さすが有沢の友達だけあるって事なんじゃないの？ ……で、なんでキスなんでしたんだ？ 静が好きなのは有沢だろ？」

「だから、ムカついたから」

全く、静はこれだから困る。

「惚れたの？」

「俺が矢西に惚れたんじゃないやねえ。アイツが俺に惚れるんだ……何回かやれば、好きになるだろ。絶対。……それで、最終的には有沢との仲を縮めてもらってから、捨てる」

「……悪い奴だなあ」

悪い顔で笑う静は、本当に切れたんだと実感する。

確かに、静は有沢 壱とすれ違っただけで興味を持つようになった。単にやってみたい。あんな子がどんな顔をしてよがるだろうか。ただそれだけだった筈だった。

だけどもある日、静は僕にこう言った。

「俺、本気で有沢好きになったかもしれないねえ」

このときは、本当にびっくりした。

いつも喧嘩ばかりのコイツが、同性でも、好きな奴が居るなんて初めて自覚したんだ。だから僕はアドバイスしてやった。

……その結果がこれか。

がっかりでもないし、別にいいとも言えないし。僕は静に何も言っ
てあげられない。

殴りかかって逆にもフルボッコにされるだけだしなあ。とりあえず、矢西には悪いけど、矢西が傷つくのは100%かな。

とりあえず、止めれるだけの事は止めてやる。

後は矢西と静の判断だけ。

「それで？　今夜矢西がきたら、僕はどこへ行けばいいのかな？」

「あ？　……その辺ブラブラしとけよ？」

「はあ……静はどこまでも王様だなあ。僕少し悲しいよ」

「？」

ごめん、矢西。

深夜

「……いったあ！ ……最悪……」

ベッドに寝転がりながら、オレは痛み震えていた。

「大丈夫？ どうした？ 喧嘩か？」

壱が心配そうにベッドを覗き込んできた。

「いや……その」

さすがに黒澤の事は話せないし、俺はとりあえず腹を打ったことにしておいた。そうか……と、どこか不に落ちない感じでベッドから離れる壱に俺はどうにもならない感情を知った。

『お前のせいだよ』なんて、俺が自分でやった事なんだから死んでも言えないし、どうにか黒澤を壱に近づけさせないためにしようがない事なんだと自分に言い聞かせて。

頭がおかしくなりそうだ。

「今夜、またここに来い」

黒澤は最後にそう言った。

もし行ったら、俺はどうなる？ ボコボコに殴られる？ 犯される？ そんなことを考えたら、行きたくなくなるけれど……もし行かなかったら？

その時は、壱が……。だから、絶対に行かなきゃいけない。――まずは何も考えずに寝よう。寝て回復、それからだ。

俺は毛布を被り、昼飯も食わずにゆっくりと眠りに落ちて行った。最初はかなり浅い眠り。それからじょじょに大きな音がなくても起きれないような深い眠りに付く。

*

起きると、部屋の電気はもうとくに消えて、壱ともう一人の同室生の寝息が聞こえてきた。カーテン越しから月の明かりが漏れている。

俺はゆっくりと頭をかきながら起き上がった。

「……今何時だ？」

必死に時計を探す、忘れていた。この部屋には時計がついてない。いつも目覚まし時計と腕時計で時間を確認していた。

俺は急いでベッドから下り、自分の机の上に置かれた目覚まし時計を取った。

「じゅっ……?!」

リアルな現時刻にビックリし、俺は大きな声をあげそうになり、思いつきり手で口を抑えた。

12時。

正確には12時3分。

「っ！」

俺は部屋のドアを開けて思い切り走った。駆け足がデカかろうが関係ない。裸足だろうがどうでもいい。ただまっすぐ、黒澤の居る部屋へと一直線に階段を下りていった。

黒澤の部屋のドアを見ると、俺は少しペースダウンして早歩きでドアの前に向かう。

深呼吸の間もなく、せかせかとドアを開いた。

暗い空間、さっきの殺風景。本当に誰も居ないかもという思いにさせるところ。

「……はぁっ……くろさ……」

「ドア、閉めろ」

「え? ……」

ドアを閉めろ。確かにそう聞こえたので、とりあえず中に入ってドアを閉めた。全身が真っ暗に包まれて、さっき自分の部屋に漏れていた月明かりもない。

「遅かったな、来ないかと思った」

「んなわけないでしょ……寝坊デス、よ」

「寝坊か。余裕だな」

どこに向かって喋っているのかもわからない暗さに、俺はただどこから飛んで来る黒澤の会話に答えるだけだった。

「手、出せ」

「て……?」

手を出せと言われ左手をすっと出すと、ヒヤッとした指先で握られている感覚がした。俺はそれにビクリするわけでもなく、ただ目を見開くだけだった。

「……見えるのか?」

「暗闇には慣れてる」

手を引かれ、俺はどこかに導かれるように歩いた。いきなり手を離されたかと思えば、強引に背中を押され、ベッドに押し込まれた。今からやる事に、うすうす気付き始めた瞬間だった。

ギシッと黒澤もベッドに入ってくる音がして、目の前に黒澤の気配がした。少し目を凝らしていると、人の形がだんだんと見えてきた。

「……目、慣れてきた」

「そうか」

「……っんぐ!」

頭を押さえつけられるように枕に叩き込まれる。脳が一瞬浮いた感覚がして、頭がくらっとした。

コイツは、本当に乱暴だ。

俺の顔の近くにある目を見つめ、俺は言った。

「キスは無しです」

「最初したのか?」

黒澤の笑った顔は、最高にムカついた。

行為 性的描写有（前書き）

暴力的描写？と、性的描写があります。

15歳未満は見ないことと、苦手な方は見ないで頂くことをおススメします。

行為 性的描写有

「ん……う、気持ち悪っ」

「あ？ しっかり反応してんじゃねえか」

「ああっ！ そこ……やめ、ろ！ つか……柴田、センパイはっ？」

「アイツはその辺うろついてるだろ」

「なっ……?!」

助けも求められない、止めてくれる人もいない。

ベッドの中での、性行為序盤。黒澤の指が俺の肌を触るのが気持ち悪い。

変な感覚に飲み込まれないように、俺はしっかりシーツを握り締めるのに精一杯だった。その反応を楽しむかのようにニヤニヤ笑いながら服を脱がせる黒澤に、最高に殺意を沸く。

「初めてじゃないんだろ？ 随分ウイウイしい反応だな」

「ざけん、…っ」

何がなんだかわからない。コイツは何をしているんだ？ 俺は何

をすればいい？ このままでいいのか？

何もかもが初めてで、しかも経験したくない事なのに、……流されてる。

「ふう……っん、く」

コレで、コレだけで、壺を守れてるコトになってんのか？ 分からない。頭が混乱する。それでこの気持ちの悪い感覚。

口から漏れる女みたいな声。

今俺がいるのは女の立場、普通なら俺が見下ろしてるはずなんだ。

「……？」

「はあ……あ」

頼むから、早く終わってくれ。

「てめ……何泣いてんだよ」

「あ？ 泣いてね、よ」

「泣いてんだろ」

「泣いてね、から……早く入れて、早く終わらせて、早く帰らせろ……っ」

腕で目を覆いながら、俺は必死に黒澤に言った。

「ああ、そっか。経験あったんだったな。別にゆっくりやんなくてもいいよな……」

わざとらしく、黒澤が俺に言う。

何だよ、経験なかったらなんかあるって言うのかよ？　どうしてもいいけど、その言い方ムカツク。

「んじゃ、お望み通り」

そう言っ、黒澤はズボンを脱ぎ、準備にとりかかる。

同じ男とはいえ、黒澤のグロテスクなんて見たくなくて、俺は歯を食いしばって早く終わるように願っているばかりだった。

やっぱり、今の俺は黒澤から見れば女みたいなもんなのか。

かえるが仰向けになった状態になつて自分が醜^{みにく}過ぎる。

「つつ……」

ふと訪れる異物感に、俺は失神しそうになってしまった。

「ふぐっ、ぐあ、あああ？！」

痔の痛さなんて比べものにならないくらいの痛み。一瞬ホントに意識を飛ばしたけれど、痛みに強制的に引き戻される。

地獄。

「つつう……あ、くろさっ。お、前……抜っ……うぐっ！」

「あ？　馬鹿言うな、っ、今更、引けるかよっ」

俺に馬鹿言うなって言ってるお前が馬鹿言ってるじゃねえよ。

上手く息ができなかった。ちゃんと酸素が吸いたい。このまま死んじやいそうで怖い……。コイツにやられながら死ぬなんて、そんなのは願ひ下げだぞ。ちくしょう。

「や、キス。はっ、駄目、ダメ……っ！」

黒澤の歪んだ顔がキスしそうなほど近くて、俺は一生懸命に顔を横に向けた。

「んだよっ……クソ」

「つつぁ！」

やけくそなのか、黒澤は首のちょうど髪のかかるところに噛み付いた。

痛い、熱い、苦しい、屈辱、最悪、怖い。

今の俺にはただそれだけだった。

「お前……っい、つか、……ころす……っ！」

「は、っ……じよ、等……」

俺は黒澤の背中に手を回し、ぎりつと爪を立てた。

＊

「は……」

起きると、そこは昨日の昼みた風景と全く同じ場所だった。殺風景で何もない。だけど、なんでこんなにも嫌気が指すのか。

「んぐっ、腹……痛え……な」

起き上がろうと腹筋に力を入れると、痛い刺激が俺を襲った。

せっかく昨日の夜起きた時にはもうなんの痛みもなかった腹が、また痛み出した。殴られた時よりも数倍痛い。

「柴田センパイ」

柴田センパイが上にいるかもしれないと声をかけてみるが、返事がない。黒澤もいないみたいだし、今部屋に戻るのは絶好のチャンスなんだが。

身体が言う事を利かない。

まったく動かない。無理に動かすと痛い。寝返りを打とうとするだけできつい。

「じじいかよ……クソ」

嘘であってほしいと願っても、この痛みが本物。

夢であってほしいと思っても、俺が全裸なのは、夢じゃない。
鬱になる。

「……」

現実逃避に、俺はもう一度眠りについた。

意図

抱き終えた後の爽快感は、最悪な程気持ち良かった。隣で気持ち悪いような感覚にうなされながら眠る矢西の顔に苛つく。

この罪悪感。悲壮感。

「てめえ初めてなんじゃねえかよ」

昔から女ばかりと遊んでた。中2の頃はもろに遊んでた。

前略プロフィールで年上の女と知り合って、ホテル代を払ってもしっかりは性行為を教えてもらった。その繰り返し。

女にも嫌気がさして、とうとう男に手を出してみた。

案の定、使えると思った。女みたいに子も産まねえ、快感も女と変わんねえ、……女より便利なんじゃないか、と。

初めての男は、ホモで噂立っている先輩だった。

誘えば、すぐその気になってくれた。

トイレの中、初めての結合はあまりにも気持ち良過ぎた。いや、男相手にその気になれる俺って、一体なんなんだと失望したかもしれない。でもそんな事はどうでもいいくらい、脳が浮き上がった。

先輩との性行為は幾度と続いた。それでも終わりはやってくる。

先輩は受験を迎え、卒業を迎え、中学生を卒業した。新しい高校生になった。そして、そこで先輩との連絡は途絶えた。

今度は俺が卒業する番。

現段階での学力ランクはI。それなのにどうして俺は基準ランクD～Fの雛ヶ丘第一に受かったのか？

それは、ただのまぐれだった。

馬鹿みたいに受験勉強は頑張った。禁欲もした。頑張って勉強しても、俺のランクはGまでにしか上がらなかった。それでもアホみたいに頑張った。

それで受験日。

俺は2日間徹夜という地獄の中で受験を迎えた。大量のコーヒー、

常備の目薬。眠いという境地を越えているので、もう睡魔なんて襲ってはこなかった。

濃いくまを目に付けながら問題用紙を覗いたときに、俺は驚いてしまった。

問題が簡単すぎだ。

『これは何かの間違いか?』

なんて思ったが、よく見てみれば、俺が何十回もやり直した問題がそこに書き記されている。俺のやった練習問題に酷似しすぎてた。まあ、それが5教科中3教科も続いてたから、これはもうまぐれ中のまぐれ。

俺は本当に運が良かった。面接がなかった分、俺は本当に運がいい。この格好、髪の色。直すつもりはなかったので、安心した。

それで、当然の結果で合格した。その頃には柴田とも仲がよくて勉強も教えてもらって、進級もギリギリでできた。

2年の初め、俺はある一人の後輩と出会う。

有沢 壺。

名前はちよくちよく耳にした。どうせ地味でケチなダサイ男だと思っていた。予想は外れ。

俺は偶然にも廊下で有沢 壺と肩をぶつけた。俺が啖呵を切ろうとする前に、有沢は言った。

『すみません、大丈夫ですか?』

パリパリにクリーニングされた真新しい制服。顔立ちは少し大人っぽかったが、まだまだ子供というような感じ。

ケチどころか、真っ先に自分の前方不注意を謝った。

地味どころか凄く新鮮な感じ。

『んじゃ、俺行くんで。すみませんでした』

俺の脳がGOサインを出した。去っていく有沢は、もう俺の獲物のはずだった。

それなのに……。

『本気になった』

『へっ?! 何?』

あほみたいに変な声を上げてビックリする柴田に、俺は少しも
ってしまふ。

俺の方がビックリしていたんだ。何も予兆なんてなかった。突然
だった。

有沢 壺の笑顔を遠くでみている時に、いきなり胸が苦しくなっ
た。既に会ったことがあるから、一目惚れとは言えない。

とにかく、辛い。

『……本気になるのはやめとけよ。あの子が壊れるんじゃないかな
?』

壊れる? どうして?

『静はすぐモノを壊すだろ』

柴田の言っている事は、案外簡単に分かった。

俺は乱暴にモノを扱う。きつと有沢 壺もそうなる筈。俺は有沢
壺とは結ばれないほうがいい。……そういたい違いはない。

『……』

『黙るなんて、どこまで氣い落としてんのさ……?』

『泣いてねえよ!』

『そんなことは言っていないよ……』

他人にそこまできっぱり言われたことは久しぶりだったから、重
みが増す。俺は何も言えずにいた。

『んまあ、僕が口出しする事じゃないしね。手伝うよ』

あっさりの了承。

俺は驚いた。

『いい? 静、恋愛って言うのは、自然なのが一番なんだよ』

『自然?』

『うん、だから……有沢 壺の隣にいつもいる男の子を使おう』

『どうすんだよ?』

『まずは友達になって、それから仲を取り繕ってもらおう。……勿論、
脅迫なんてしたら終わりだね』

そんなわけで、これは大体全て、柴田のせい。

事後

「静」

一人で考え事をしていると、柴田がドア越しからひよいと顔を出す。昨日の夜『どっか行ってる』とか言って、本当に朝まで帰ってこなかったことに俺は少し感激した。

「……やっちゃったか…」

「ああ…」

「唸ってるじゃん、可哀想に」

隣で苦しそうにして眠る矢西に、柴田は同情していた。俺はベッドからでて、上半身裸にシャツをはおる。

「柴田、食堂付き合え」

「えー？ うん、まあいいけど」

矢西を置いて、俺達は食堂へと向かった。

「ていうかシズカ、昨日の夜は空気読んで一度も戻って来なかった僕に対して、何か言う事あるんじゃないのかな？」

「ご苦労さま」

「え、なに?! それだけ?!」

何かをすぎるように、柴田は物凄い目力で俺を睨みこんだ。俺は圧倒されながら聞く。

「んだよ……?」

「おごって……?」

両手を差し出して、俺を見上げる柴田。

「昨日飲み物奢っただろ」

「アレは矢西の情報代だろ?」

コイツの性格の悪さに、みんな騙されている。クラスの奴等も、先公どもも、俺を手懐ける唯一の男なんて称えているが、それは全くの間違いだ。

コイツはきつと、俺を見下しているか、普通の人間だと思っ

てねえ。

でなきゃこんなこと言えねえ。

「醤油でも吸ってろ」

ミックスフライ定食の食券を押して、俺は柴田を冷たく突き放した。

「死ぬ死ぬ！ 酷いなあシズカは！」

俺が食堂の婆さんに食券を出した後に、柴田はズボンのポケットから小銭を出して食券機に小銭を突っ込んだ。

「それで……シズカ、これから矢西をどうするの？」

同然に人の居る前でそういうことを言っちゃうコイツの方が問題児なんじゃないのか？

「どうするも何も、利用するに決まってるだろ」

あの爽快感、罪悪感、悲壮感。……溜まらなかった。中学ん時の先輩とは、また違う感触、手ごたえ。中毒になってしまいそうなほどの気持ち良さだった。

アイツを抱いてたら、いつもあの感覚が味わえる。……味わえなくなったら、有沢 壺との中を保ってもらってから捨てちまえばいい。

「シズカは鬼だね」

「協力的なお前もだろ」

「全然、否定的だよ。僕はシズカが怖いからね、いつ殴られるか分からない。脅されてるー」

わざとらしくそういう柴田に、俺は少し笑ってしまった。

＊

「あれ、寝てる」

部屋に戻ると、起きている思っていた矢西は相変わらずやすやすや気持ち悪いそうに寝ていた。腹蹴って起こそうとしたが、さすがにそれは可哀想と思い留まった。

「ていうかシズカ、昨日合計で何回やったの……」

矢西に近づいた柴田が、暗い顔して俺に聞いてきた。

「……」

何回だって……。――最初、その次、その次……。

「……5回くらい……？」

「多すぎ、真面目に怖いよシズカ。ほら、肌赤い、手首にあざ。……ダメじゃん外傷与えたら……って内側の傷が一番きつい……」

よく分からないことをぶつぶついつている柴田を無視して、俺は椅子に座り込んだ。

「あー！ ……煙草吸いてえ！」

「もー、突然なに、禁煙1年経つというて」

愛と友達

「おい、起きろ。矢西」

ノイズのように気持ちの悪い声質で起こされた。目の前には俺の身体の自由を奪った張本人。

「体、動かないんですけど……」

「当たり前だろ。今日一日そうしてろ」

「ふざ……っけんな。なんで、俺がこんなところで……いたたたっクソ……」

何度反抗したって、黒澤に少し軽く腹を押されればそれだけで鈍痛に変わる。そんな最悪な地獄みたいな状態。

「諦めろ。お前、もう俺から逃げられねえんだよ」

「は？　どういう意味……」

「セフレ」

「……は？」

「セフレ？　……セックスフレンド……？」

「それが、何すか」

「お前と、俺のこれからの関係」

「これから？」

「ふざけんな！　勝手に決めるなよ！　大体、こういうのは今日だけって……」

「んなことは一度も言ってねえ」

いや、確かに言っていないが、あんな気持ちの悪い事嫌いな奴と何回もやるってのか？　俺今度こそ死んじゃうぞ！

「有沢 壺」

「……っ」

「手え出されなくなったらおとなしく俺に従ってろ。従順な俺のモノになれ」

『有沢 壺』

もはや、俺と黒澤の間の魔法の言葉みたいなモノだった。黒澤がそう唱えれば、俺は何も出来なくなってしまう。

だって、壱が苦しむ。手を出されたら俺の苦勞が水の泡。

「……わかった」

「そうだ。最初からそういつとけば痛え思いしねえんだよ」

「好きじゃない男なんて抱いて嬉しいかよ」

「楽しいんだよ」

コイツは、本当に最低な人間なのだと、俺は今心の底から思ってしまった。同性を抱いて楽しいだなんて、どうかしている。

今の俺はコイツにとってのただのおもちゃ、いや、おもちゃ以下。

「ゆっくり寝とけ。今日は許してやる」

「うるさい……」

最低最悪。俺の人生狂ってる。

体が動かない俺に何もしないコイツは、今何かしらの善を持っている。こんな気持ちの悪い奴に優しくされるなんて、反吐が出そうだ。

どうせなら廊下に捨てられた方が嬉しい。いや、Mとかじゃないんだけどさ……。

「壱の事、好きなんじゃないの……?」

「好きだ」

「だったらなんで……」

「恋愛感情と性行為は別の話しだろ」

「お前、性行為は友達としかしないのか?」

セックスフレンド。

「好きな奴ともやるよ」

愛のあるセックス。

「意味……分かんない」

「愛の無いセックスの方が気持ち良いんだよ」

ますます意味分からない。愛ある方がセックスするのは気持ち良いものだろ? じゃあ何か? 恋人達がしている性行為は最大の気

持ち良さを得られてないってのか？

「俺は、気持ち悪かった」

「俺は気持ち良かった。だからお前をセックスフレンドにした。お互い、性欲処理道具と思えばいい話しだろ。そう深く考えんな」

耳元近くで呟く黒澤に、負けると分かっても殴りかかりたかった。

それでも動かない体に、俺は苛立ちを覚える。

「くそ……あっちいけよ……」

「俺の部屋だ。どうしようが俺の勝手だろ」

スーパ―俺様野郎。

恋色のない俺の日常

あのゴールデンウィークに突入した日の夜、俺は繋がりとくもない奴と強制的に繋がった。何回も何回も、やめろと口にしてもやめず。結局朝には立てないし、ぴくりとも動けなくなってしまった。

その朝の日に、俺は正式にアイツのセックスフレンドになってしまった。

セックスをする友達。

体だけの関係。

恋だの愛だのそういうのは一切ない、セックス。黒澤は、ただ遊んでるだけなんだ。

……それから言うもの、俺は黒澤に抱かれ続けた。授業中の屋上。倉庫、トイレ、黒澤の部屋、保健室。学校中に俺と黒澤のセックスの跡が残ったように思えた。

セックスをした後にその場を訪れると、絶対に俺は黒澤を思い出す。

嫌悪感で満たされると、凄く気持ちの悪い感覚になった。保健室に行こうとしても、犯られた跡が残っている。

俺は具合悪い中、必死に授業を受けた。

唯一黒澤に会わないのは、俺のいるクラスと、俺の部屋。会っても話しかけて来ない唯一の場所の、食堂。

多分、壺のおかげなんだろうと思う。

俺のクラスには壺がいる。俺の部屋には壺が居て、食堂ではよく壺と飯を食っていた。壺が俺と一緒にいるとき、黒澤は絶対に俺には話しかけなかった。

「んっ……あっあっ！ ふあっ、っつ！ ううっ」

「誰もいねえんだし、もっと、声、出せよ……っん」

「むちゃ……いう……あっ、なあ！ やあっあ」

俺の隣に壺を見たその後の行為の黒沢はいつも、少し俺に優しくった。いつも髪の毛を引っ張ったりいきなりで痛い思いをしているのに、壺を見た時は俺を触る手が優しい。

セフレになって何ヶ月か経って、最近見つけた。優しい日はいつも、黒澤は目を閉じていた。

壺を思っているのか何なのかは知らないけど、俺を身代わりにしているようで、俺はその優しさが妙にムカついた。

「はっ、はぁ、はぁ……っう……ふはぁっあ」

「はぁ……はぁ……っはぁ」

事後の休憩。

ただ、俺と黒澤だけのあがりまくった息だけが聞こえていた。

「……黒さ……も、やめてよ……跡付けんの」

「あ？ 俺の勝手……」

「勝手じゃないよ、はぁ。俺の、からだだぞ……ふぁ」

「あ……つまんねーこと、はっ、言ってるなよ」

性行為が終わると、黒沢はすぐにいつもと変わらない俺様に戻ってしまう。俺はコイツにまたコキ使われるのが嫌で、息がある程度整うとすぐに立ち上がって制服やら服を着なおした。

「俺……もー行くから」

「はぁ……おっ前、忙しい奴だな……」

「お前とはただのセフレなんですよ？ H終わったんならもう、隣にいる意味もないじゃん」

こう言うと、黒澤はムスっとした顔でそっぽを向いた。反論もできずに、ただ力強いことも言えないので、さっさと行けと言う様に俺に背を向けた。

「次はいつ……？」

黒澤のから居なくなる時は、いつもこうやって次を聞いていた。

「……今日の夜、11時。俺の部屋」

「わかった」

こうやって決めた時間、日にちに向かうと、すぐに性欲行為が始

まった。終わったら聞いて、聞いた場所に向かって終わったら次の場所はどこ？ ……と、いつもはそれの無限ループだった。それが、俺の日常になってしまったようだった。

春先

「矢西、出掛けんぞ」

黒澤と関係を持ってから時は進み、春。もうすぐ俺は2年生、黒澤は3年生になる前の話し。

「イヤデス」

何故だか分からないけれど、俺はこの日初めて黒澤にお出かけの命令を出された。ただビックリしたのと、本当に嫌だったので、俺はきっぱり黒澤に嫌だと断った。

「あ？ てめえ、……俺が誘ってんだぞ」

「誘いじゃなくて命令デシヨ」

「……お前、犯すぞ！」

「いつもされてます」

黒澤にも慣れた。言動、顔、しぐさ、行為。何もかもがいつもの目の前にあって、一番近くなる。だからこそ、俺は黒澤が大嫌いだ。

「まーまー静、落ち着いて」

柴田先輩は黒澤とは全く、全然逆の性格で冷静沈着に物事を考える。この人は俺に何の強要もしないから好きだ。恋愛感情ではなく、人柄が。

「矢西、何か用でもあるの？」

「いえ、あの……」

「なに？」

「ハッキリ言えよ馬鹿」

「お前も馬鹿だろ！ 人の事言えないじゃん！」

ほら、全然違う。それでこう言ったら、黒澤は機嫌が悪くなる。

「忝に勉強教えてもらうから……」

「……っクソ！」

ホラな。悪くなった。

売絡みのことを言うといつもコレだ。

「だってさ、静。先約があるらしいよ」

「……」

「な…なんですか……」

ジーっと俺を睨む黒澤に、俺は心臓をバクバク言わす。シーンとした部屋の中で、睨む黒澤と、黙る俺、それと、笑う柴田先輩。

ここにもし柴田先輩がいなかったら、俺は少し殴られているかやられているかだ。

さて、黒澤は何て言うか……。

「いいから行くぞ、早く準備しろ」

え……。

「だから、……」

「てめえの言い分なんざどうでもいいーんだよ」

「お…前……」

苛つくけど、たてつけない……。

だって俺はコイツより格段に弱いから。

「……でも、いち……」

「いいから準備しろよっ!」

突然俺の耳を襲う轟音。とんでもない近さで、とんでもない大きさで、……これきつと部屋の外まで聞こえてるだろ……。

ていうか、鼓膜破れるかと思った。

「……っ分かった」

振り向いて部屋に戻ろうとすると、柴田先輩がめちやくちや驚いたような顔で耳を塞いでいた。こういうのには弱いよな、柴田先輩。何でコイツとなんか仲良くしてられんだ……。ていうかアイツ、黒澤。

最近妙に機嫌が悪い。春なのに寒いからか？ ……それだけ？ ……な筈はないな。

「……ったく」

何かあったらすぐ俺にとぼっちりが来る。

まあ、まずは……壺に謝らなきゃな。『用事ができました』？
…壺のが先約なのに……。

部屋に入ると、壺の姿はなかった。もう一人の同室生に聞くと、
飲み物買いに行ったらしい。

とりあえじまだ外はやや寒いので、マフラーだけ首に巻いた。下
はウインドブレーカーだったので、上を羽織る。

チャックをしめたのと同時に、壺が部屋の中に入ってきた。

「ごめん壺」

俺は一目散に壺に駆け寄る。

「用事できちゃったんだ」

「……用事？ 何？」

「えーっと……」

「あー！ お前、……デートか？」

「はっ?!」

どんな勘違いしてんだ！

「違う違う！ こんな格好でデートも何もねーだろ！」

「ん……まあな。じゃ、何？」

「あ、ええと……」

やばい、言葉に詰まった。……肯定しとけば良かった……！

「？」

「有沢ー、あんま聞いてやるなよー。……矢西にもいろいろあんだ
ぜー」

なにやら意味ありげにニヤニヤと笑いながら、同室生は壺に言っ
た。お前もどんな勘違いしてんだよ……。

「お？ 何いろいろって」

食いつく壺。

「矢西が嘘ついてるってことだよー」

「はっ?!」

「ほー……矢西……勉強はいいから行って来いよ。後で何したか聞か
せろよー？」

「だから…デートじゃ…」

いや、……ここは肯定しとくべき？ んでも、…黒澤なんかとデートかよ、気持ち悪い。

「ん、ま、まあ、行ってくる！」

俺はやっぱり肯定せず、逃げ出すように部屋を出た。

初めての外出

少し急ぎ足で黒澤の部屋に戻ると、そこには柴田先輩しかいなかった。

「もう玄関行ってるよー」

玄関にいるらしい。

早くしないと殴られる。

俺はこの部屋にくる時よりも少し速足で玄関へと向かった。冷や汗かきまくり。

「おっせえよ、のろま」

「……」

のろまっつーか……お前が勝手にここに来るからじゃないすか。言いがかりつけんなよ。

……なんて言える分けもなく、俺はコイツの不満を心の奥底でストレスとして蓄積させながら外靴を履いた。

「行くぞ」

「ていうか、どこ行くの？」

一応金とか学生証明書とかは持ってきたけど。

「あ？ 決まってるんだろ」

「？」

「遊園地」

っんなこと決めてませんヨ。

「な、ななんで？！ ……アンタ、そんなところ好きだったの？」

「そんなわけねえだろ。殺すぞ」

「ゴメンナサイ」

「てめえ……最近楽しくなさそうだったしょ」

「……は？」

そりゃあ、アンタと会ってからいつもでしょ。アンタと一緒にいるからでしょ？ いつもいつも朝から晩までSEX、SEXって、

どこかの発情期してる動物みたいにやりやがって。

「不満かよ」

「え…何が？」

「遊園地」

「……」

なんでコイツ、今日こんなに優しくすんだ？ 壺に会ったか？

いや、……それなら今日をつぶりながら俺に話しかけてるよな……

「おい、答えろよ」

「いや……あぁっ！」

「なんだよ、うっせーな！」

「あ、ごめん」

そうかそうだ、そう言う事か。よく分かった。

コイツ、俺に飽きてきてる。コレは俺が最近楽しくなさそうだったからとかいろいろほざいて、俺を捨てて壺とくっ付こうとしているな……。

そんなことは俺がさせねえよ。

俺がお前に身体を許した意味がない。壺を守ろうとしてんだ俺は。そうやすやすと簡単におめえみたいな奴に壺を渡してたまるかよっ！

「黒澤」

「あ？」

「遊園地より、俺今欲しいものが会ってさ。近くのショッピングセンター回りたいんだけど……」

「……分かった」

隙をつくるなよ！ 俺！ 油断禁物！ 妥当関係持続！

「矢西、お前……」

「な、なに？」

「……いや、何でもねえ」

俺に何か言いかけてから、黒澤は何でもないと言って少し早歩きになった。

……このよそよそしさ、いつも何でもかんでも言ってくるアイツが俺に何も言わないなんて……やっぱりコイツ、俺を捨てる気だ！

「……」

何て自分勝手な奴。

俺の名前

「あ、コレだ!」

「んなの、いつでも買えるじゃねえかよ」

ルーズリーフを手にとった俺に、黒澤はボソツと呟いた。それにぎくつとした俺は、必死に黒澤に『他にも買いたいものがある』と言っていた。

結局、ルーズリーフの他にカラーペンと消しゴムなどの筆記用具を買った。やっぱり、黒澤には『いつでも買える』と言われ、今度の今度こそ俺は黙りこんでしまった。

「く、黒澤も買いたいものあるだろ?」

「あ? ねえよんなもん」

「じゃあ帰ろうよ、俺、もう用済んだし……」

こっちは早く帰りたいんだよ! お前に壺とられたくないし、出来ることならSEXもしたくない! そんな痛い思いしたくなければ、……お前の顔も見たくない。

「矢西」

俺が黒澤の体を追い越し、先に行こうとして、黒澤は俺を呼び止めた。やっぱり何か買いたいものがあるのか、俺が自分より先に行くのが気に食わないのか――。

黒澤は俺の手首を掴んだ。

「ちよつと、こっち来い」

命令。

いつもの命令。俺にウンともスンとも言わせてくれない、強引さ。大嫌いだ。

「ちよつ、くろさわ……?!」

連れて行かれたのは、トイレだった。人気のない、でも妙に手入れの凝ったトイレ。大体これからやる事に想像はついた。

個室トイレ。鍵も閉めてしまえば、軽い密室。

「……なんでここ？」

「気分」

「がつつき過ぎ、せめて帰ってからにすればいいのに……」

俺のマフラーを取り上げ、その場に捨てるように置いた。ウインドブレーカーのチャックを無理やり下ろし、いつもより数倍手荒な手つき。

「そんなに欲求不満かよ？」

「うっせー……」

何ムカついてんだコノ人は……。

「ねえ、黒澤先輩。いつも通り、キスしないでね……っん」

この強引さ。キスしそうな勢いで怖くて、俺はいま一度黒澤に再確認した。

「しねえ……よ。…クソっ。いれるぞ……」

「え……つま？！ 早すっ……っつ、痛え……くろさっ……やめ」

「静かにしろよ、キスすんぞ」

「ふざけんっ……はっ……痛っ……！」

ふざけんな……マジで。クソ。めっちゃくちゃ痛え。

コイツ……。俺のことおもちゃとか思ってくれてもいいけど、どうでもいいけど、おもちゃは大事に扱いましょうって……言われてねえのかよ……っ。

「あっ……っつ、やにっ……！」

自分だけ良い気分になりやがって……！ 鬼か！

「やに……し……」

俺の呼ぶ声だった。壺を思っ目をつぶってるんじゃないで、俺を呼ぶ声。その呼ぶ口がうざったらしくて、憎過ぎて、俺は必死に黒澤の頭にしがみついていた。

行為中盤。

もうすぐ行為も終わる。

俺がそう思っているときに、黒澤が言った一言に、俺は絶句する。

「……ん、やに……っ。——ら、ん……っ！」

「……っあ…?! お前っ、今……うつ」

名前……呼ばれた。俺の名前、下の名前、呼ばれないと思ってた名前。呼ばれたくなかった、俺の名前。

蘭。

「らん……っらん!」

「ちょっ…あ! やめっ!」

また。

うざい、気持ち悪い。なんたって今俺の名前を呼んだ? おかしいだろ、状況的に。ていうか、何で俺の名前を呼んだ?

いつもの矢西じゃ駄目なのか? 俺、お前に名前なんて呼ばれたくないのに……。

え、ちょっ、俺、今マジで混乱中。

俺は壺の代わりでいいんだぞ? 別に、壺に手を出さなければ俺の扱いなんてどうでもいい。大事にされたいとも思っていない。

「なんっ……なんだ、おまっ…あっ」

最強最悪。気持ち悪い。

変化

「……何なんだお前……」

「……」

ショッピングセンター5階の、男子トイレの一室。

鍵を閉め、息を押し殺し、痛みに耐え快感に耐え、性行為をなんとか終えた俺は、黒澤を思い切り睨みつけていた。

「俺はただのオモチャなんだろう？　俺はお前に黙って抱かれてんだから、お前も黙って抱けよ」

「……お前はそれでいいのか？」

「お前が壺に手出しさえしなきゃ、別に良い」

後味が悪そうに、黒澤はサイアクにテンションが低かった。反論もしてこない、殴ってもこない。……だけど、俺はお前よりテンションが低い。

「俺の、下の名前呼ぶな」

「キスも駄目で名前も駄目か」

「……だめ」

「蘭」

「呼ぶなって！」

お前に呼ばれるような名前じゃねえんだ。お前になんか呼ばれたくない。

「何で駄目なんだよ」

テンションが低いせいなのか、いつもより低い声で黒澤は聞いた。

「……」

簡単な話し。

「嫌いな奴に下の名前呼ばれるのは、昔から嫌いなんだよ」

虫唾^{むしず}が走るって意味。

「……」

その睨む顔にも慣れた。殴られるのにも慣れた。犯されるのにも

慣れた。……お前なんかもう怖くない。

……俺も強くなったもんだよな。初めはコイツにあんなにビクビクしてたのに……一年も経てば当たり前か……？

なんて、黒澤の前でこんなこと考えれるのも、余裕な証しなのだろう。

「お前、ホント女みたいな名前してんな……」

「先輩に言われたくないですよ」

ランより、シズカの方がよっぽど女みたいな名前だよ。名前負けしてんぞ。

「ドラえもんに出て来るしずかちゃん。……性格はジャイアンより極悪」

お前のモノは俺のモノ、俺のモノは俺のモノのジャイアン精神。今だってきつと、『矢西のくせに生意気だ』とか思ってたんだろ？

「生意気言うな」

やっぱり思ってるし……。期待を裏切らないな……。

「お前はのび太だな」

は？ のび太？

「ジャイアンにやられる弱虫」

「『ヤラレル』の意味が違いますよ」

まあ確かに、俺はこのままじゃいつかコイツに殺られるかも。早いとこドラえもんに助けてもらわなきゃ……。。

「ドラえもんて誰ですか」

「……柴田とか」

「柴田先輩はスネ夫ですよ」

どう考えてもスネ夫。壱は出来杉君かな。

「いねえんじゃねえの」

俺に救世主なんていないって言いたいのかよ……。

残酷すぎるよ。

「何で名前呼んだの」

「……」

それじゃあ、自分でなんとかしなきゃいけないんじゃないんじゃん。

「……なんで？」

「呼びたかった、それだけ」

ガキみたいにそっぽを向く黒澤。

「ちゃんと答えてよ……」

お前はいつもそうだよ。人の体もてあそんで、人の時間裂いて、自分のしたいことだけして。ジャイアンでもそこまでしない。

「……」

「黒澤」

「行くぞ」

「黒澤！」

「俺はお前を名前で呼ばない、いつも通り黙って抱く。お前は俺に黙って抱かれる。それでいいんだろ」

個室トイレの鍵を開け、黒澤は戸を開けそこからでた。俺が出て来るのを待ちもせず、先にトイレを出て帰り始めてしまった。

……。

いつもなら俺が質問攻めしたら、脅すか、殴るか、また性行為なのに。……何もしない。

「……何なんだ」

やっぱりアイツは、最近何か変なんだ。

相談

「……変？」

「はい……」

ショッピングセンターのトイレで別れた後そのまま、俺と黒澤は別々に寮へと戻ってきた。一応黒澤の部屋に行くも、姿はなく。

一人で漫画雑誌を見ている柴田先輩に、俺は黒澤のことで悩みを打ち明けることにした。

「アイツ、……最近俺のこと殴らないんですよ」

「……いい、良い事じゃん……？」

確かに良いことだけでも……。

「気味悪いじゃないですか、今日だっていきなり『でかけるぞ』ですよ？ 結局トイレでサカられましたけど……」

「ふん……」

柴田先輩は漫画雑誌をとじてから傍により、少し俺の頭の撫でてから隣に座り込んだ。撫でられていることにもあまり気にならず、俺は話しを続ける。

「いきなり名前呼ぶし、呼ぶなって言ったらいきなりキレるし……もうよくわかんねえ……」

「災難だったなー」

少し苦い笑みを浮かべながら、柴田先輩は言った。

「黒澤のこと、嫌い？」

「……大嫌いです」

はつきりと即答した俺に、柴田先輩は哑然として固まった。

「自分勝手に俺様ですぐ殴って蹴って……いや、今はあんまされてないけど……それでも俺のこと散々犯して……アイツ何がしたいんですか」

「いや……何って言われても……セックス……？」

「……ですよ」

それしか無いですよね……と小さな声で呟きながら俺はずーんと
テンションを落とした。

「黒澤に壺に何かされたらホントに困るけど……アイツ、…ホント
に壺のこと好きなんですか？ 今の状況からして、全然好きそうに
見えないんですけど」

「ああ、ほら。黒澤はぶっきらぼうで不器用な奴だからさ、顔に出
さないだけでよ、多分」

「はぁ……」

確かに考えてみれば、……アイツが壺を見たときは何も顔に出さ
ずに俺に全部ぶつけてくるからな……。――その内行動されるんじ
やねえの……？

「ていうか、……柴田先輩。黒澤に伝言伝えておいてくれませんか
？」

「ん……伝言？」

「『俺もいつも通り接するから、先輩もいつも通り接する』『壺に
手は出さない、黙って抱く、名前呼ばない』……デス」

「……矢西はそれでいいの？」

「……」

柴田先輩が余りにも黒澤と同じ質問をしてきたので、今度はこっ
ちの方が少しだけ唾然としてしまった。

「……黒澤にも、いいましたけど。壺に手を出さないならそれでい
いんです」

「ふーん……なるほど」

「んじゃあ、ちゃんと言っておいてくださいよっ？！ 絶対ですよ
！」

立ち上がり、俺は靴を履きながら何度もそう言った。

「大丈夫大丈夫、ちゃんと置いて置くよ」

「あと……伝言は言ってくれていいんですけど、有難いんですけど
…今話した事は内緒にしてくださいね……」

「分かってるよ」

俺の本音を聞いた黒沢が俺をぼこぼこに殴りかかるかもしれない。……元に戻れて言ったって、やっぱりぼかぼか殴られるのは遠慮したい。

俺はもう一度柴田先輩に『よろしくお願いします』と言った後に部屋のドアを開けて部屋から出て行った。

「……壹、勉強教えてくれるかな……？」

裏表（前書き）

柴田視点

裏表

矢西が部屋を出て、僕はただクローゼットの方を覗いていた。30秒たっても、1分たっても何も変化のおきないクローゼットに向かって、僕は呆れた声で喋りかけた。

「いい加減、出てくれば？」

「……」

その一言で、クローゼットの中にいる奴は足で扉を蹴りあけた。表情は歪んで、苛ついていて、何の気力もない感じ。

「最初から隠れなきゃ、何も聞かなくて済んだのにね」

矢西が来る少し前に、静が部屋へと戻ってきた。『矢西はどうした？』と聞いても、『置いてきた』としか言わない。お出かけは失敗した模様。

静がその場に立ち尽くしているときに、部屋の扉にコンコンとノックの音が聞こえた。僕がはい、と答えると、少し息切れた感じで『俺です……矢西』と言った。

その声に敏感に反応したように、静がいきなり机の下に隠れはじめた。尻だけが机からはみ出ている様に、少し笑いそうになってしまった。

——顔を合わせたくないのか……。

噴き笑いそうになりながらも、そこまで悪いことをしちゃったのかと、すぐに分かった。

「静、そこじゃすぐバレちゃうよ、こっち」

僕は冷静に静をクローゼットへと誘導し、矢西を迎えたわけだ……。

それである相談話し。

「伝言は……言わなくてもわかるよね？」

クローゼットから出てきてベッドに寝転ぶ静に、僕はそう言った。

「……ああ」

2回も言われたくないのか、力無い返事をした。

「何やっちゃったの」

とりあえず状況を知るために、静にわけをきく。

「……ヤツてる途中に、アイツの名前呼んだら、…好感度下がっただけ」

「出かけてまでセックスしたの？」

「必死になって俺の機嫌取ろうとしてんのがムカついたんだよ」

「……馬鹿だな、もう」

静は多分もう、有沢 壺のこと何て眼中に無い。セックスしようなんて思ってもないしましてや、矢西に仲を取り繕ってもらおうとも思っていない。

「矢西のこと好き？」

「好きじゃねえ」

かと言って、自分が矢西を好きとは思っていないらしい。

好きって気付く前の状態。…無意識に動くこの体と、矢西のふとした行動に苛ついたり、嬉しくなったり、意味が分からないって感じ。

でも、僕は静にそれが『好き』って意味なんじゃないか？ と言う話はあえてしない。

「……そう」

静は『愛する』って事を忘れてしまったんだと思う。思い出そうともしないし、思い出したくとも思っていないみたい。

僕が無理やり思い出さそうとするのは変な話だし、僕は他人だし。

だから僕は静に小さなアドバイスをするだけ。

「ちゃんと優しくしないと、ペットもなつかないんだよ」

「……あ？」

「ペットも人間も同じもんでしょ、優しくされたら嬉しいし、嫌な事されたらムカつくし。嫌いになるかも」

「……どうすりゃいいんだよ？ 頭でも撫でろってか？ 嫌われる

ぞ」

「静なりの優しさでいいんじゃない？」

「俺なり……ね」

静が普通の恋愛を覚えるには、矢西は良い存在だと思ってしまおう、僕がいた。

臨時

柴田先輩に伝言を頼んでからというもの、黒澤はあれから一回も俺の名前を呼ぶ事はしなかった。

相変わらず殴らないのは少し気が狂うけど嬉しい。

それと……体を重ねる回数が、減った。いつもは毎日何回も馬鹿みたいになっていたのに、週に3、4回になった。それでも結構多いほうだけれど、助かっている。

顔をあわせる回数も減ったし、もともと少なかった気もする会話数だって少なくなった。俺は今凄く気分の良い状況だった。

ただ、何故急にそうなったのが疑問符に残る。

やっぱり俺捨てて壺をやるうとしてんのか？ ……何て考えてたけど、全くそんな気配もなく。自分で聞こうとしても黒澤のオーラが『聞くな』とばかりに俺を睨みつける。

——なんなんだ。

そんな感じでグダグダやって来た。明日から俺は2年生、黒澤と柴田先輩は3年生って頃。

多かった3年生が卒業して、去年より少ない1年が入学して、部屋に余裕がなく3人部屋さえあった寮に余裕ができ、臨時の部屋替えが行われた。

やっぱりと言うのか、壺とは部屋を離れた。あと、もう一人の同室生も。

『次は誰と同じ部屋かなー？』なんて思って部屋割りの紙を見ると、俺のとこだけ自分ひとりの名前しか書かれていなかった。他の奴が二人一組でかかっている。

「……一人部屋か」

人数が余ったみたいで、俺は一人部屋になってしまった。これは……好都合？ 黒澤とセックスする場所が確保できた。

寮内でやる場合に、わざわざ柴田先輩を追い出さなくても良い。

「俺の部屋でやるのは嫌だけど、しょうがないよな」
それしかない。

ていうか一体、この関係はいつまで続くのだろうか？ 黒澤が卒業するまで？

「あと1年の辛抱……ってか？」

なげえよ365日。

何時間あると思ってんだ。

「わかんねえ……」

自分の思った質問に分からないと答え、俺は移動した部屋のタンスに自分の服を詰めていった。

「ああそうだ。黒澤にいわねえと……寮部屋のこと」

ふと思いついた事に、俺は立ち上がり、靴を履いて部屋を出た。

皆部屋替えで急がしそうに元部屋と新部屋を行き来していた。

俺と違って新しい同室生ともご対面だし。

「そーいや壺、棗とめちやくちや仲悪かったよな……」

壺の2年からの同室生棗は、1年頃から凄く仲が悪かった。殴り合いになるっていう程の喧嘩はしていないけれど、やっぱり仲は悪い。

「騒ぎ起こさなきゃいいけどな」

ていうか、……愚痴聞かされるんだろうな。

少しのワクワク感と不安を残しながら、俺は黒澤の部屋へと向かっていた。

侵食

コンコンと1回ノックをすると、奥から柴田先輩の声が聞こえてくるのがわかった。戸を開けて中を覗いて見ると、特に変わった感じもなく、相変わらず殺風景で、片付けている気配すらない。

「アレ、矢西じゃん。部屋どうなったー？ 僕たちさー、まーた一緒にの部屋なんだよねー」

ちよつと悔しい顔をしながら俺に近づいて笑いかける柴田先輩は、俺の頭を撫でていた。

また一緒にの部屋になったのは多分、だれも黒澤と同じ部屋になりたくないからだろう。多分柴田先輩もわかっているんだと思う。

結局3年間オール静かよー……と、諦めた顔色。本人の目の前でそんな事を言えるのは多分、この人だけだ。……やっぱりこの人が黒澤の同室生に適任。

とりあえず玄関先からベッドで暇そうに寝転がっている黒澤を見つけ、靴を脱いで黒澤の目の前まで行った。

「つんだ矢西、やられにきたか？」

薄く目を開いて、ニヤツと笑い込む黒澤。ムカツク。

目が合ってすぐの発言とは思えない。

「違いますよ……俺の部屋、知っというてもらった方が良いと思って……」

少しはマシになったかと思っただけ、それは俺の間違いだったようだ。コイツはやることしか頭にないらしい。

「誰がテメエの部屋なんか行くかよ、同室生がうぜえだろ」

「俺の部屋、……人数余って、一人部屋だから」

「あ？」

「寮に居てやる時は俺の部屋来て。……柴田先輩もいちいち外に出しちゃ悪いし」

まあ俺もやる場所確保出来たことを報告しに来ただけだし、今は

黒澤とそう変わらない。伝える事も伝えだし、もう喋ることもないし、部屋に戻ろう。

「2階の一番右端の部屋。じゃ、それだけですから……柴田先輩、じゃあまた」

「じゃあねー矢西ー」

柴田先輩がフリフリ手をふって、靴を履いて部屋外へ出ようとしている俺を見送った。黒澤はジッと真顔で俺を見つめたまま動かない。

見るな。

俺は最後に黒澤を睨み、扉を閉めた。後味が悪い。

「……さっさとやる事終わらそう……」

部屋に戻りながら、考えてみた。

寝る用ベッドとやる用ベッドで分けた方がいいよな……1人だけど2段ベッド置いてあるんだし……有効活用しなきゃだね。

好きでもない人と体を重ねているベッドを使って眠るっていうのは、あまり気分の良いものではないと言うことは黒澤のベッドで実証済み。

それで、今度は俺の部屋だ。……嫌な思いはできる限り避けたい。「やっぱ寝る用は上かな……」

部屋に戻って2段ベッドをマジマジと見つめた。

上でやったらベッド崩れそうだし……。

「……」

ていうか、……こんな事真剣に考える性格だったかな。

「独り言の多い奴」

その一言に、背中に悪寒が走り渡る。

一番嫌いな声。

「何でいるんですか」

閉めた筈の扉はソイツによって全開にさせられていた。振り向くと、俺の目線にはそいつの胸元がうつった。

俺より高い背、俺より低い声。俺の髪より明るい髪の色。少し目

線を上に向けると、黒澤の俺の睨む顔。

「俺の勝手だろ」

そうだ。

俺が何でこんなに変なことを真剣に考える性格になったのか……

？ ……それは全て、黒澤が現れたせいだから。

俺の身体も心も何もかも全て、コイツに乗っ取られかけているんだ。

墮落

とりあえず、黒澤を部屋の中に入れてから急いで戸を閉めた。靴を脱いでから部屋を物色するように辺りを見回し、少ししたら飽きたのかベッドに転がり込んだ。

「何しに来たんですか」

その光景を見て少し引きながら、俺は黒澤に問いた。黒澤は黙って俺を見つめ、何を言うわけでもなく、口を閉ざしたまま。

「……」

「……」

何がやりたいんだ一体。……だんだんと怒りが立ち込めてくる。

最近の俺はコイツのせいでストレス溜まりまくりなんだ。言いたい事があるんなら前みたいにバンバン言えばいいものを…。

今頃何を躊躇ちゅうちょしてんだ。

「ああ……そっか」

ていうか俺も、何黒澤の事でいちいち迷ってんだよ。コイツの事だ、やる事は決まってるじゃん。『性欲処理』

「セックスしたいんなら最初からそう言ってくださいよ」

ベッドに近づき、それから寝転がっている黒澤にまたがる状態でベッドに入り込み、そう言った。

こういうことも……もう恥じらいもなく出来ちゃうだな、俺。サ
イアク。

「とっとと終わらせましょうよ、俺、先輩と違って忙しいんですよ。
部屋の整理とかで……」

シャツのボタンを開けながら黒澤に向かって含み笑いの挑発。黒
澤は目を見開いて、少し驚いてる様子だった。

「……」

驚いた顔をして、それから舌打ちをして、いきなり俺の腕を掴んできた。その腕を引っ張って、一瞬目がくらみ、黒澤の顔が俺の視

界を全て覆いつくす。

「今はやりにきたんじゃねえよ」

「……は？」

思ってたより真面目な顔でそんな事言われたから、驚いた。

今はやりにきたんじゃない？

「んじゃ何しに來たの……？」

「話し」

「話すこと何もないじゃないですか」

「お前が無くてこっちはあんだよ」

……。

意味わかんねえ。一人で服脱いで、俺馬鹿みたいじゃん。

「んじゃ、とりあえず。離してください」

セックスしないのに黒澤にまたがつている状態って……気持ち悪すぎる。まずベッドから降りたい。それでシャツのボタンもしめた
い。

「……逃げんなよ」

「逃げませんって……」

ゆっくりと離された腕に、いつもみたいにあざは残ってなかった。
力強く握られていない事を知った。また、優しくされた気がして、
俺はまたイライラする。

ベッドから降り、ボタンをしめ、ズレかけていた眼鏡を両手で直
して、俺は黒澤を見た。

「で……話して何ですか」

頭をかきながら起き上がり、足を組んで、こいつは変なことを聞
いてきた。

「てめえ、俺のこと好きか？」

……。

「好きか嫌いかと言われれば、大嫌いです」

「ぶっ殺すぞ」

「ゴメンナサイ」

「謝るな」

「……」

本当の事言ったら駄目だったのかよ。

「ていうか、……嫌いなのはお互い様でしょ」

「……あ？」

「俺は先輩にとっては『恋路を邪魔する悪役』。先輩は俺にとって『俺の体で好きな奴想像しまくって性欲処理する憎い存在』。好きになる要素、どこにもないじゃないですか」

「……」

正論なのかは知らないけど、その一言に黒澤は黙り込んだ。黙って俺をジーツと見ているので、気まずいけど負けたくないの俺もジーツと黒澤を睨む。

「そんじゃあ、俺が好きな奴想像せずにお前とセックスしたら、お前は俺のことを好きになるのか」

「……は？」

「俺もう多分、有沢 壱の事はどうも思っただねえんだ」

俺の黒澤を睨む顔が、一瞬にして歪んだ。

絶句。

喜怒

絶句と言うよりは、驚きと言う方が近かったかもしれない。

「俺もう多分、有沢 壺の事はどうも思ってたねえんだ」

「何……言ってるの、…え？」

「だから……っ、もう有沢は好きじゃねえって……多分」

目の前の俺のベッドの上で胡坐あぐらをかいて視線をこちらへ向ける黒澤。

疑い深い言葉に、再度問いてみても同じ言葉を吐く黒澤の口。ただ一つ、発言を明確にしない単語にイラッとさせられた。

「多分って何だよ……いつ……いつからっ？」

てんぱって声を張り上げる俺。

「……気付いたのは最近。考えてみたら、冬の初め辺りから」

冬？ 冬の初めって、11月12月辺りか？

「なっ……5、6ヶ月も前じゃん……！」

半年くらいも前だ。

俺は……半年間もコイツと無駄に体を重ねてたのか？

「……」

「ふざけないでよ！ 俺の半年間返せよ……！」

半年、俺は黒澤にとってなんの意味もないただの性処理道具だったってことか……壺を想像するワケでもなく、遊ばれてた……？

コイツに？

コイツなんかに？

「俺に抱かれるのは嫌か」

「当たり前だろ……！ どこに好きになる要素あるんだよってさつきも言っただろ！」

「そんなに俺のことさら……」

「嫌いに決まってるんだろお前なんか！ いきなり殴って、抱いて……！ お前のせいで俺の高校人生グチャグチャだ……！」

黒澤の言葉に繋げるように、俺は腹から精一杯の声を張り上げた。
黙る黒澤も無視。

もうコイツの顔なんか見たくない、抱かれたくない、縛られたくない。

そんな一心で、俺は黒澤に対していままでに積もってきた思いをぶちまけていた。

「……」

優しくなんてされなくていい。殴られてもいい。体を重ねるくらいならボコボコにされた方がマシだよ。殴っていいよ、俺のこと嫌って、ムカついて、前みたいにな。殴り殺してもいい。

それで警察に捕まってしまえ。

「俺は……オレはお前なんか大嫌いなんだっ……！」
壱を守る為じゃなきゃ、誰がお前に抱かれるか。
好きになんかならない。

「……」

なんか喋れよ、お前らしくない。

「……」

気持ち悪い。しゃべろ、何か言えよ。

何も言わないなら、俺のこと殴らないなら――。

「出てって」

もう、顔も見せないで。

この関係、終わらせて。

混乱（前書き）

>i10729—759<

静と矢西書いてみた。

・・・矢西失敗。

混乱

逃げる代わりに俺を睨み上げる目。俺はその言葉とともに、その同じ顔についている口から投げ出される言葉にチクチクと胸の痛みを増幅させていった。

俺にこんなにも『悲しみ』と言う感情があるとは思わなかった。

矢西を抱いた後の時よりも何十倍も大きい『罪悪感』と『悲愴感』。『爽快感』なんてものは最悪な程ゼロに等しく、心の中は今までにないくらいドロのようにぐちゃぐちゃと濁っている。

哀れな程バカな自分を、今日コレほどまでに憎んだことはない。

よく考えてみればゼツタイに分かっていただろうこの状況。矢西が俺を嫌いななんてことは、もう前から分かっていた筈。そんな状況でもう有沢を何とも思っていないことを暴露してしまえば、この関係を終わらせるのは当たり前の行動だ。

それでも、駄目だと思ったんだ。

このままってのは。

有沢が好きだと、そんな昔の感情で矢西を抱くのに嫌気が刺したのか。知らず知らずの内に、有沢 壱よりも矢西と言う人間を欲していたという真実。

「早く、出てってよ……」

全身で俺を拒否する矢西。目は一切逸らさない。

俺から逃げないという浅い喜びと、拒絶される絶対的な悲しみ。

「まだ話が終わったわけじゃねえ」

というか、俺にそんな口を利くな。

「壱のことはもう好きじゃないって話しだろ？ ……もう分かったから、だから出てって。そしたらこの関係も終わり……」

「…になんかしねえ」

「……え？」

「終わりになんかしねえ」

矢西の言葉を遮る俺の口は、また強引に、矢西を縛りつけようとしていた。

「……ふざけんなっ！ 俺はお前が嫌いだって言っただろ？！ お断りだっ！」

現実を知った途端にこの態度か。

俺も舐められたもんだな。

「っお前、一体何がしたいんだよ……！」

「てめえを抱きたい。それだけだ」

矢西を感じたい、あの抱いた後の爽快感が大好きだ。初めての感覚に溺れた。その快感を追う為と、飽きたら捨てて有沢に仲を取り繕ってもらうためにコイツを縛り付けた。

コイツは俺のモノ。俺がどう扱おうが、どう接しようが、俺の自由。

その内コイツも俺のことを好きになって、俺なしでは居られないような体になって……。そんな状態で捨てたらどんな顔をするだろう。なんて、変な妄想をいつまでもしていた。

それなのに、矢西はいつまで経っても俺を好きにはならなかった。求めもしない。……求めるのは逆に俺のほうで。

……本当に俺は矢西を抱きたいだけか……？

「だからこれからも抱かせろ」

「……いやだっ！」

矢西の体を、爽快感を欲してるだけ？

疑問が次々と現れる。

「っ……！」

何で拒否されるだけでこんなに胸が窮屈になる。

「てめえに拒否権なんてねえんだよ」

「お前、最低だ……」

違う。

傷付けたいわけじゃない。

「てめえが拒否るんなら、俺は有沢を犯しに行く」

「……」

「お前の1年ちょっと、無駄になるなあ……？」
苦しめたいわけでもない。

「……なんで、…俺なんだ……つくそ…」

泣くな。そうやって泣かせたいわけじゃねえんだ。

ムリやり腕を引っ張って、強引に矢西の首筋に噛み付く。力任せにベッドに沈めて、まだすこし抵抗する矢西の腕を、脱がせたシャツで縛り、拘束する。

「やめろ……！」

恐怖に歪む顔が、俺の脳を揺さぶった。

「……や…西」

ちゃんと口で伝えられない。体で表現することも出来ない。ただ相手を傷付けるすべしかしらない。

どうして俺は、人を傷付けることしか出来ない？

こんな事したいワケじゃない。

凶器 性的描写有（前書き）

性的な描写があります。

15歳未満は見ないことをオススメします。

凶器 性的描写有

「あっ……うん、う…はあ、あ」

「力、…抜けて、いつも言ってるんだろ」

「んあっ！ ああ、…あう、う」

ああ、殴りたい。

ふと頭にそんな事を思った。

もうコイツには何を言ってもダメ何だと分かった。

拒んでもダメ、怒鳴ってもダメで。黒澤は俺に何をしたいのか、何を望んでるのか、それすらもう分からない状態。

もう壺を好きじゃないのなら、俺はもうコイツに関わる事はない。そう拒んだら、今度はイチを犯しに行くだなんて……。

そうして縛り付けて、俺を逃げられなくして、一体何が楽しいんだ。

「は、はっ、はっ、はあ、あ、あああっ！」

絶望感。

絶望しまくりで、もうどうでもよくなってしまった。

結局コイツはいつまでたってもコイツのまま。俺を地獄の底に落とし入れるのが上手。

気持ち悪いを通り越した無感覚。いちいち抵抗するのも疲れてしまった。何か抵抗の文も口にせず、ただ女の人みたいに母音を並べて喘いでる。

『口に出さないと相手に伝わらない』なんて、よく言ったもんだ。コイツ相手なら、口に出したって伝わらない、通じない。

無駄な体力使うだけ。

動かす筋肉が勿体ない。ただ一つ、どうでもいいなんて言っておいて、ちゃっかり反応を示している俺の下半身がうざい。

熱くて、押し寄せる波が俺を苦しくさせる。上手く息が吸えなくて、喘ぎ声を出しながら一緒に口で呼吸をしている状態。

川上登る鮭^{さけ}かよ。

「はあ、あつ、あ、んう、んああつ！」

「はあ……っん、っ！」

快感がピンポイントに突かれる。

俺の良いところも何もかも、黒澤に知られてしまっている。今更声を我慢する事も出来ない。

俺の中に入って来たと同時に、黒澤のそのグロテスクが俺の前立腺を乱暴に押しまくる。余りに大き過ぎる快感に、俺は無意識のうちに腰を回して這うように逃げようとしていた。

「……っ逃げんな！」

黒澤にぐいっつと腰を掴まれたかと思うと正位置に戻され、さっきよりも激しく快感を押し付けられる。俺はもう意識の飛ぶ寸前だった。

「あああああ？！ うあああ！ はああ、ああっ」

全裸で、しかも両腕を自分の服で縛りつけられている。どんなに醜い姿だろうか。聞かなくても分かる。

顔は涙と鼻水でグチャグチャだ。

汗だけで髪の毛もペタンコに引っ付いている。

ラストスパート。

俺の体で必死に快感を追う黒澤の顔を、ただ霞む視界の中で見つめていた。黒澤の汗が俺の顔に伝い落ちて、その感覚の悪さに身震いする。

「えう、あううつ、……あああっ！」

「う……っん！ はあ、はあ、やにし……」

「あ、あああ……」

絶妙なタイミングでのフィニッシュ。快感で体が痺れる。その快感を止めようとして体に力を入れると、それ以上の快感が俺の体を巡った。

「も……やだ……あ、ああ」

薄れる意識。

「は、矢西……はあ、」

「ん、う……」

「矢西……っ……！」

暗くなる視界。

黒澤が俺に何か言ったのは見えていた。何て言った？ 言葉の内

容がよくわからなかった。

今はそんな事考える思考もない。

俺は、黒澤によって深い闇に落とされて行った。

もどき

「っ……重い」

体が鉛みたいにズシリとした。特に尻と腹付近。熱はじよじよに引いて来ているものの、まだ行為後の気持ち悪い感覚が残っている。意識を飛ばして15分くらい経ったくらいに、俺は目を覚ました。黒澤の姿はなく、俺の腕を縛っていた服を解き、真っ裸の俺に毛布を一枚かけてこの部屋を出ていったようだ。

軽く後処理も済まされていた。

……、そうだ。このさり気ない優しさが気に食わないんだ。散々俺を弄もてあそんだ癖いたぶして、まだ俺を甚振る。

もう嫌がるのも疲れた。黒澤に接するのもウンザリなのに。

俺なんてただの冴えないの男子校生だ。男にこんな事で優しくされることなんて好まない。ましてや同性と性行為をする趣味すらもない筈。

「そろそろ普通に戻りたいな……」

そんな普通をお願いを、ことごとく破壊された。望むことすら出来ない。

こんな絶望的な現実を俺に味わわせる黒澤に復讐でもしようかと思っても、黒澤にそんな事したら結局俺が返り討ちに会うだけってのは目に見えている。

だから今、こんなに反抗心が薄れているんじゃないか。

じゃあ、従順な人形にでもなる？ ……それも何だか味気なくていやだ。

どうやったら黒澤は俺とセックスをしなくなる？ ……用は飽きられれば良いって事？

「飽きられるようにしてたら俺に話しかけてこなくなるかな……」
じゃあまず、……俺は黒澤とセックスする時にいつも何をしている？ 壺を好きじゃなくなっても俺を抱くくらいだから、黒澤にそ

そられる様な事をいつもしている筈だ。

「……特に何もないよな……そんなマニアックな事したつもりもないし……」

全裸でベッドに横たわりながら独り言をぶつぶつ言っている俺は、他人から見れば絶対にドン引きされているだろう。

「いつも、……微妙に優しくするくせに俺の体も労わらないで、1回じゃなく何回も無理やり迫ってきて、それを嫌々言いながら行為を進めてるくらいで……」

あ。……それだ、多分。

俺がいつも嫌々言っているのに少なからずそそられてる？

一瞬、悪寒が走った。

「ドSだアイツ……！」

人が嫌がつてるのを無理やり抱くのが好きだなんて、鬼畜すぎる……。鬼、悪魔だ。

俺は男だから少し手荒に抱く部分もあるかもしれないけれど、コレをされていた女子の心中を察する。……体が耐えられないよ。俺も良く頑張った。

自分で褒めても嬉しくないな。——とにかく、黒澤が俺を抱く理由は分かった。俺が嫌々言わなきゃあいつはきつとすぐ飽きてくれるだろう。

要は、良し悪し言わずにただ喘いでいれば良いわけだ。

アイツの行為に肯定する部分なんて無いんだし、きつと口が避けても『良い』なんて言わないから、『嫌だ』とか『やめろ』とか、行為を否定する言葉を言わないように注意すれば良いんだ。

つまり、黙る。

簡単だ。

「……少なからず人形染みてる」

まあ、従順じゃないだけ全然いい……。俺が黒澤に復讐を謀ろうとしても無理な話しだから、コレが俺の、俺なりの復讐だ。

頼むから、すんなり飽きてくれ。

重症（前書き）

D V 野郎になりそうな感じ……

いや、させませんよ…

重症

爽快感？

いや違う。さっき矢西を抱いた後の感覚に、爽快感なんてなかった。あるのは相変わらざる罪悪感と悲愴感と、：ほんの少しの、空虚感。むなしいと言うか、何と言うか。心の中にぽっかり穴が開いた感じ。

腹ん中がムズ痒くて気持ち悪い。この感覚、嫌いだ。

体中にべたべたしている汗を流して、とにかくこの感覚を消し去りたいと、矢西を抱いて初めて思った。

いつもはこの汗がまとわりついていても気分は清々（すがすが）しい。筈なのに。

「うぜえ……」

うざい。その汗も、俺の視界に映る奴等も、足音も声も物も全て、何もかも壊してやりたくなった。

一言で、『暴れたい』

そういえば最近、俺は昔みたいな事をしていない。夜学校を抜け出しておやじ狩りをしたり、元カノの知り合い絡みで出会った店で酒飲んだり、ちよくちよくバイトしたり。

頭に浮かぶのは何もかも矢西のことばかりで、有沢なんてもう脳のほんの少しの一部の片隅にしかいなくて。

胸がムカムカして、気持ちの悪い感覚。

「……」

うざい、うざい、うざい、うざい。

何でこんなにイラついてんだ俺は？ 矢西なんてみがわりの性欲処理だったんじゃないのか、有沢に仲取り繕ってもらうためのコマだったんじゃないのか？

でももう有沢なんて好きじゃねえんだ。……なんで俺は矢西を離してやらない？ アイツなんかより良い奴なんて幾らでもいる。さ

っさと開放してやれば良かったんじゃないか。

……でも、いざ矢西を目の前になると、その思いが一瞬にして崩される。

離したくない。コイツは俺の所有物。俺のモノ。離さない、離せない。脳内に駆け回る、そんな痛い感情。傷付けても俺の傍に繋いで置きたい。

ただの男なのに。

たかが矢西なのに。

「クソ野郎……っ」

抱いてる時、焦点の合わさってない目が俺の顔を必死に覗いている顔が好きだった。涙なんか流して快感に耐えて、脳内まで快樂でおかしくなっている。

そんな中でただただ俺を、俺だけを見ている矢西の目が大好きだった。学校での行為後に、足腰立たなくてフラフラになりながら必死で歩く後ろ姿に、満足感さえ覚えた。

その時に溜まる、矢西を持っているという、なんとも主人のような優越感。

これが当たり前の事なんて思っている自分。時々、お前は何様だなんて、自分で突っ込んだりする。……黒澤様だ。コレも当たり前のように思う。

俺は凄く俺様な性格なんだ。

自分の思うように行かないことがあればそれだけでムカつく。自分の思い通りにさせたい。だからその為には俺は何だってする。

脅しても、殴っても、何としてでも俺の思い通りにしたい。

コレも同じ事だ。

矢西が俺を避けるなら、俺は矢西が自らこっちに来るように何だってする。合意無しで抱いてでも、『お前は俺のモノなんだ』と、分からせてやりたい。だから分からせてやる。

離さない。

誰にも渡さない、触らせない。俺だけを見せて。

繋ぎとめて。

頭痛

頭が痛え。グラグラする。

3年になったつっつーどうでもいい日なのに、頭が痛い。柴田と高校3年間オールで一緒のクラスになったからか？ ……そんなんで頭痛くなるほどやわじゃねえ。

とりあえず、頭が痛い。

次の日の始業式。大きな体育館の小さなステージで、全校生徒の前で答辞を喋る有沢壺の姿があった。普通なら3年の学年トップがやる筈だが…まあいいや。

関心のカケラも持てないほど、有沢の事はもう脳の片隅にもないらしい。自分でも、モノ凄い心変わりだと思った。

そんな事より、俺は2年の列に目を向けて矢西の姿を探していた。見つからない矢西の姿に、さっきよりも頭が痛くなったような感じがした。

キンと、少しの耳鳴り。そんで、具合悪い。

頭が痛いと言うか、体調自体が悪いようだ。

「3年5組から各自教室に戻ってください」

スピーカーから移動を仰ぐ声が聞こえた。始業式が終わったことを合図している。

「……やつと終わった。…かったりい」

こういう集会は昔から嫌いだ。蟻^{あり}みたいなうじゃうじゃうじやうじや。表彰だの、赴任してきた先公紹介だの……俺には関係ない事をいつまでもやり続けて。

本当に、学校ってここはいつでも不思議な事ばかりする。

どれだけ戯^{たわむ}れるのが好きなんだ。

「ねーシズカ。変なオーラ出すのやめれば？」

柴田の声にハッとして、学校嫌悪から我にかえる。横を見ると、少し苦笑い気味の柴田が俺の顔を覗いていた。

「オーラ？　：美輪さんかお前、そんなん見えてたのか」

「いや、見えないけど。……陰悪？　凄い悪役顔してる。鬼瓦みたい。そんな顔してるから皆シズカから遠ざかってるよ」

「……うっせーよ」

いつもの俺と柴田の会話。それに体調が悪い事だけを加えただけで、どうしてこうもうざさが増すのだろうか。

柴田を無視して歩き出す。辺りを見回すと、柴田の言うとおり、柴田以外の人間が俺の傍にはいなかった。

「ていうかさー、シズカ、変な顔してて気付かなかったけど、顔色悪いね」

嫌みったらしい言葉に、ピクリと眉が動いた。

「早退する」

具合が悪いのか、と、柴田が俺に『お大事に』と背中越しに言ったのが聞こえた。

「しょうがないから提出課題とかは出しといてあげる。良かったね、今年の夏休みはいつもみたいにテストなくて」

「まあな……」

体育館に繋がる通りを抜けて、2階へと続く階段と玄関が見えてきた。俺は黙ってそのまま玄関へと迎え、柴田をまた黙って階段を登って行った。

踵を踏みまくってデロデロの上靴から外靴に履き替えながら思った。
かかと

多分柴田は、また俺と矢西が何かあったことに気が付いている。何も聞いてこないし普段と変わらなく接してくるけど、あいつは絶対気付いてる。

だって柴田は、他人の課題と一緒に出すって言うような自分に何のメリットもない事をあまりしないから、その辺少し俺に気を使っている。

「早くどうにかしろって事かよ……」

アイツの感覚では今の俺は少し、うっとうしいらしい。

腰痛

最悪な日の次の日は、学校の始業式だった。

俺は昨日黒澤に抱かれてぎしぎしと痛む体を動かし、痛い腰を必死に伸ばしていた。痛みはそこまで激しくはないけれど、コレでも充分やバイ方。

ひよこひよこと変な歩き方をしていないか、他人の目が妙に気になって仕方ない。

「……いでえ…」

飯の後に制服に着替え、提出課題をカバンにつめ、年寄り見たいに腰をさすりながら学校の校舎へと向かった。

寮替えの次の日のクラス分け。好きな奴と一緒にクラスになれるか、嫌いな奴と離れられるか、皆わくわくしながら掲示板に張られたクラス表を覗いていた。

人の声がざわざわとうるさい

俺もまた壺と同じクラスになれるかな？　なんて少しの期待はしていたけど、今日は最悪な日。一緒のクラスになんてなれるわけもなく、あっさりと壺とクラスが離れてしまった。

でも何故か、あまり残念だと言う気にはなれなかった。むしろ俺と離れられて良かった。コレで安心。……なんて事まで考えていた。俺ってマジ偽善者。うわべだけの善人。

「……」

2年の教室に向かおうと階段のほうに歩いていると、ふと3年のクラス分けが目に入った。

別に自分には関係のないことだけれど、何か気になって、俺は歩みを止めてジーツと3年のクラス表を覗いた。

『黒澤 静』と『柴田 奈緒』の文字が、同じクラス表の紙に書かれてあった。

『やっぱりな』……何ていう浅い感想を残して、俺は止めていた足

を動かし、新しいクラスへと向かっていった。

教室の入り口。

ドア越しからざっと見て、俺と仲の良かった奴はあまり居ない。忝じゃないもう一人の寮室生だった奴ともクラスは離れて、『このクラスでは多分孤立状態になるんだろうな』と、それだけ思った。教室の黒板に書かれてある座席表。

俺の席は、窓側の後ろから3番目という結構良い席。でも、クラス分け後の出席番号順の座席はいつも窓側で、そんなに喜びはしなかった。

「つまんねえの……」

アゴを手の平に乗せ、肘を机に付ける。顔を窓の外へ向けると、次々と校舎に入ってくる在校生の姿が映った。

校舎に向かって動く黒い髪の毛の中で、一つだけ目立つ色が目に付いた。金髪と、少しの赤髪。いや、目立ってるのは髪の毛じゃなくて、そこら辺だけ周りの人が寄っていないからかもしれない。

その赤金髪に笑顔で話しかける回りと同じ黒色の髪をした眼鏡男。黒澤と柴田先輩だった。

「嫌なもんみた」

沈んでいた気分がもっと沈み、腰の痛みが強くなった気がした。

「腰いてえな……」

窓枠から居なくなると、俺の視界から消えた黒澤の髪の毛の色だけが脳裏に残った。

あの人と、俺とアイツ。

始業式。体育館のステージの上で、マイクに向かって在校生に挨拶する壺の姿があった。

普通なら3年生の学力トップがやる筈だったけれど、何やらいざこざがあり、結局は2年のトップの壺が在校生挨拶をやる事になったらしい。

「1年生の皆さん。ご入学おめでとうございます。これから、追試や補修など面白くないものを受けるはめにならないように。2年生の皆さん。修学旅行、楽しみましょう。くれぐれもナンパ、逆ナンなどしないように。3年生の皆さん、大学受ける人は受験の時に腹を壊さないように。それと就職の希望の人で、あまり人前で話さない人は誰とでも喋るようにしましょう」

やる気の無い挨拶。真面目なのか不真面目なのか分からない適当でとにかく軽い文。コレは絶対に教師に怒られることは誰もが想像ついているだろうな。

面白くて何だか少し笑える。

「すげえなー……」

大勢の前で恥とかそんなの関係なくこんな事出来るんだもんな。勇氣ありすぎ。良いことするにも悪いことするにも完璧にやりすぎている壺に、俺は少し苛付いた。

でもそんな俺の目標が壺なんだから、……まあ、尊敬。

壺が在校生に向かってお辞儀をする。ザワついて余り拍手の無い中、俺は小さく短く拍手をした。

「コレで始業式を終了します。3年5組から各自教室に戻ってください」

ステージに繋がる階段脇にあるマイクから始業式終了の言葉がかかった。さっきより一層ザワつきが激しくなって、少し耳に響いた。教室に戻ると、新しい担任教師が軽く自分の自己紹介をはじめた。

それからクラス全員の自己紹介。

名前と、前のクラスと、一言。俺がいつも『有沢 壱』の隣にいたと言うことで、多分クラスの大半が俺のことを知っているだろう。でも多分、こいつ等は余り俺に話しかけては来ないと思う。……だって俺は壱じゃないし、勉強だってなにも出来ないから。

ああ、……なんか、少しだけ虚しくなってきた。

アイツが、黒澤が壱を好きになる理由は良く分かる。顔結構格好良いし、スポーツは……陸上モノとかは駄目だけど、弓道はすげえめちゃくちゃ上手いし、勉強は凄い出来るし、多重人格激しいけど、優しいし。

ある意味大体が理想的。

……で、俺はどうだ？

顔は中の中くらいでめっちゃくちゃ普通。勉強できない、スポーツは普通、特技も取柄もないただの地味な眼鏡。良いところなんて一つもないへたれで、最近少し克服してきたかなー？ って感じで。

そんな俺を何で抱く？

俺みたいな男よりも可愛い女子の方が抱き安いと思う。あ……妊娠の可能性あるからイヤとか？

でも、それでも、俺より断然女子みたいに綺麗な奴とか、可愛い奴はいるわけだし、……アイツが何でそこまで俺を求めるのかわからない。

嫌がらせやからかっているにしても度が過ぎてる。……そもそも黒澤ってそんなガキ地味な性格？

ただの性欲処理にしては、無理やりすぎる。ていうか、……それこそ嫌がってる奴わざわざ相手にしないだろうし。

頭ん中グルグル回っている。

ああもう、……分けわからん。

「……」

黒澤がずっと、頭から離れない。

食堂

課題を提出し、チャイムが鳴って授業の終わりを告げた。

今日は課題提出と同時に、それぞれの軽い自己紹介と、先生の軽い話しだけをした。時間割の書かれた小さなメモ帳サイズの紙が配られたところで、学校の授業は全て終わった。

俺は誰と話すでもなく、今頃説教を食らっているであろう壺に会うこともなく、早々と寮へと戻っていった。

軽く『ただいま』と言ってみても、シーンとした空気だけが俺を包んだ。……そうだ、一人部屋だったんだ。と、冷めた。

何もする気力が起きなく、俺は机の引き出しからマンガ本を取り出して2段ベッドの上の方に上がり、寝転がってそれを読み始めた。静かな空気はどこことなく変な感覚がしたけれど、邪魔はされなし、部屋は独占できるし、一人部屋の寮生活はコレはコレでいいなと、結構満喫した。

それから4、50分くらい経った時に腹の虫が鳴いた。

「……腹減った」

漫画をそこら辺にボンツと置き、ベッドから降り、食堂へと向かった。

ちょうど食堂の入り口を入ったところで、見覚えのある背中が目についた。始業式の在校生挨拶で先生等の怒りを買い、さっきまで説教食らっていたであろう、有沢壺。

相当疲れていたのか、その背中にはいつもみたいな活気はなく、少しだけ陰気な雰囲気漂っているように見える。

「おい、壺。お前危険な事するよなー」

何だか壺が俺より弱弱しい感じに見えて、そんな壺をめちやくちやからかいたくなって、俺は壺の肩をポンと叩いて話しかけていた。「だってあんなの5分も読んでたら頭いかれるだろ」

俺が居る事に気付いていたかのように、まるでビクリ動じるわ

けでもなく、冷静に俺の言葉に話しを続ける壺。

アレ？ 結構普通だなと思って顔を覗いてみると、言動とは別に、顔は疲れの色を隠せない風に眉がしかめられていた。

壺らしくて自然に笑みがこぼれる。

「何にすんの？」

「何、おごってくれんの？」

「今度おごってくれんならな」

ご褒美感覚だった。

小さい子に『よくできました』って言うような感覚。『おごってやる』と言えば、『別にいい』と遠慮されそうな気がして、とっさに冗談混じりに付けたしをした。

ふん、と言う風にきよんとした顔の後『んじゃあ、おにぎり。』と、これまたなんとも壺らしい答えが返ってきた。

やっぱり、俺はこの感覚が一番好きなのかもしれない。しつくり来る返答と、隣に確かにある友達存在。

黒澤と違ってそれは嫌悪感覚ではなく、本当に心から落ち着ける安堵あんどの付ける優しい感覚。……黒澤が俺にするようなことを壺にしていれば、今頃こんなじゃなかっただろうな。

俺のしていた事はちゃんと意味のある事だったんだと、今日はいつもとより2倍安心。

それから少しだけ壺と約1日ぶりの雑談をし、俺が自分で頼んだ定食にマヨネーズをかけ終わった頃には、壺は食事を済ませていた。雑談の終わりの合図。

「ゴチソウサマデシタ。うし、矢西、俺行くな。おにぎり、ありがとうな」

「うん。勉強か？」

「あーうん……まあな。あ、今度一緒に勉強しようぜ」

「マジ？ サンキュ、助かる」

「んじゃ」

空になった皿を食堂の台に置き、それから食堂から姿を消した壺。

俺はそれを見送った後に、一人、無言で食事 시작했다。

熱圧

「……あつ」

そうだ、と、壺のいなくなった食堂で一人寂しく飯を食べている時にふと思った。もう関わるなと言って、逆に有無を言わさず無理矢理抱かれた昨日の事。

そういえば、最後、俺の意識が無くなる寸前に黒澤は俺に何かを言った。確かに何かを言っていた筈だ。

何かを言われた部分だけが、鮮明に覚えてる。ただ、音無し。あの時確かに聞こえていただろう俺の喘ぎ声も、黒澤の激しく息つく音も、シーツの擦れる効果音も聞こえない。全くのサイレント状態。画質だけはブルーレイ並に良いのに、音声だけが響かない。

何て言っていたのか……？

黒澤の口パクが、脳内で何回も何回も再生されまくる。

まさかこの期に及んで『うざい』だの『きもい』だの言ってるわけじゃないだろうし、かと言ってあそこで雑談をしていたわけでもないし。ていうかそれこそ空気読め。

やっぱり黒澤のことだから、嫌味とか束縛じみたことを言ったのはほぼ確実なんだ。

「……全然分かんない」

大体アイツ、いつも意味の分からないことしかないじゃん。一緒に出掛けたり、逆ギレ、抱かないとか言っというて結局抱いて……。

「ご馳走様……」

何を言っているのか全然分からなくて、イラ付いてしまった頭を冷やしながら、俺は手を合わせてそう挨拶した。

少しだけざわざわとしたもう人気ひとけの無い食堂。並んだ椅子から立ち上がり、空になった食器ののったお盆を持ち、食器を下げる用の棚にそっと置く。

分かんない。分かんないことだらけ。気持ち悪い程に黒澤のこと

しか考えていない。……寝よう。とりあえず寝て脳内をリセットさせる。冷静になってから、考えてみよう。

階段を上がったり、曲がり角を曲がったり。新しい自分の寮部屋の道はもうすっかり覚えて、ドアの前に立ち、鍵を開けて部屋に入り込んだ。

無造作に靴を脱ぎ、ハシゴを登り2段ベッドの上の方に転がる。

寝転がって目を閉じれば、さっきみたいなシーンとした空気。少し耳を済ませれば聞こえる隣人の喋り声、笑い声。

「なんだこれ……」

ほんの少しだけの、空虚感。久しぶりに感じるその感覚は、とても悲しかった。

それにしても、今日は口数が少ない。クラス内の挨拶と、食堂のおばちゃんと、壺と喋って、……それくらい。いつもなら寮に戻ってきたら、壺と、もう一人の同室生と、3人で仲良く喋っていた。

黒澤も、今日は新しい教室の窓からみた頭だけ。面と向かってもないし、触られてもない。

「寂しい」

例えるなら、『寂しい』という言葉が一番似合っていた。うさぎみたいに寂しくて死ぬ事はないけれど、コレはコレで凄く嫌な気分。こんなに女々しかったか、俺。

無償に寂しい。隣に誰かいて欲しい。俺になんでも良いから喋りかけて欲しい。

こんなに醜い俺、初めてだった。

「……なんだよ、コレ」

目から零れた水滴に、頬が濡れた瞬間。

憂い、会話

「ん……うう……」

顔の皮膚が異常に熱を帯びていた。その中でも目頭が一番に熱い。今年の春はいつもよりも増して寒いのに、どうしてこんなにも熱いのだろうか？

頭を預けている枕も熱を帯びていて、寝返りをうった。ひんやりとしたシャツが俺の体を少しだけ冷やして、気持ち良かった。それでもすぐに俺の熱でさつきと同様に熱くなる。

……また気持ち悪い。

「……っ……うう……」

寝心地が悪い。起きたいけれど、体が重い。それに目が開かない。重い瞼が邪魔まふたをしている。

熱い。熱くてたまらない。サウナに居るような感じ。

熱い熱い熱い熱い。

「やにし……？」

気配ゼロ。俺の名を呼ぶ奴がいた。

「……あつい……」

誰かわかんないけど、お願いだからこの熱さ、どうにかしてくれ。

「……」

「……ん」

頼むから、と願ったと同時に、ふと、冷たい感触が俺の目を覆った。凄く冷たい温度。それが何か、その感触に気を集中させてみれば、ドクドクと大きく脈打っているのが分かった。少し温かくて、とても冷たい。

……手？

「きもちー……」

「……そうか」

瞼から伝わる冷たい感覚。瞼を伝って俺の顔中を冷やす手。

あ、…俺、この手、知ってる。そうだ、いつも触られてる。いつもいつも最初はヒヤっとした温度。その内に俺の体温に感染したように温かくなってくる。そうだこの手。

「くろさわ……？」

俺の嫌いな、黒澤先輩？

「……ああ」

小さく呟きの肯定。

「そっか……あ」

いつも嫌いな黒澤。勿論手も嫌いだった筈なのに。……今日だけは、ずっと触っていて欲しい心情。

「ごめん、俺…げんきんで……。…ずっと、触ってて」

「……」

OKも断りもない無言。だけど黒澤は俺から手を離さなかった。

「お前、…寝ながら泣いてんなよ」

心配しているような、呆れたような、少しかすれた声が俺の耳元付近でそう言った。

「俺、泣いてたの？」

全くの無意識状態で、俺は逆に聞き返す。

「うなされてた。……理由は何だ、俺か」

「違うよ」

黒澤の癖に、さも申し訳なさそうな声で理由を聞いてきて、俺は少し笑いながら否定した。

確かに俺は黒澤のことで悩んだり、イラだったりしているかもしれないけど、まだ黒澤のことで泣いた事はないんだ。

「寂しいよ……」

「……？」

「前の同室生、2人とも居なくなっって、一人ぼっちだ。…クラスも離れて、仲の良い奴もいなくて……」

「……あほ、お前は俺じゃないんだし、ダチなんてすぐ出来るだろうが」

地味に自虐してんじゃねえ……らしくない。

「作りたくない……」

「何でだ？」

「もしその中に黒澤の気になる奴がいたら、……俺、……やだ」

「……」

「壺と違って、今度こそ……守れない」

別にヒーローごっこしているつもりじゃないけれど、俺は俺から見た『悪役の黒澤』から壺を守ってきたつもりだ。

自分の体を犠牲にして、1年近く。

「おれ、壺の代わりになってたけど。もう嫌なんだ。黒澤に抱かれるの……」

「離さねーぞ……？」

イラついてムスツとしたような声でそう言った黒澤に俺は少しだけ口角をあげた。軽々しくそんな絶望を俺に突きつける黒澤は、いつもと同じだった。

「分かってるよ。だから今、黒澤に飽きられる方法、考えてたんだ」

「へえ、……いい方法思いついたか？」

「バツチリ」

「そうか」

「殴らないの？ 俺、生意気言ってるよ？」

全部全部、殴られるの覚悟で言った。それでも一向に殴られる気配がなくて、俺は痺れを切らして自分から聞いていた。

殴れよ。

「……殴らねえよ」

願いは虚しく去った。……お願い叶えてくれたり、叶えてくれなかったり……どんだけ絶望させんるだ俺に。

「なんでいきなり優しくなったの？」

「……は？」

「いきなり殴らなくなっって、抱くときも微妙に俺に気い使ってる感じ……」

「……」

「最初、俺が必死で壺に手出しさせないように頑張ってたら、いきなり出掛けようだとか……壺に手え出しそうで怖かったのに、……したらもう興味はないって……」

「それは――……」

「もうこの関係終わりにしようって言ったら、拒否るし、無理やり抱くし」

「……矢西」

「俺、お前が分かんないよ……」

罪悪感

その日の空はこれ程かと言うまでに快晴だった。

男子寮の大広間に一つだけあるTVでちょこっとだけ覗き見た天気予報によれば、午後から少し曇るだかなんだか言っていたような気もするが、もうよく覚えていない。忘れてしまった。

俺は晴れの日って言うのはあまり好きじゃない。青は冷たい、涼しい色なんて誰かが言った癖に、暑い日は決まって青い空。

汗がダラダラ出てきて気持ち悪いし、暑すぎると頭もクラクラしてくる。

逆に、雨の日は少しだけ好きなんだ。ねずみ色に濁った色。そんな空より暗い灰色をした雨雲から降る雨が、見てて凄く心地好い。あの生臭い臭いは嫌いだけど、音も好きだ。冷たい風が俺の体に突き刺さって、俺の体を冷やしていく。

晴れよりも、雨のが好きだ。

今日見たいに体も熱くならないし、きっと泣く気も失せてる。

今みたいに黒澤の手を貸してもらわなかったって、自然と涼しくなっている。

こんなに心地悪い天気は嫌いだ。

別にいつもこんな憂鬱な気分ってわけじゃない。

いつもは普通のテンションで雨の日には少し気分が良くなって、また天気が良くなったなら少し気が沈んで、後は元通りで、そのエンドレスリピート。

だから、今日は特に心地悪かった。

まあ確かに、臨時部屋替えて一人部屋になって、昨日は無理矢理黒澤に犯されて、忝とも、仲の良かった奴ともクラスが離れて……俺には気分悪くならない方が無理な話なんだ。

「俺、お前が分かんないよ……何がやりたいの……？」

「『何』……？　——何が、したいんだろうな。」

俺の気分が悪い原因の一つもこんな感じだし、本当にもう、2年の初っ端からついてない事ばかり。

「……ねむい」

「も、寝ろ」

「俺とやりに来たんじゃないの？」

「お前そんなだから、やる気失せた」

だから、優しくするなって。俺とお前は少しキツイ関係が一番お似合いだろ？　こんな俺でも抱けるだろお前なら。

お前が俺に優しくするから、俺はもっとお前を嫌いになるんだ。

……大嫌いだお前なんて…。

「……嫌いだ…」

「――……ああ」

優しくされた分だけ、俺は罪悪感を覚えるんだ。

お前を憎んでたという罪悪感。

お前を忌み嫌ってた罪悪感。

お前を罵倒してた罪悪感。

罪悪感に日に日に増して行って、俺を苦しめる。

「ごめん……なさい」

優しくしないでよ。

＊

「……」

次に目が覚めたとき、外は闇と化していた。きっと同日の夜。俺はむくつと起き上がり、まだボーっとする頭を動かして部屋中の辺りを見回していた。

黒澤の姿はなく、ただ俺一人の部屋。暗い部屋。

それにしても、アレからの睡眠は、気持ちの良いものだった。熱さもなく、涼しい感じ。結局、あのやり取りは何だったのか。

「……夢？」

現実か、夢か。……現実だとしたら、俺は黒澤にとんでもない事を言いまくっていることになる。

最悪……？

ドン引き

「なんだってんだよ……!」

ガシャンと大きな音を立てて、シズカが蹴った机の椅子が勢い良くひっくり返った。

「……」

気性荒立ってるシズカを、僕は絶句しながら見ていた。そんな僕をシズカが勢いよく睨み上げる。

さすがの僕でも今のシズカは怖すぎて、ホントに殺されてしまいそうな殺気に、少しため息を漏らしてシズカから顔を背けた。

避難した先の自分のテリトリ―。2段ベッドの上で布を被りながら片言、呆れ果てた声で僕はシズカに小さく聞いた。

「何デソンナニ苛ツイテンノ？」

「あっ?! 苛ついてねえよ、クソっ!」

「……」

こんなに暴れていて、いらついている他になにもない。

このままじゃこの部屋が崩壊してしまうかもしれない。勿論他の人にも迷惑がかかるし、先生に知られたら謹慎かもしれない。退学かもしれない。

「とりあえず、落ちつこうよ。話しならちゃんと聞いてあげるしさ」
まずは落ち着かせようと僕は被った布団の中からシズカの目を覗いた。僕の目をジッと見て、何か言いかけた言葉を飲み込み、とりあえず深呼吸をしている。

転がっている椅子を起こし、そこにドカッと座りこむシズカ。僕はシズカが暴れないと用確認した後に、2段ベッドのはしごを降り、目の前まで自分の机の椅子をズラし、そこに自分も椅子に座った。

「……んで、どうしたの？」

矢西となんかあったって事はもう分かっている。

「謝られた」

述語。

「……は？」

「泣きながら、ごめんって言われたんだよっ！」
言い方を変えた、述語。

「……ん、矢西が謝ったの？」

「あいつ、ふざけんじゃねえよ…っ」

「あー、ごめん」

「つてめえも謝ってんじゃねえよ！」

からかわれたのかと勘違いしたのか、僕の顔にガンつける柴田の顔が、恐ろしい。

「いや、そうじゃない。そうじゃなくて……意味がわかんないんだけど」

「ああ?!」

「どうして矢西に謝られたの?……シズカはどうしてそんなにむしやくしゃしてるの? 事の経緯から話してよ…?」

シズカをなだめるかのように淡々と質問を重ねていく僕。……何だか誘導尋問している気分。

それから一息ついてから、シズカ前髪をたくし上げ、僕に向かって口を開いた。

「さっき、矢西を抱きに行こうとした」

「……だね。『やりに行ってくる』って、具合悪いくせに行ってたね」

「部屋に入ったら、あいつベッドで寝てて、嫌がる前に寝込み襲おうとした」

「酷い奴だね」

「矢西の寝てるベッド覗いたら、あいつ、寝ながら泣いてた」
……。

僕は驚いてさっきまでだらだら言っていた口を閉ざした。泣いてたなんて、……全くの予想外の単語が出てきたもんだから…。

「暑苦しそうに額に汗ダラダラ垂らして、唸ってた。……それで、

俺が声かけたら熱いつつーから、とりあえず矢西の体温覚えてたら、俺って事は気が付いてたみたいだけど、寝ぼけてたかなんかしらねえけどアイツ、俺になんかグダグダ喋ってんだよ。」

「なんて喋ってたの……？」

「寂しいけど、友達^{タチ}つくったら俺が狙うから嫌だとか」

「ああ……正論」

「あ？」

「ナンデモ……」

怖っ。

それにしても、矢西が泣いてたか……。シズカに素っ気無い態度とか取るくらいだから、根は強い子だと思ってたんだけど。

友達が出来ないから寂しいのかな？ 寂しいから泣いた？ ……
なんて子供地味な事でいちいち泣くような子じゃないなあ。……
だとすれば、シズカも関わってる事なんだろうな。

「シズカ……さあ、矢西になんか変なことした？」

「……」

ああ、したのか。

「何したの？」

「……有沢の事はもう好きじゃないって言った」

「！」

驚いた、自分で気付いてたのか。

「それで、矢西が、それならもうこの関係終わりにしたいって言ったから……」

まあ、妥当だな。

「……無理矢理抱いた」

「……」

さつき以上の絶句を覚えた。抱いた？ 無理矢理？ スキじゃないって言って、セフレ関係止めようって言われて、それで無理矢理抱いた？

「バツカお前っ！ 何やってんだ！」

「ぼっ！　っ……」

「コレは、矢西が泣くのもなんとなく分かる。…なんとなくじゃなくて、かなり分かる。シズカが矢西嫌われるのも当然だ。」

「全く、一体どうなってんだコイツ等の関係は……。」

疑問（前書き）

※黒澤壊れ気味注意

情緒不安定すぎる・・・

こんなん書いてめちゃくちゃワクワクしてるみゅうじん。

……どうやら痛い恋愛書くのが好みらしい…なんつー奴だ…

そんで、こんな黒澤に、書いた自分が「良い気味」だと思っている
……

どうやらみゅうじん。は黒澤が嫌いみたいですww

今回は1900文字くらいで少々長めのようです

疑問

「とりあえず、……謝ること」

「……あ？」

険しい顔で俺にそういう、柴田の顔があつた。俺より身の詰まっている脳で何を考えているのかは良く分からないけど、俺よりは良い閃きをする奴。

「悪いのは別にシズカだけじゃない、こんな風になった根源は僕の言葉のせいでもある。……だけど、状況を悪化させたのはシズカだよね？」

事の根源。状況の悪化。

俺の口は閉ざされたままだった。

全く意味が分からない。今の俺と矢西はそこまで悪い状況なのか？
「はつきり言うけどシズカ。……矢西は、シズカの事を好きになる確率は低いと思うんだ」

「……好きだと？」

「恋愛感情じゃなくて、人間関係における好き嫌いな」

「んな事分かってる。……別に好きになってもらわなくていい。逆にこっちから願ひ下げだ、気持ち悪い。俺を拒むなら無理矢理抱く。俺はアイツを手放す気はない」

「……静、言ってる事、矛盾むじゅんしまくりだよ」

ムジュンってなんだ。

「静は矢西をどうしたいの？ 矢西の事、どう思ってるの？」

俺が、矢西をどうしたいか？ 矢西をどう思ってるか？ そんなの、決まってるじゃねえか。何度も言わせるな。

「矢西は俺のモノだ。俺がしたいようにする」

「……」

拒否権なんて与えねえ。拒否するなら抱く。嫌がってでも犯す。これだって何度も言ってることだろう？

「シズカ……」

ため息混じりの柴田の声。少し苛立っているようにも聞こえてきた。

「矢西は『モノ』じゃないよ」

眉間にシワを寄せて俺を見る目は何だか、矢西を守ろうとしているようにしか思えなかった。そして俺を、蔑む^{さげす}ような、卑下^{ひげ}するような目。

やめろ……そんな目で見てんじゃねえ。

「大体、矢西がお前のモノって、誰が、いつ決めた？ お前が勝手に言ってる事だろ？」

苛立ちに満ちた柴田の声がいつもより上擦って聞こえた。

「俺のモノじゃないとしたら、誰のモノだよ？」

「……誰のモノでもない、矢西は矢西だよ」

誰のモノでもないだと？ 矢西は矢西？

じゃああいつは、……矢西は、いつか自分の意思で誰かのところに行くって？ いつか俺の傍から離れるって？ いつか誰かに全裸を晒すって？

「あ……あ、あいつは、俺が抱いたんだ」

声が震える。

「セックスなんて誰とでも出来るよ」

「お、俺の抱き方が染み付いてるんだぞ？！ 俺が、あいつに！

俺の抱き方を染み込ませたんだ！」

「……矢西が本当にやりたい人とやれば、静の抱き方なんかすぐ忘れる」

「っ……」

「今の静は、矢西にとって最も忘れたい記憶だろ」

俺は、あいつにとって最も忘れたい記憶。最も……一番？

「もう一度聞くけど……静は矢西を、どう思ってるの？」

「……お、おれ……おれは……」

矢西は俺のモノで、俺のオモチャみたいなもんで……どう扱おう

と、どう乱暴にしようと、どうでもいい……って。

アレ？

じゃあ何で俺は急に矢西を殴らなくなった？

『何デソンナニ苛ツイテンノ？』

……なんで矢西に謝られて苛付いてた？

アイツの謝った時の声がいつもの声より擦れてて、小動物みたいで、あんなアイツは知らなくて、……胸が疼いて、気持ち悪くて。

頭の痛さが増して、……ああホラ、まだ痛えよ。

そうだ、殴らなくなった理由。正確には、殴れなくなった。それこそあの時謝られた時と同じ、矢西が弱い生き物みたいだったんだ。これから俺に殺されるみたいな顔で見て、目の輝きがなくなっ、諦めて抵抗力を無くした体、痛みに歯食いしばっている口元。

こっちが殺されそうになった。胸が裂かれそうなほどの激情。

……怖い。

なんて、そんな子供^{ガキ}みたいな感情を持った。

「俺は、……矢西を……どう思ってた……？」

「……僕に聞くなよ、勉強じゃないんだ。自分の事だろ？ 自分で

考えろよ」

「しばた……」

「分からないなら、もう矢西には関わるな」

なんで、お前にそんなこと言われなきゃいけないんだよ……？

「コレ以上、矢西を壊すな」

壊すな？ ……俺が壊れそうだ。

脳内がパンクしてる。このままじゃフリーズしちゃうんじゃないかかってくらい、頭の中がパンパンだ。

あー……頭が痛えよ。…俺は一体どうすりゃいい。

「これは、僕からの忠こっ……」

柴田の言葉。

最後まで言い切っていない途切れた言葉と共に、俺の意識もそこでバチっと途切れた。

＊

「……んだよっ……クソ」

次に戻った意識に初めに見た風景は、血だらけの柴田と、その柴田の服の胸倉を掴む俺の左手、右手はやっぱり、柴田の血の赤。鉄の匂いに、まだ痛む俺の脳が揺さぶられた。

対処

「早急に、退学処分を要求します」

化粧の濃い、いかにも生徒の事なんか考えていなさそうな女教師が校長に向かって口を尖らせながらそう言った。

「そうですね……」

1秒たりとも考えずに、そう肯定する校長にも苛立ちが募る。

「待ってください、彼は格好に乱れがあるものの暴力事件はこれが初めてですし……謹慎処分でもいいのではないですか？」

「……ですが、黒澤君はどんな処分でも受けると、そう言いましたか？」

「ですから謹慎処分なんですよ。……それに、今退学者を出せば新入生が混乱するかもしれない。そうなれば、この学校の風紀が問題視され、親御さん達からも抗議が来るかもしれません」

バツの悪そうな顔に、僕は少し『勝った』とそう思った。

「……」

「他の生徒を殴る恐れがあると思うと考えているなら……それはないです。静はホントにガチ切れした時しかこんな風に殴りません。」

……知らない人は殴りませんよ」

「……だとしてもですねっ……?!」

聞き分けの悪い焦りのある声に被せるように、僕の声が飛ぶ。

「大丈夫です、ただの喧嘩です。僕にも非はありますし、全てシズカが悪いわけじゃない。……だけど、今は少し同じ部屋に居るのは避けたいですかね……」

深夜の男子寮の医務室で、僕と、他数名の教師達の声が響いていた。

あの後、殴られ続け僕は意識を失う。気が付いた時には保健室で包帯だらけでベッドに横になっているこの状態。

静が僕を担いで来たそうだ。びびる保険医に事情を話し、教師陣

を呼び出し、『俺はどんな処分でも受ける』とそう言ったらしい。
つくづくバカな奴……。

静に殴られるのは初めてだった。喧嘩、流血、暴力沙汰全般が嫌いで苦手な僕を相手に、静はボコボコに殴り倒した。

きつと、我を忘れていた。ただそれだけのことなんだろう。

それにしても、僕のあの言葉。あれは少し言い過ぎただろうか？

……いや、……でも、あれくらいに言わないとあの鈍感は一生涯も気付かないまま矢西を傷つけて行くだけだろう。

矢西を傷つけ、矢西を傷つけた事に、アイツも傷ついていく。不幸の連鎖の繰り返し。……そんなのは見たくない。

「校長先生、コレは僕からお願いです」

「……」

見たくないならさっさと退学にすればいいとも思った。だけどそれじゃ駄目だと思う。

だって……僕がつまなくなっちゃうから。シズカと居れて楽しいし、ぶっちゃけ他のクラスメートとつるむ気にはどうしてもなれない。

それにシズカと矢西の関係を影からちよくちよく補正することも楽しいし。

「お願いします」

結局は楽しいから、退学なんて詰まんない事させない。

「丁度夕食時で皆いなくて血まみれの僕を見た人はいないんでしよう？」

「まあ……恐らくは……」

「じゃあ、大丈夫です。退学じゃない対処を取ってはくれないでしようか？」

「……」

僕と校長の睨み合い。その状況をジッと見つめる教師達。

カチコチと時計の音だけが聞こえていた。

「……分かった。退学以外の処置を取ろう」

「校長……！」

納得の行かない先生が校長に声を張り上げた。

「処置内容はこちらで決める。……だが、黒澤君を謹慎にしようする？　柴田君は黒澤君と一緒に部屋の部屋に居るのは避けたいんだらう？」

「ああ、それなら。2年の矢西　蘭って子がいますよね。僕、その子と結構仲良くて、丁度その子は一人部屋だし、シズカの謹慎中はそこに居たら駄目ですかね？」

「んー……相手の了承を取らないとも言えないな……」

「分かってます」

「分かった……聞いてみるとしよう」

「ありがとうございます」

ここの教師はよくよく生徒に流されるな……。

まあそんなわけで、ここから僕の『シズカと矢西の関係補正』と、シズカに殴られた事への仕返し攻撃が始まるわけだ。

移動

「え、……き、謹慎？」

「ああ、それでね。少しの間だけ柴田君をここに移動させたいんだが、かまわないかね？」

黒澤が謹慎処分になった。心の中で『ざまあみろ』と『何でこんな時期に？』がなりやまない。

柴田先輩を殴りまくって、謹慎処分。

よく退学にならなかったなど、そう思った。

「いや、全然構わないですケド……ケガ、そんなに酷いんですか？」

「骨に異常はないし、柴田君自体はピンピンしているが、皮膚の腫れが酷い」

「そ、ですか……わかりました。……いつから来ますか？」

「ああ、実はもう準備をさせていてね。もうすぐ来ると言うから、よろしくね。何かあったらすぐ私達か保健の先生に伝えなさい」

「はい、……わかりました」

俺の返事を聞いた後に、先生は俺の部屋から出て行った。俺は敬語と言う全世界共通社会礼儀に肩を落とし、椅子に座って溜め息を漏らした。

まさか黒澤が柴田先輩を殴るとは思ってなかったから、びっくり。

「ただの喧嘩なのかな」

黒澤優勢の。

……：：～
てたっけ？

柴田先輩に手加減も無しか、黒澤。最初から分からないまでもない事だけど、唯一の友達は大事にしろって。

「……」

まあ、災い転じて福となす？

災いが転じたのは黒澤で、福となったのは俺だけど。とりあえず

……これで会話相手が増える。独り言も飽きて来た。

不幸の連鎖に押し潰されて夢でも現実でも、黒澤に変な事してさ
れた事は俺今月一番の後悔。

しかもあの会話……何甘えてんだ俺、気持ち悪い。今思い出して
も吐きそうだ。

「恥ずかしい……」

人に聞かれたくないランキング1位だな……。いや、マジで。

もし知られでもしたら、俺。

「死にたくなっちゃうかもなあ……」

そう言った後に、まあ死ぬわけ無いんだけど……なんて冷静な突
っ込みを入れた。

それから5分くらいしてか、部屋の入口戸がこんこんと音を鳴ら
す。

「はい！」

「僕僕、開けて！」

柴田先輩だ。

急いで戸に近寄り扉を開けてから、俺は少しだけ驚いた。

「あれ、……先輩、そんなに傷ないですね……？」

「ん？ あーうん。静なりに気をつかってくれたのか知らないけど
露出してる部分はあるま殴られてないんだよ。顔は唇少し切って、
後目の上切れたくらいのケガだけ。一枚服脱いだら傷良く分かるけ
ど。……脱ぐ？」

「い、いいです！ いいからとりあえず中入って下さい！」

最低限必要な物だけ入ってるであろうリュックを担ぎ、傷の痛み
からかいつもより猫背の状態の柴田先輩がいた。

一言目から冗談を放つ柴田先輩は、その冗談を本当にし、部屋の
目の前で服を脱ぎだしそうで怖くなり、早々に部屋の中に入れた。

リュックを床に置き、また傷を配慮しながらゆっくり不自然に座
ろうとしている柴田先輩。

骨に異常はないって言っていた先生の言葉を疑う。 本当に骨は

折れてないんだろうか？ 肋骨とか折れてそうだ……。
ろっこつ

「矢西？ どうした？」

心中が顔に出ていたのか、俺の顔を覗いてきた。

「……俺のせいですか」

「うん？」

「俺が、黒澤にもう終わりにしたいって言ったから。逆ギレで八つ当たり、…とか？」

あの不確かな記憶も怪しい。

「違うよ。喧嘩」

「けんか……すか……」

「そうそう、……けんか」

柴田先輩の顔が一瞬、ドス黒く曇ったような気がした。

横暴な猫

「え、……先輩休まないんですか？」

「うん。だって顔の傷は全然無いんだよ？　しかもシズカは謹慎で休み。その癖同じ寮室生の僕も休むって、めちゃくちゃ怪しいじゃん」

「でも、……体育とか大丈夫ですか。服の中の傷」

着替えとか、……そもそも授業大丈夫なのかな？

「あー、人いなくなっただくらいに着替えるとか？　どっちにしろ授業は見学してて良いだろうしね」

「……なるほど」

柴田先輩が来たその日の夜の話し。喧嘩……というか、一方的に殴られて体も疲れるきって痛みまくりだろうし、次の日は休みだろうと思っていた直後の会話だった。

周囲の目を気にしているのか、自分自信の為か、黒澤や学校への配慮なのか。

よくわからないが、無茶をする人だと思った。

それとは裏腹に、黒澤とは違ってちゃんと先の事まで計算している先輩を、壱みたいに尊敬したりもしている。

「矢西、ご飯食べに行こうか。僕お腹減っちゃった」
ちようど飯時。

この感覚も懐かしい。区切りの良いところで誘われるご飯。柴田先輩が少し違和感のある立ち上がりをしながら、俺に笑顔に向けた。「はいっ」

この人は本当に……なんで黒澤と仲が良いんだろうか。黒澤に殴られても、逆上もしないし、こうやって俺に笑顔を向けている。優しい喋りかけに安心したりもする。

黒澤とは性格も全然逆だし、……普通にすればクラスメートに人気のある人だ。

「柴田先輩は、……どうして黒澤と仲が良いんですか？」

「？　どうしたの突然……？」

ひよこひよこ歩き、ドア付近で靴をはきながら不思議そうに聞いている。

「あ、いえ。……気になって」

「んー、……なんでかなー。気付いた時にはもう仲良かったかなー」
曖昧な記憶。

俺は黒澤と初めて会った時の事なんか絶対に忘れられないっていうのに……。

「でも、皆何怖がってるのか知らないけど。結局シズカは僕等と同じ人間なんだよ」

「……はあ」

あまり言っている意味が分からない。

「餌を狩る肉食獣でもないし、空想世界の魔物でもなんでもない。んーそうだなー。……普通より少し凶暴な程度かな」

「……すこし……？」

この人の目には、黒澤は一体どんな感じに映っているんだろうか……？

「……く、……黒澤を動物に例えたら……なんだとおもいますか……？」

「シズカ？　んー……——ネコ？」

そんなに可愛くねえよっ！

気まぐれってか？　気まぐれすぎるよっ！　……その気まぐれで

俺の体どんな目にあったか…。

「ネコって、普段そっぽ向いてなかなかカマってくれない時あるけど、ある日いきなりゴロゴロ喉鳴らして甘えてきたりするんだー、……あ、僕の実家ネコ飼ってるんだけどねっ。一家そろって犬より

猫派なんだあ」

「はあ……」

俺、犬派。

「それで、猫はホントは寂しがりな性格なんだよね、きっと。でも

他と接するのが苦手だから、いつも違う猫と喧嘩ばかりしてる」

「……」

「負けたって勝ったって、やっぱり寂しいんだよね。……だから僕が傍に居て慰める役。それで、相談とかして、遊んだりとかね。友達みたいな事してる」

黒澤が寂しがりな性格？ 柴田先輩がその慰め役。友達？

「柴田先輩、優し過ぎますよ……」

「ん？」

「そんな風に近くにいるから、こんな目に合うんじゃないんですか？ 柴田先輩が、黒澤は猫より横暴って事分らないワケないですよねっ？」

お人好し。

「……」

「何で黒澤のこと怒らないんですかつ？」

「僕はもう、大人の階段のぼり始めてるからね」

「ギャグですか」

「いや、今のすこし真面目だったけど、別に僕は怒ってないわけじゃないよ」

そんな笑顔で言われても説得力ないですよ…。

「まあ、あからさまに怒ったって大人げないでしょ？ でも、目には目を歯には歯を……コレ、一応僕のモットーね」

「……それ、どういう意味ですか……？」

「んー……そうだなー。僕は思ったほど優しい人間じゃない、って事かな？」

温かいその手が、優しく俺の頭を撫でた。

横暴な猫（後書き）

自分モロ猫派ですわ・

Q

――怖い。

なんて、そんな子供^{ガキ}みたいな感情を持った。

「俺は、……矢西を……どう思ってた……？」

俺のことなのに、俺が分からない。俺の心が、知る事を拒んでる。脳が考える事を遮って、……そして俺は、考える事をすぐに諦める。……僕に聞くなよ、勉強じゃないんだ。自分の事だろ？ 自分で考えろよ」

「しばた……」

そして、結局は他人任せ。

「分からないなら、もう矢西には関わるな」

俺のじゃない口から告げられた、俺の求めていた答えではない事に否定を覚える。

本当に、駄目なんだ、俺は。

「コレ以上、矢西を壊すな」

壊すな、なんて……俺が壊れそうなんだ。

脳内がパンクして、このままじゃフリーズしちゃうんじゃないかってくらいに頭の中がパンパンだ。

頭が痛い、割れそうだ。俺は一体どうすりゃいい。なあ、どうすりゃいいんだ？ どうしたら答えがでるんだよ？

俺は矢西をどうしたい？ どう思ってた？

……わかんねえ。

「わかんねえんだよ」

全然、全く。これっぽっちも。1ミリも。カケラも分かんねえ。分かんねえから、俺は脳で考える事を諦める。

全部全部を、暴力と、罵声で片付ける。

「これは、僕からの忠こっ……」

この世界は、全部全部、全てが俺に不利すぎる。

言葉にしなきゃ伝わらないとか、文にしなきゃ分からないとか。

「……んだよっ……クソ」

気付いた時にはもう、何もかも無くなってんだ。俺の手の中からは。俺の回り全てが、俺の存在を避けやがる。

化けモンみたいに、邪魔モンみたいに、地雷が埋め込まれた地面を避けるみたいに俺から遠さざかる。

「分かってんだよ、……俺が自分でそうしてるって事くらいよ……」

両鼻から鼻血を出し、口角から細い血を垂らし、クタッと力をなくして意識を飛ばしている柴田に、それだけ訴えた。

「医務室、連れてかなきゃな……。……診せなきゃ、なんね、し」

柴田の腹を殴りまくった腕で、今度は柴田を力いっぱいに担ぎあげた。

＊

「謹慎、……一週間」

喧嘩事や、犯罪行為だとか、警察に世話になることは極力頑張ってセーブしてたつもりだったけど、やっぱり俺には無理だった。

それでもコレだけ長く何の事件もない高校生活が続いたんだから、自分でも少し関心している。入学してから2年ちよつと。……コレで限界。

「……親に連絡されっかなー……」

連れ戻されるかもな。

冷静に考え直してみれば、数え切れないほどの後悔が全身を駆けずり回った。いや、……昔から後悔なんてしまくってんだ。今に始まった事じゃねえ。

一人の部屋に、明かりも付けず、それでも長い間居て慣れた暗闇に、寂しさも、柴田の居ない違和感も、恐怖の一つも覚えられない。柴田は俺の謹慎中矢西のところに行くらしい。……やっぱり、嫌われたんだろうな。

「当たり前だよな」

意味もなくアイツを殴った。暴力だとか、血とかが嫌いな奴だ。

……元から俺なんて嫌いだったかもしれない。とうとう痺れでも切らしたのか……？

なんて。結局は、今はこの状況が俺等には一番良いんだ。意味もなく殴ることもない。

「……頭、いてえ……」

頭と、手がギリギリ痛んで、心の奥が、少しツキツキする。そこで、心の奥深くでずっと、矢西の顔が離れない。

今の俺にはもう、答えを教えてくれる奴は誰一人いねえんだ。

2段ベッド

「矢西、僕下のベッド使っていいかな？」

その日の夜のことだった。

黒澤と離れ俺の部屋に来た柴田先輩と、飯食ったり雑談したり、色々と楽しく過ごしていた今日の終わりに、その一言で俺の体が固まってしまった。

「……え」

「手とか腹とか痛いから上登るのきついんだよね」

ベッドの柱に手を突きながら、下のベッドに潜り込もうとしている柴田先輩の服を、俺は少し強めにグイッと引っ張った。

「え、駄目？　いつも下で寝てた？」

ビックリしたように俺に振り向いた柴田先輩に、俺は言葉を出せなくなってしまった。

「いえ、そうじゃなくて……その」

言えない。

「？」

言えねえっす。

「……そこ……あの……」

「なに？」

沈黙。

静かで冷たい空気が流れ込もうとしていた。

「そこ……おれ、…黒澤と、やったところで……その……」

「……」

——人が性交したところで寝たくないし、気持ち悪いでしょ？

最後まで言葉は出せなかった。

俺は恥ずかしさにうつむく。

いくら柴田先輩が俺と黒澤の事情を知っていたとしても、コレは嫌だろう。ていうかドン引き？　いくらなんでも、男が男にやられ

るなんて、拒否反応を起こすだろうし。

「すみませ、……だから、えと」

「んだ、そんな事か」

「……は？」

思った言葉とは全く別の答えが耳に流れてきて、俺はアホらしい声をあげながら柴田先輩を見上げた。きょとした顔で僕を見据える柴田先輩。

「シーツは？」

「と、りかえてます、…ケド」

「んじゃ充分。そういう小さい事は気にしないんだよ僕は。シーツ取り替えてんならそれでいい」

心広いな……。

……ていうか、人の情事に興味ないだけ？

「ほ、…本当に？」

「本当本当。僕の事は気にしないでいいし、矢西も変な事思っでないで早く寝ちゃいな。明日学校遅刻するよ？」

「……はい…」

変わらない笑顔言われて、俺はまたしても安堵を付いてしまう。

この人、やっぱり良い人すぎる。

羨ましいな。

「もし先に起きたら、起こしてクダサイ」

「ん、了解」

ベッドに入った柴田先輩を、やっぱり少し重い気持ちで確認し、電気を消して俺も自分のいつも寝ている上のベッドへと上がっていった。

黙ってられる僕じゃないし

矢西は良い子だ。

僕のことなんかを『優しい』なんて言ってくる。けど本当は、僕なんかより断然シズカの方が『優しい』んだ。

だって、……こんな僕を殴って、医務室まで連れてって、『どんな処罰でも受ける』とか。優しくないならこんな事言わないはず。傷付いてる僕を放っておくだろ？

それに比べて僕はどうか？ シズカに殴られた事に対しての復讐なんてしようとしている。そんな事をするのに対してなんの罪悪感も無いのだから。優しいなんてカケラもないだろ。

「……」

実はぶっちゃけてしまえば、僕は少し、ほんの少しだけ、矢西の事を好きになってしまった。

シズカに乱暴に扱われても人に頼ろうとしない後ろ姿。ズタボロになっている心を、強制的に引き締めて、そうして僕に会ったら引きつった顔をして笑って。

引きつった笑顔の傍には、いつもシズカの姿があった。矢西が本当の笑顔を見せてくれるときは、シズカのいない場所。安堵したように、僕への警戒心は全く無く。

心が揺れた。

体はもうシズカによって奪われていて、『物』として扱われている。なら心は？ シズカみたいに『物』として扱うんじゃない、本当に僕を想わせる事は出来る？

そんな事をすれば、シズカと僕の間で、矢西が完全に壊れちゃうことなんて充分に知っている。

スヤスヤと眠る矢西を、ハシゴの上から覗き見た。

「シズカに泣くくらいなら、僕に助けてって言えばいいじゃん」

小さな声で、そう一言訴えた。

少しだけ僕を必要とするんじゃない。沢山僕を必要として。

僕はシズカより頭も良くて、シズカより穏やかな方で、殴らないし、乱暴にしないし、罵声だって飛ばさないし、抱きしめてあげられるし。でもシズカより君は好きじゃなくて、シズカより優しくないし。

僕はシズカより沢山のモノを持っている筈なのに、まだシズカが羨ましい。

「でも、……シズカから全て失くしちゃったら、可哀想だしね」

シズカの心が分かって、君の心が分からない。

最後には何を望む？ 本当は誰を必要としていて、本当は誰と体で結びつきたい？ シズカが嫌いな理由は、何個ある？ 好きな所も少しはあるの？ 僕の事はどれくらい好き？ 僕のこと少しは嫌い？ シズカが駄目なら、僕は良いの？

そんな安心した顔で寝ちゃってさ。少しは僕にも警戒を持ってよ。こんな事思っちゃってる僕の罪悪感を悟ってよ。

そんな涼しい顔して眠っちゃってさ。僕なんて君が気になって全然眠れないんだよ。

いつもの同室生とは違いすぎる、ひ弱な寝息。

「ズルイな」

こんな良い子を物扱いして壊そうとしているシズカも。

僕にこんな事思わせて、シズカを混乱させちゃう矢西も。

こんな事思っちゃって、シズカに復讐しようとして、矢西を好きになっちゃって。そんな二人をくっつけようとしちゃってる僕も。

二人ともズルくて、でも一番ズルいのはこの僕。

「ごめんね、……もう少し、辛抱しててね。ツライのはもうすぐ終わらせてあげるから」

軽く握っている矢西の指が水みたいに冷たくて、僕の指が、カイロみたいに温かった。

目覚まし

「……矢西、そろそろ起きないと朝ご飯抜きになるよ?」

「んー」

「……そっか。矢西寝起き悪いんだ…おーい矢西ー?」

「うー……?」

俺の名前を呼ぶ間に時々独り言を交え、それでもなんやかんやで俺を起こそうとしている声が耳の横からふりかかって来る。

まだ何も受け入れたくない状況。

声は充分に聞こえているけれど、それには応答しなくて、むしろ俺の眠りを邪魔するなって感じで、俺はその呼ぶ声に無視していた。

「んー……僕先に行っちゃうよー?」

「ん…」

俺が軽い相づちを打ったと同時に、それから数分、俺を呼ぶ声は聞こえなくなった。何かがちやがちゃする音がその数分の間聞こえ、ふと、また2段ベッドのハシゴを登る音が耳に入り込んだ。

また俺に何か声をかけるのかな?

なんて事を思っ、俺は声が聞こえないようにうつ伏せになって枕に顔をぎゅーっと押し付けている。

「……っぐ」

突然の重み。

腰辺りにぐっと重みが増して、俺はつい変な擬音語を発していた。

「ぐるじっ……うう…?」

何だ? 誰だ?

「……」

「……う?」

俺にのっかかっている奴の息が聞こえてきた。息はゆっくりと俺の頭えと近づいてきて、それから首に小さくキスをした。

「っんー…」

何だコレ。……黒澤…？ 朝からこんな事する奴なんて、黒澤しかない。俺にサカって来る奴なんて、黒澤くらいだ。

なんだアイツ。謹慎中じゃなかったのか？ ……いや、寮内って別に回ってもいいんだっけ？ ……いやでも、他の奴の部屋には入っちゃ駄目なんじゃ…。

「『ラン』」

ふと聞こえた低い声。

「……っ！ 名前呼ぶなあっ！」

俺が最も嫌な事。嫌いな奴に自分の下の名前を呼ばれる事。嫌だと、やめろと、ちゃんと言った筈なのにまた呼んでやがる。

一気に目が覚めた。

大声を出して思い切り起き上がり、俺の名前を呼んだ黒澤を振り返って、俺は啞然とした。

「あ、……れ？ ……柴田センパ…え、くろさわ……んう？」

「いだったっ、矢西、…朝からハッスルしすぎ…。」

「いや、あ、すみませっ！ ちょ、ビックリして」

そこにいるのは、反動で体勢を崩し、ベッドの柵さくに頭を打ってうずくまっている柴田先輩。少し涙目になりながら俺を見てきて、俺はとっさに謝った。

ていうか…あれ？ 今の何……？

無視してたけど意識は確かにあったし、夢ではない。

「……柴田先輩、今、……キス…し」

「ん？ ……あ、てかさ矢西。この学校遅刻厳禁って校則あるから絶対に寝てる相手起こさなきゃいけないのわかってる？」

「……あ、はい。それは…」

「それに対して無視とか、……ちよつと無いんじゃないかなあ？」
いまだ涙目で悪い笑みを浮かべながら俺の頭を少し強くぐりぐりとする柴田先輩。

「すみません……ゴメンナサイ」

土下座とまではいかないものの、深々と頭を下げ謝ると、柴田先輩は一言。

「許す」

と言ってまた俺に笑った。
軽っ。

「ほら、早く顔とか洗って。朝ごはん食べに行こ」
「っはい」

鉢合わせ

早く起きないと……って言う単語を何度も使って俺を起こしていた柴田先輩を少し疑った。目覚まし時計に表示されている時刻はどう見ても朝6時だったからだ。半も回っていない。

もう少し寝かせてくださいと懇願しても駄目だと、僕は腹が減ったんだ、とか。

「一人で来ればいいのに……」

「一人で食べても美味しくないじゃん」

目の前に出された朝食に二人で手を合わせていた。いただきますとそれぞれに口にし、割り箸を割る。綺麗に割れた事を柴田先輩に自慢されたけれど、ぶっちゃけ自分の方が上手く割れたので自慢し返してやった。

「ていうか、……いつもこんなに早いですか？ ご飯食べるの」

「うん、まあね。人多すぎるとウザいし。こういうひと気の少ない時間に食べるご飯のが美味しいんだよねー……」

「黒澤と二人一緒に食べてるんですか？」

「……そだよ。シズカが来たら皆怖がるから、結局やっぱりこっちの方が都合良いんだよ」

確かに、俺が起きてから来る食堂はざわざわとめちゃくちゃうるさいし開いてる席見つけるのも苦労する程に人が多い。

それに比べてこの時間帯の食堂は部活の朝練がある生徒がちらほらいる程度。バスケットとか、サッカー部とか。

「こういうのもいいけど、あんまり早く食べたら俺、昼休み前に腹減っちゃうからなあ」

「矢西は食いしん坊かあ」

少し予想外の言葉に、俺はだらしなくテーブルの上に肘を付いた。

「いや、普通ですよ……多分」

「ごめんごめん、後でパン買ってあげるよ。勿論おごり」

眉の先端を上げながら申し訳なさそうに苦笑い。

「ん、ありがとうございますっ」

先輩におごってもらうのはなにか悪い気がしたけれど、こんな早い時間に飯を食うと昼休み前に腹の虫が鳴くのは分かりきっている事で、俺は何の迷いも無くお礼を言った。

それから手に持った箸が、何度も何度もご飯やおかずを行ったり来たりする。お互いちよくちよく言葉を交じわせながらも食を進め、人が増える前に朝飯を終えた。

「ごちそうさまでした」

手を合わせてそう言うと、俺よりも数分早く食べ終わっていた柴田先輩が笑って立ち上がった。

「戻ろっか」

「はい」

おぼんを下げ、ちょうど頭も冴えて意気揚々と食堂を後にしようとしたと同時に、俺の目にとんでもないものが映った。

「……」

少し口角が上がっていた口が重たくなったように閉じる。

そのとんでもないものを目に映した俺の脳内は、自分の心配より先に、横に立っている柴田先輩を心配していた。

「しばたセンパっ……」

焦って柴田先輩をチラッと見て、驚いた。

待っていたとでも言うかと思うほどに、薄く笑みを浮かべていた。黒い目ははっきりとその人物を映し出している。

いつもとは全く違う笑み。

妖しく、コレでもかと言うほどの悪役面。その視線に気付いたのか、ふいにこちらを見たその人物が、目を細めた。

その瞬間に思い出す、柴田先輩の言葉。

『僕は思ったほど優しい人間じゃない』

金髪に、少しの赤髪。こっちもこっちで柴田先輩に負けないような悪役面で、俺の足が一瞬、鉛みたいに重くなった。

ふいに、頭をぽんと軽く叩かれた。力んでいるのか、震えている手は、楽しみにひしめいている感じがした。

「矢ー西、行こうか」

手が頭から離れて、背中に回る。

背中を押されて、俺はオズオズと歩き始めた。

「……柴田先輩」

「ダーイジョウブ」

背中にあった手が、腰に回った。

黒澤は俺達をジーツとがん見していて、全身から殺気が満ち溢れている。

何が大丈夫なんだよ……めっちゃこええよ……！

出入り口付近に突っ立っている黒澤。嫌でもそこを通り過ぎないと食堂を抜け出せない。俺は意を決して意識を出入り口に向けていた。

出来るだけ目に黒澤を映さないように。

出来るだけ平然と通り過ぎるように。

時間が過ぎていくと共に、俺と黒澤の距離が縮まってくる。俺の腰に回っている柴田先輩の手が、俺の服をギュッと握った。

「……」

俺も柴田先輩も、……3人共無言。黒澤の右腕と俺の右腕が、30センチの距離で通り過ぎようとしていた。

押しつぶされそうな殺気と殺されそうな視線を出来るだけ意識せずに歩いていると、ふと右手にヒヤッとした感覚がして、ビクッと体がしなった。

「……？」

同時に今まで突っ立っていたままの黒澤が歩き出し、食券機の前まで歩き出す。視線はもう感じなくて、いままでの殺気も嘘かのようにならなくなった。

黒澤の手が、俺の手に触れた。いや、触られた。意図的。

俺はまだ感触の残る手をギュッと握り締める。

その冷たい感触は、あの泣いた時と同じ、気持ちの良い感覚に似ていた。

ライトスカイブルー（前書き）

遅くなってすみませんでしたー・・・
最近忙しかった。

あと何書けばいいかわかんなかった・・・やべえやべえ・・・

ライトスカイブルー

教師によって、黒板に白をメインとした質素で単純な色の字が書き連ねられていく。

さっきの地獄のように苦しかった時間から一変。なんとも穏やかで静かな時間が俺の回りを流れている。

安堵を付き、小さくため息を吐いた。

天候は快晴。少しずつ暑くなり始めている微妙な気温で、ブレザーを着ている奴やYシャツだけの奴がバラバラにいる感じ。

「んじゃ、次ここ分かるやつ……」

教師が黒板に書いた問題をチョークでカツカツと叩いた。変わらない無音。本当に分からない奴は黒板から目を逸らして教科書やノートを右往左往している。俺もその一人。

分かっている奴はこの中には何人もいるはずなのに、どうして手をあげないのか。……いや、分かってんだ。面倒臭いだけだろ。喋らなくても、授業態度さえ真面目なら成績だって下がらないわけだし。

「なんだいないのか。あー、じゃ、矢西」

「わかりません」

だからってこういう俺みたいな頭悪い奴を庇わないのはどういう事なんだろう。誰も何も言わないところやってだれかれ構わず日にちやラッキーナンバーで答える奴を当てるのは分かりきってることなんだし。

「なんだ、わからないか。考えた上でわからないのか？」

「はい」

高1でやったじゃないか、復習だ復習。と嫌味ったらしく言い、教師はまた別の生徒を指名した。その生徒はやっぱスラッと正解の答えを言い当て、少しだけ好感度も上がっただろう。

最初っから答えとけ。

なんて、心の中で八つ当たりをしながら、俺はまた黒板から目を

逸らし窓の外を見上げた。

今日は朝からショッキングなことがあった。

黒澤に偶然遭遇したこと。

その偶然が多分きつと、柴田先輩の仕掛けた事だと思った事。

柴田先輩はこの展開を面白がっていた事。

「……」

俺をあんな朝早くに起こしたのはわざと俺と黒澤を顔会わせさせる為。朝の柴田先輩との会話に答えも隠れてる。

それと、あと一つ。

黒澤と触れた指の感触が、まだ消えない。冷たくて、ふにっとして。あの泣いた日の感覚。性行為をしている時の気持ち悪い感触じゃなくて、気持ち良くて、冷たいけど、温かくて。

酷い奴なのか優しい奴なのか分からなくて混乱する手。

黒澤が俺の指に触れた事なんか柴田先輩は気付いていなかったみたいだから、そこまでは計算していなかったんだろうけど、鉢合わせする事は計算済みだったんだろう。

柴田先輩への信用度が、少し失われた感じがした。

……何がやりたいんだ。頭の良い奴の考える事はやっぱりレベルが高くて、俺にはよく分かんない。

「ん、もうこんな時間か。号令係」

「きりーっ」

ふとチャイムが鳴った。教科書類を早々と片付ける生徒を止め、号令がなった。

今この時間。柴田先輩の怪我は大丈夫だろうか。痛くないだろうか。

黒澤は、何をして、何を思っているだろうか。

俺のことでも考えているんだろうか、何て変な事思っ、馬鹿か
と少し自虐気味になった。

馬鹿

アホだ、俺は。

「……何やってんだ」

久々に、矢西を見た気がした。矢西に近づいた気がした。それでも何故か、隣にいる柴田が気に入らなくて。

久々に、矢西に触れた気がした。

なんでこんな事をしたのか分からない。強いて言うなら、『したかった』から。ちゃんとした理由なんて無い。ただ矢西に触りたかった。

あの子の平然としたスルーは、神演技だったと思う。

本当なら矢西の横でニヤニヤ笑ってる柴田にしてやっただけで感じに自慢でもしたい気分だった。でもそれじゃ俺の方が格好悪いし。

……ていうかアイツ、矢西に密着し過ぎなんだよ。肩手置いたり背中触ったり腰に手回したり。

自分が気失うまで殴り続けた奴が目の前にいるんだから、少しはビビって腰抜かしても良いと思うんだよ。てかそれくらいしろ。

それなのにアイツ、俺を挑発する見たいにニヤニヤ笑って矢西にべったりくっついて、しかも俺が謹慎してる間、相部屋出て矢西の部屋に居るとかほざくし。

……うぜえ。何がしてえんだ。復讐か？ いや……それなら別に、…売られた喧嘩は買うが。アイツ俺に喧嘩売るような馬鹿だったか？ 思い切り自分を自画自賛してる感じな事を言いながら、俺は食堂から戻ってくるときに自販機で買った缶コーラを口に含んだ。

「つまんねえ…」

勿論何も無い事はない。

机の上にはもう何枚書いたか分からない反省文用の作文用紙の山。あと何回も書かなきゃいけないけれど、……そんなかったりい事俺が真剣にずっと出来る筈もなく。

無惨にも白紙の作文用紙が嘆いていた。

外の明かりはカーテンによって強制的に閉ざされていて、直接光を浴びることない薄暗い部屋。寒いような、生温いような温度が俺の肌を撫でる。

自ら外と断片した一人だけの世界に沈む。人と喋らないってのは別にどうも思わない。だから柴田がここにいないくてもどうも思わない。

なのに何故か、あってから1年ぐらいしか立ってない矢西の事ばかりが気にかかる。

会いたいなんて思わない。

喋りたいとも思わない。

だけどあいつに会った瞬間に、触れたいと思った。抱きしめたいと思った。抱きたいと思った。

……なのにアイツ、俺にこんな事思わせといてなにちゃっかり柴田に触らせてんだよ。俺が抱こうとした時は嫌がってたのに、何で何も言わないんだよ。

おかしいだろ。

「それほど俺の事嫌いってか？」

柴田ならいいって？ 俺に触られると気持ち悪くて、嫌で？

そうだよな。だってお前、食堂で鉢合わせた時、柴田に笑ってたもんな。俺にはそんな幸せそうな顔向けた事ないのに、あっさり笑いかけてやがって。

良い差別だろ。

俺にもそうやって笑えよ。

楽しそうな顔しろよ。

「ムカツク」

俺は悪役で敵で、矢西はヒーローで、柴田はその味方。話しはヒーローの親友を悪役から救う事から始まっている。

味方に笑いかけるのは別におかしな事じゃないけれど、悪役に笑いかけるって図はおかしい。お互い敵同士で、いがみ合ってるんだ

し。

倒しあう関係。先には勝敗が待っていて。

「俺には一生笑ってくれない……？」

俺の脳が精一杯考えられるモノが全て、絶望の未来。

退屈（前書き）

エ・・・ ショートストーリーなんて言ってるけどめっちゃくちゃ話数重ねてる

退屈

「先生、僕体育見学します」

「あ、ああそうか、…そうだな。じゃ、皆の邪魔にならないように座って見学してろ」

「はい」

皆に体の傷を見られないよう、授業本鈴ギリギリに更衣室から出てきた僕は、真っ先に汗臭い体育教師の元へ駆けつけそう言った。

話しはほんの数秒で終わり、それと同時に本鈴もなり、先生は笛を鳴らし皆を集めて号令できる状態を待っていた。

僕は言われたとおり人の邪魔にならないように、ステージの上に入り、足をブラブラ下げながら体操風景を眺めている。外はまだ寒くて、男子はこの第一体育館でタイム制限付きの1500Mを走ろうとしている。少し廊下を渡ったところの第2体育館では女子が全く同じような制限付きの1000Mを走っているんだろう。

夏休み前に4回のクリア。まだ今日が1回目だから、やる時間はいつでもある。持久力には余り自信は無いから、困ったな。少しじじ臭いけど、朝早く起きて外走るとかしなきゃな。あとでコンピュータ室のパソコンかりて効率の良いやり方と探そうか……。

なんて、こんな時にそんな平和な事考えられる僕って本心冷たいなあ。今頃シズカと矢西はめっちゃくちや沈んでるんだろうな。

矢西は見たくない人を見て、シズカは矢西が僕にベタベタ触られるのを見たんだから。今のところ、僕が平和だ。

そんな僕が、このシズカの謹慎中に2人にそんな平和を分け与える。

「でも、まだ2日目なんだよな」

少し展開が速すぎた。

「矢西が僕を優しいなんて言うから——」
人のせい。

自分のせいなのね。

時間は今の展開みたいに早急にすぎ、体操が終わり、1500Mのタイムもほぼ終わり、授業も後20分ちよいで終わりを向かえようとしていた。

息切れすぎる草食系男子。体の調子が悪いフリして授業見学している奴の雑談。走りを終え、呼吸にも余裕が見え、ゲラゲラ笑ってる男子達にも。

いい加減うざくなってきた。

こいつ等シズカが近くに居たらめっちゃ黙ってるのになあ……。用は皆へたれすぎで、シズカをちゃんと分かうとせず怖い想像しちゃってるだけ。

コレだと、怖がりながらも、嫌がりながらもシズカから逃げようとしないう矢西の方が男らしい。格好良い。利口だ。

それでも、……いつもシズカと一緒に居て、普通に喋ってる僕が近くに居ても怖くもなんともないんだから、……外見って重要なんだなあって少し関心する。

シズカと僕の外見のギャップが凄いからなのか。ただ単に僕が暴力振るうような性格じゃないと分かりきってるからなのか。よくわかんないけど、……人間の感覚ってのは良く分かんない。

僕はシズカは全く怖く無いけど、矢西も、ここに居る男子達も、シズカが怖い。

僕は自分を優しい奴とは思ってないけど、矢西は僕を優しいと思っていた。シズカの印象はその逆。僕はシズカを優しいと思ってる。矢西はシズカをそうは思っていない。

ここからの巻き返しが難しいんだ。

優しいと思ってた奴に恐怖を感じさせるのは簡単な事。相手に怖い思いをさせればいいんだ。裏切りでもしたら危険信号なんてすぐにでる。

逆に。

普段恐怖を感じてる奴を安心だと、本当は凄く優しい奴なんだと

思わせるのは、結構な気力と努力と時間がある。

人の信用度は宛てにならないって事だよな。

「まずは行動させる為にこっちが次の行動起こさなきゃ……」

体育教師によって、集合の合図が出された。

授業終わり5分前。

僕はステージから降りて、列に加わって行った。

狂感（前書き）

最近ggdggdすぎてつまないんで、…ここで区切り。
あんま深く追求はしないでください・・・ww

柴田視点・・・？

無意識 無意識言ってるんで、柴田が無意識に思ってることだと思
います。
多分。

狂感

社会はそんなに甘くない。

子供は世間知らず。

立派な大人になれ。

まるで世間を全部知ったような口調で、僕の間からは到底立派とは思えない大人達が、いつも僕にそう口を揃えて言っている。

子供が世間知らずなら、大人は全てを熟知しているのだろうか。

どうすれば人生に躓かず人生を歩める。相手を傷つけない方法は、死んだら人はどうなる。

人生に躓かない人生なんてのは無い。

どんな裕福な家庭に生まれたって、些細な事でも躓く事はある筈。貧乏に生まれたら、人生躓きまくりだ。ただその先の運命が、幸せか不幸かに別れてるだけ。どちらの道を歩くかは、そいつ自身で決める事。

相手を傷つけない方法なんてない。

「相手の気持ちを考えろ」

「自分の言いたい事を少しは抑えろ」

相手の気持ちが分かる訳ないじゃん。自分の言いたい事言わなかったら、自分の気持ちが伝わらないじゃん。そりゃそれが暴言なら自重はする。それを自重したって、相手の言葉の取りようで、誰でも傷つく。

死んだら人はどうなる？

死んで見なきゃ分かんない。一遍死んだら、来世の自分は容姿も性格も思考も変わっちゃまって、僕の事も覚えてなくて、死んだときの事も覚えてねえ。

ほら、大事な事何も分かってねえじゃん。こういうの重要じゃん、気になるじゃん、知りたいじゃん。

子供が世間知らずなんだろ？　じゃあ大人が教えてよ。

僕は今まだ世間知らずの方で、あと2、3年もすればそんな大人の仲間入り。きっと普通のリーマン生活を送っていて、上司に言いたい事も言えず、したい事も出来ず、もっと年が立てば仕事の遅い部下にムカついて、まだまだ上司にもムカついて。

結局は僕も含め、みんな同じ『大人』になっていく。

社会はそんなに甘くないけれど、皆自分には甘い。自分より知識も経験も劣ってる子供には良い顔をしたい。カッコイイ存在で居たい。分からない事をあたかも知ってる風に言いまくって。

ある大人は子供の将来を自分の野望の為に潰し。

ある大人は子供の心身をズタボロにして壊して捨てて。

ドラマにある幸せな、ごく普通の、理想的な、そんな家庭に生まれたかった。普通に育ちたかった。普通に生きたい。

子供にそんなちなけな夢を持たせて、世界を崩しているのは大人達じゃないか。

子供は黙ってろなんて。人権なんて糞食らえ状態。

だから僕達はそんな大人達の作り上げた世界に口出しはしないから、ただ夢だけは見せて欲しい。まだ甘えていたい。世間はまだまだ知りたくない。現実はまだ見たくない。動く絵のファンタジー世界に夢を持ちたい。吹き出しからしか言葉を出せないコマ切れされた絵に理想を抱きたい。自分の思うがままに動くコンピュータ・ゲームのプログラムに浸りたい。

少し背伸びして誰かに好意も抱きたい。それを批判なんてされたくない。

背伸びしても子供だから、人を傷つける。

人を傷つけたくないから、その背伸びで社会を見る。年がたつにつれ、僕達は無意識のままに大人に溶け込んで行く。誰も何も違和感なんて抱かない。だって周りの大人がそうだったんだから。

自分もコレで良いんだって。

「社会はそんなに甘くない」

「子供は世間知らず」

「立派な大人になれ」

まるで世間を全部知ったような口調で、子供達の目からは到底立派とは思えない大人になった僕達が、あの時の大人達と同じ事を口を揃えて言うんだ。

世界は日々変わっていくけれど、僕達はいつまで経っても変わらないまま。

だから子供は夢を見る。

アニメに、漫画に、ゲームに、恋愛に、その他いろいろ夢見る事はたくさんあって、自分達が同じ大人になるまで、夢を見る。

自分達が分かっていないだけ。

子供は大人よりもしってた。

社会はそんなに甘くないけれど、自分達を甘やかす、糖度高すぎな甘さだけはある。

子供は確かに世間知らずだけど、この先の自分達の現実だけは見据えてる事。

大人達の言う立派な大人ってのは、そもそも存在しない事。

「……僕はまだ、子供だから」

僕は僕の夢を見る。自分で決めた夢を見る。

僕より子供なシズカを助けて、矢西の傷ついた心を癒す糧^{かて}になつて。

そうして僕は、無意識に大人になる。

突然（前書き）

話しの流れがホントに突然

突然

どうして、……こんなことになってんだっけ。

「自分が何を思ってるか、……少しは分かった？」

あの日矢西の顔を見てから3日。謹慎日数は5日目に突入していた。

謹慎5日目。

今日は暑い日。そんな感じにしか思えないような1日が、絶対忘れられなさそうな1日になろうとしていた。

俺の謹慎中は矢西の部屋に移ると言っていた柴田が、何故かいきなり、俺の目の前に現れて、今ここにいる。ここは勿論矢西の部屋ではなく、俺の部屋。そして柴田の本当の寮部屋。カーテンに太陽光を閉ざし、電気もつけず、ただただ薄暗いだけの殺風景な部屋。

柴田は一言俺に向かってそう言い、それから自分の机の椅子に座り込んだ。少し遠くの俺の座っている机の方に椅子の方向をズラし、あの日の朝、矢西と俺をわざと顔合わせさせた時みたいに笑った。

「何でここにいんだよ、てめえ」

まるで敵でも見ているかのように柴田を睨みつける俺。

確か今は普通に学校で授業をしている時間。3時限目から4時限目の間。……早退してきたのか？ どちらにしろ……今寮に生徒は誰一人いない。

何で殴られた日と酷似しているこの時間帯をわざわざ選んだのか。

——俺には挑発としか思えない。

「僕の部屋でもあるし、ここ。いつ来ようが僕の勝手じゃん？」

「てめえ俺の謹慎中は矢西んとこに行くつつただろ」

「固い事言うなよ。僕、シズカと話しがたくて来たんだから」

やっぱり、自分をボコボコに殴った相手を目の前にしても全く動じない姿勢。俺が自分を殴らないと分かりきっているかのような挑発的な笑みに、額に青筋が立った。

「シズカと話したい質問内容は最初に言ったんだけど……自分の心、少しは理解出来た？」

「……」

突然そんな事を言われても、俺はただ黙るだけだった。頭には疑問符だけが浮かび上がる。

「シズカ、僕を殴ったあの日に、僕に聞いたよね？ 『俺は矢西をどう思ってたんだ』って。……僕はシズカを突き放して、……それで殴られたわけなんだけど」

嫌味な風に柴田。

「何か分かったことある？」

わかんねえよ。考えてもねえ……。

「俺に……わかる筈ねえだろ」

考えても考えても、ただイライラが積もるだけで。イライラと同じ数だけ、……今は何故か頭の痛さが増していく。

結局は何一つわかんねえんだから。考える意味なんてねえじゃねえかよ。

「……お前……」

さっきの挑発的な笑みが、急に無表情に冷えた。柴田のこんな表情は、本当、久しぶりに見た気がした。

「ホント……馬鹿だな」

冷めた目。

マジで馬鹿にしている目だった。

「てめえ、ふざけんなよっ……」

キレそうだ。

「ふざけてないよ。僕は本気でお前を馬鹿だと思ってる」
キレるな。

コイツは俺を煽るのが上手いだけだ。

「心底馬鹿だな」

乗せられるな、俺。

我慢しろ。

こんなもんガキの言葉じゃねえか。本氣にとんな。^{マジ}

「世界一馬鹿なんじゃないのか？」

クソ。

……我慢、…できねえっ！

「てめえはアホだろっ！　こんな誰もいねえ時間にこのこいきなり現れて！　俺に分かりもしねえ質問ふっかけて！　またぶち殺すぞ！」

「やれよ馬鹿！　今度こそ謹慎じゃすまねえぞ！　誰のおかげで謹慎逃れたと思ってるんだ！」

「やっぱテメエだったかよ！　上等だオラっ！　誰も退学にすんななんて頼んでねえっ！」

椅子をひっくり返すほど勢いよく立ち上がり、一気に柴田の制服の胸倉を掴み上げた。

顔面付近に柴田の顔。何も怖くないような感じで俺の目をジッと見つめ、そしてこう、冷静に、訴えるように呟いた。

「……誰のおかげで、矢西と離れなくてすんだと思ってんだ」

……。

………あ？

A

「っ誰のおかげで謹慎逃れたと思ってんだ！」

「やっぱテメエだったかよ！ 上等だオラっ！ 誰も退学にすんななんて頼んでねえっ！」

椅子をひっくり返すほど勢いよく立ち上がり、一気に柴田の制服の胸倉を掴み上げた。

顔面付近に柴田の顔。何も怖くないような感じで俺の目をジッと見つめ、そしてこう、冷静に、訴えるように呟いた。

「……誰のおかげで、矢西と離れなくてすんだと思ってんだ」

……。

……………あ？

「誰のおかげで、この先後悔しねえようなチャンスが出来たと思ってんだ？」

……なんでそこでアイツが出て来る？

後悔しねえようなチャンス？

「意味、わかんねえよ、…てめえ」

「シズカは……後悔してるんじゃないの？」

「は？ ……何を後悔してんだ？」

「矢西を、無理矢理抱いた挙句、セフレにして、自分の好き放題にフリ回した事」

知らねえよそんな事。俺そんな事思ってたのか？ 矢西に？ アイツなんか？ んな事ねえだろ。アホか。なんで、アイツなんか……。

「……違うの？」

今ちよつと、なにかが胸を突いた。

俺は矢西の事なんか、別になんとも思ってたねえ……とか考えてみたら、また、何かが胸を突いた気がした。

「もういい加減。……自分を甘やかすのはやめろよ……」

「……」

「『分からないから諦める』じゃないだろ。分からないからこそ粘って粘って、そして答えに辿りつくんだろ」

「それでも、俺は何もわかんねえんだよ」

俺は確かにお前より馬鹿だ。馬鹿だって分かってるからこそ他人に『馬鹿』って言われたらむかつく。馬鹿だからこそ、考える事が底辺過ぎてるのも分かってる。

だから俺は何もわかんねえ。

「馬鹿だって事は、分からないって理由にはならないだろ」
「……」

俺の思考に、きっぱりとした否定。

「馬鹿な人だって分かることは分かる。頑張ればもっと分かることがある。……シズカは、何も頑張ってないだろ？」

胸に、クリーンヒットした気がした。

初めて喧嘩した時の感覚。骨が軋んで、内臓が食い込んで、嘔吐に襲われるような感じがした。

「それで勝手に諦めて、何もしない。それが一番馬鹿だよ」
俺だ。

「全ての答えを他人に聞いて、お前の気持ち何もかもなんて、……俺が分かるわけないだろ？」

……マジ説教？
身に染みた。

「考えないで、全部殴ることで片付けたら、自分だけじゃなくて、相手も傷つける事になるんだぞ？ ……人の迷惑もいい加減考えろっ！」

……んだそれ。今更迷惑とか。……とつくの昔に諦めた話し蒸し返すなよ。

「迷惑とかよ。……俺はもともと、迷惑な存在だろーが」
「……え？」

俺の目に、ビククリしたような顔が映る。

なんだその顔、今更。お前だっと思ってることじゃねえのかよ……？

柴田のその目の見開いた顔が余りにも滑稽こっけいで、でも、こんな昔々に諦めた話しにまた胸が締め付けられる俺の方が滑稽で、苦笑を漏らした。

「皆俺を避けてるじゃねえか。性格も歪よこしまんでる、外見も人受けしねえ、口も悪い、社会常識もよくわからねえ。先公達もどうせ、俺を退学にしようとしたんだろ……？」

怒鳴る気力も失った。こんな事考えてる俺が、気持ち悪い。まるで昔のガキの俺だ。もう社会に受け入れなんて求めてねえのに。もう諦めた筈なのに……。

「……ほんつと、…アホだな」
「……っ！」

俺のシャツの胸倉を矢西に掴まれた。視界が歪んで、その目の焦点が柴田の目に合った時だった。何故か潤んだその柴田の目。

「お前には、俺がいるだろがっ！」
耳を疑った。

「俺はお前を避けてねえ！ 逃げてねえ！ ちゃんと向き合ってる！ お前もちゃんと向き合えよ！ 自分にも、俺にも！ 他人にも！ ……矢西にもっ！」

「しばっ……」

「逃げんなっ！」

「痛っ……！」

突然の頭痛の上からの痛み。

頭突きされたのが良くわかった。柴田からはコレがはじめての、……暴力。

「コレより痛い思いを矢西はしてんだ！ 分かってんのかっ?!」

……俺によって、矢西は心に傷を負った。

怖がりながらも俺に強がる。なんでもない風に装おう。誰にも助けも求めず、自分の友達を必死に守って。……俺が嫌なのに、逃げ

なかった。逃げようとしなかった。

アイツの方が、強えじゃねえかよ。

アイツの方が男らしいじゃねえかよ。

「もう一度聞く。矢西のことをどう思ってるか、分かったか？」

俺のモノ』なんて言ったら、今度こそ俺はお前を許さねえぞ！んな事言ったら絶対、矢西に俺を好きにさせてみせる！」

矢西を……柴田を好きにさせる……？

「……っざけんな」

「？」

嫌に決まってんだろ。フザケンナ。

誰も好きになんかさねえ。誰にも触れさせるか。アイツを抱くのは俺で充分なんだ。矢西と正面から向き合ってやる。矢西の傷を癒してやる。

誰にも渡さねえ。

「お前には、矢西は渡さねえよ……。お前だけじゃねえ。誰にも、誰一人。アイツは……。矢西は……」

今更どうにもならねえかもしれねえ。

こんな独占欲、無駄かもしれねえ。

それでもいい。

俺の身から出た錆だ。ダメならダメでいい。きっぱり諦めてやる。

……それでも、まだ俺にもチャンスがあるんなら、俺は諦めねえ。諦めたくねえ。

土下座までは出来ねえかもしれねえけど、いくらでも謝ってやる。いくらでも優しく抱きしめてやる。

俺の罪を認める。

「俺の矢西だ……！」

「……」

「なんか文句あつかよ……っ！」

「……シズカ、それ。……言い方変えただけで、……俺のモノって言うてるもんじゃないの？」

え？

「は？ あ、いや。だから。そういう意味じゃなくて、……えーつと…今の俺は、アイツの物扱いしてねえから！」

「ホント？」

「ホントだ！」

「マジで？」

「マジだっつってんだろ！」

「泣かさない？」

「泣かさねえ！ ……かわ、…分かんねえ」

俺の自信の無い返答に、柴田の顔が少し歪んで、それでも俺の言いたい事も気持ちも伝わったのか、少しため息を吐いて、俺の胸倉を離した。

それと同時に、俺も柴田の胸倉から手を離す。

「ていうかシズカ……僕、とんでもない事しちゃった」

「あんだよ……？」

肩を落としながら、自分の椅子に座り込み、顔をしかめながら俺の顔を見上げた。

「答えは自分で考えろとか言って置いて……ちやっかり結構なヒントだしちゃってたよ…」

僕やっぱりシズカには甘いなあ……なんて、意味の分からない事を呟いてる柴田に、俺は抑える事なく、笑みを漏らした。

扉の先

今日もこの5日間いつもと変わらない、元の黒澤と一切会うことのない校内生活が終わった。学食で会うこともなく、廊下ですれ違ふこともなく、昔の普通だった生活を……喜んでいた。

そう、喜んでいる。

喜んでいる筈なのに、何か物足りない。楽しくない。普通以上のつまらなさ、やる気の出なさ。……こんな事を考えている俺は、一体なんなんだろうか？ 俺は黒澤が嫌いの筈なのに、イヤな筈なのに、それなのにこんな事を考えている。

ここ最近黒澤よりも俺自信が嫌いになって来た。優しくされた時みたいな罪悪感が、俺の心を打つ。

『謝らなきゃいけない』と何でかそう思った事もあったけど、悪いことされているのは俺の方だから、謝る必要なんて全然無い。

それでも、……何か気分が晴れないというか。

「なんで俺がこんなに気分悪くならなきゃいけないんだよ……」

全く意味が分からない。全部、全部、黒澤のせい。

俺の生活が一変したのもアイツのせい。俺が今こんな感じなのもアイツのせい。

……責任とれ。

「……」

なんて思っても、黒澤は謹慎中だから俺の前には現れないし。もし目の前に黒澤が現れたとして、どうすればいいか分かんないし。どうリアクションすればいいかも分かんないし。

「逆に困る」

学校の校舎から少し外の道を歩いて、数百メートル先にある寮へついた。

今日渡された来週提出と言う期限付きの宿題をする事も、近々ある小テストの範囲の予習をするという事も考えず、ただただ自分の

寮部屋へと向っていた。

「そういや、柴田先輩、体は大丈夫だろうか？ 特に異常なところはないし、本人も体育とかの過度な運動は控えるって言ってたからそんな一大事なんて事は起こらないと思うけど、一応傷は傷だし。」

「そう思いながら、俺は自分の部屋の前に立ち、何の迷いもなく部屋のドアを開いた。」

俺の部屋は比較的他の部屋より日当たりの良い部屋なので、部屋に入った瞬間の日の辺りが眩しい。少し入るのをためらってしまいたいくらいに眩しくて、目が痛い。

でも少し抑え気味にドアを開いたそこは、目が痛いくらいに眩しいと言うか……そのカケラも見えないほどに今の俺の目には優しすぎる暗度と化していた。

柴田先輩が閉めたのだろうか、カーテンが日の光を遮る。

「しばたセンパっ……」

少し笑顔でその名を呼ぼうと口を開いたその先に、完全にその名では無い人物が、俺の目に黒く映った。

その人物は足を組みながら頬に手を付き、俺の顔をジッと見つめたまま動こうともしない。

「……」

驚いて、呆然として、アホみたいな顔をしながら、俺はその一回開けたドアを、もう一度ゆっくりと閉めた。

「……あれ？」

閉めた瞬間に溢れ出す動揺。

「いや、ここ、俺の部屋だよな？ 部屋番号もあってるし……場所も間違える筈ないし。……見間違え？ ……いや、柴田先輩があんな悪い面している筈ないじゃん。それとも何……ご本人登場？ いやいやいや……モノマネ合戦番組じゃないんだし……。」

「……っ」

ドアを見つめた。

真実を確かめるため、俺はもう一度汗ばんだ手を拭き、ドアノブ

を掴んでギュッと握った。ゆっくりと捻り、再度、今度はゆっくりとそのドアを開けていく。

ゆっくりとゆっくりと現れるその人影。

変わらない人物。

「なんで、居んの……？」

震える声。

さっき俺の言った、『責任』でも取りに来た？

「……逃げんなよ、頼むから」

——黒澤。

君という 1

「なんで……いるの…?」

「逃げんなよ、…頼むから」

「し、質問に答えろ!」

「……話すから…とりあえずドア閉めろ、うるせえ」

「っ……」

見たところ、柴田先輩の姿はない。黒澤一人でこの部屋で俺が帰ってくるのを待っていた?

「柴田先輩は……?」

ドアを閉めずに、それだけ聞いた。とりあえず、柴田先輩の安否だけ確認しておきたい。まだ帰ってきていないのならそれでいいし、……黒澤に殴られた事もあるし。ただそれだけ気になった。

間を置いてから、少し抑え気味に黒澤が口を開いた。

「元いた部屋にいる。昼に柴田と話して、柴田との事は片付いた。

……次はお前だろ」

柴田先輩との事は片付いたって……殴ったことか?

悪そうな顔はいつも通りなのに、何故か今はそんなに怖いとは思わなかった。なんだか少しだけ口調も穏やかになった感じがして。

……何だか気持ち悪い。

まだこの扉を閉めて俺と黒澤の二人だけになるのも嫌だ。……けれど、柴田先輩も元の部屋に居るんだろうし、安否の確認が出来ただけでも良かった。

抱かれるなら抱かれるでいいさ。いつも通りの事。慣れているし、こっちには作戦だってある。柴田先輩見たいにじゃなきゃ、別に殴られてもいい。下手な優しさより断然マシ。

次は俺……なんて、どうせ今までの欲求不満とストレスを解消しに俺を抱きに來ただけだろうし。

そう考え、抵抗もせず。部屋のドアが、俺の手によってゆっくり

閉まっていった。部屋には俺と黒澤の二人だけだ。パタンと小さく音を立て、ドアが完全に閉まる。

「……」

俺は無言のまま、息を呑み、そのまま黒澤から少し離れた場所にカバンを置き、その場に黒澤に向き合う感じで体育座りをした。

お互い黙ったままで、互いを見ている。

気まずい空気。どっちかが何かを喋らないとずっとこのままな気がして、俺は小さく声を振り絞りながら出した。

「なんで居るの？ ……謹慎は？」

確か人の部屋に入っちゃダメな筈。またまた校則違反。

「柴田が言ったんだよ。…話すならお前の部屋行けって」

「……」

話す……って。

「柴田先輩……？ ……って、何を話すの？」

だって、やりに来たんだろお前は。

「は？ 何言ってるんだお前。あるだろ」

「黒澤……先輩が、俺を抱いてる事？」

「そりゃそうだろ、他に何あんだよ」

そのことについて話すとか。

いやいやいや、今更かよ。遅くないですか。……初めてやった時から1年も経ってんだよ？

「俺はもう、…お前は抱かねえ」

突然の言葉。いや、心の中で少しはこの言葉に気付いていたかもしれない。

でも、だから遅いつて。

しかも、……黒澤に抱かれなくなるように俺が考えて考えた作戦が実行できないじゃん。……いや何もしないまま抱かれなくなるのは嬉しいけど。

「もう殴らねえ」

優しくするなって言ってんじゃん。

「それは……俺とはもう顔合わさないって事？」

「あ？」

「だって、…俺、前にも言ったじゃん。先輩の事は嫌いで顔も見たくないって。もうやらないで、殴りもしない。……俺と居る意味一切ないじゃん」

今思えば、会っては性行為、会っては殴られ、1回だけ2人で外に出た事もあったけれど、それも最後には性行為に繋がっている。俺と黒澤はこの1年間、健全な『遊び』と言う事を1回もしていない。そんな俺達から性行為と暴力を取り上げたら、後には何も残らない。

カラオケに行く？ 一緒に登校？ 一緒に飯食べて、雑談とか？

……今の状況で、俺が普通にそんな事を出来るワケがないじゃんか。自分にレイプみたいな事をしてきた奴目の前に、どう笑顔を見せろって言うんだよ。

「それとも、セックスしなくなっても殴らなくなっても、まだ俺に拒否権はないの？」

「そう言うわけじゃ」

「セフレの次はパシリか？ そんなの別に俺じゃなくても良いだろ。俺より確実にパシリに効率の良い奴も居るだろうしさ」

「だから……」

「それともいじめ？ 俺がお前に逆らえないの見て笑いたいの？」

お前そういうの好きだもんな。結局お前はお前、俺は俺、立ち位置も思考も変わらないし、……俺が普通に生活してるのが気に食わないってヤツ？ だから脅して、俺の生活めちゃくちゃにしたいん……」

「俺の話し聞けって言ってるんだろ！」

俺が諦め気味に黒澤にぶつけている言葉を、黒澤の大きな声が覆った。静かな場所に大きな音。俺の耳はキーンと鳴り響き、ビツクリして喋りを止めた。

「勝手に話し進めんじゃねえ。そりやお前の思ってることだろ」

「今までのことがあれば、こういう想像しかつかないだろ！」

逆に怒鳴られる方がおかしいだろ……。

「俺が喋る。今からはお前が黙ってる！」

「……」

偉そうな口調もいままで通り。

それでも黒澤が喋るって言ってんだから、……黙っといった。

「俺はお前の前からは消えねえし、素通りするような他人に戻る事もしねえ」

「……」

俺の呆れた思考と、沈黙。

「……俺は、お前の笑った顔が見てえ」

「っ……！」

俺の驚いた思考と。沈黙。

「俺に笑うお前の顔が見てえ、俺に楽しそうに話すお前の顔が見てえ」

「ちょ、待って。……それってどういう意味……」

話しがよく、見えなかった。

「俺とどうなりたいの？」

君という 2 (前書き)

なげえ・・・

どこがショートストーリーなんですかね・・・なんかまとめ能力なくてすんません・・・

次話でSS1本やって、その次話で夏休みの旅館（本編見てくれば分かるかも）…のくだり8〜10話くらいで出来たらな・・・みたいな

すげえ長くてすんませんエ・・・

亀更新になると思いますが、希望であれば壺のアメリカ行き（これも本編見ればわかると思います）のくだり、矢西視点もやりますんで、言ってくれたら嬉しいです。

君という 2

「俺に笑うお前の顔が見てえ、俺に楽しそうに話すお前の顔が見てえ」

「ちょ、待って。……それってどういう意味……」
「話しがよく見えなかった。」

「俺と、どうなりたいの？」

「……どうなりたいって……それは……わかんねえ」

柴田にも聞かれてねえ……と黒澤。分からないってなんだよ、自分の事だろうが。今一番肝心なところ分からなくちゃ、どうしようもない。

「……俺は、お前に会ってから、……正直嬉しかったのかもしれない」

嬉しかった？

「嬉しかったって……セフレ？」

「違えよバカ」

バカにバカって言われたくねえよ……いや、バカだけど。

「お前、俺から逃げなかったし」

「……？」

「俺の回りに居る奴は、俺みたいにどうしようもねえ奴ばっかで、そいつら以外は皆、クラスメイトも親も先公も、俺を避けてた」

そりゃ、まあ外見からして不良だから、周囲の反応はよく分かる。

「俺は正直、お前もそいつらと同じだと思ってた。俺の中学時代のセフレだった先輩みたいに、セックスにはまって、最終的に捨てられるか。もしくは1週間も経たないうちに寮に立て籠もって、学校を退学するか」

中学時代にもうセフレ居たのかよ……どんだけだよ。遊びすぎだろ。……プレイボーイ？ ていうか、なんで俺が黒澤とのセックスにはまったり、学校辞めなきゃいけないんだよ。

「でもお前は避けもしないし、逃げもしなかった。あぐくに『友達守る』とか言ってるし、……セックスにもはまんねえで、俺に嫌悪を抱くだけ。周りの奴等とは明らかに違うお前を、だんだんイラつくようになった」

『嬉しい』のに？

「お前みたいな奴にどう接すればいいのか分からなくなってった。セックスにはまるようにセックスして、俺を避けるように殴ったりもしたけど、……それでもお前は逃げなかった」

今まで俺を苦しめてたのって……それだけの理由？

「だんだん俺はお前がどうすれば折れるかだけを考えて、有沢の事なんてどうでも良くなってた。それを言ったら一瞬にして俺を避けてきて、……本当に俺のこと大嫌いなんだと思って、ムカついて、キレた」

「……なんでムカついたの？ 嫌いなのは、他と同じだろ？」

「嫌いなのは同じだけど、態度が違っただろ。……それで、抱かれる理由なくなったら、即他と同じ態度……っつか、俺を完全に拒否しただろ。あれがムカついた。そんなに嫌いなら、何で逃げねえんだって思った」

「……」

「俺は……昔からこんなんで、ちゃんとした『友達』なんてもんがないくて、……人とどう接していいか分かんねえ。だから、お前はもつと分かねえ。けど……こんな風になったのは全部俺のせいなのはわかってるけど、俺は、まだお前と一緒にいたい。お前と話したい。お前を分かりたい」

なんだこれ。……目の前にいるのは、誰？ 黒澤なのに、黒澤じゃないみたいな。勇気のない顔で、全然俺様な性格じゃなくて、……今なら、俺の方が上に居るみたいで。

突然の、いままで考えていた事の告白。命令じゃない、願望。これは、聞いているのか？ 俺に選択権なんて。

お前らしくないじゃん、黒澤。

「そんな事言っただけで……俺のこと殴れば？」

気付けば、こっちから黒澤に掴みかかっていた。らしくない黒澤に、こっちの方がイラつく。いきなり俺の部屋の中に現れたと思えばらしくない暴露バンバンしまくって、挙句に俺に『選択』なんてさせようとして。

「俺のこと殴れよいつもみたいにさ！ 俺に拒否権も何もないんだろ？！ 抱けよ！ ここにお前がいつも抱いてる人間が居るんだぞ！」

「抱かねえよ」

「っ……！」

「殴らねえ」

断固とした拒否、否定。

「もうお前を泣かさないと、柴田とも約束したんだ。それに、俺は暴力で全部に逃げてた。もう逃げねえ、お前とも、全部と向き合う」

「信じられるかよ……」

——お前の言う事なんか。俺がどんな思いでお前に抱かれてたと思っただ。

「俺には、お前が必要だ」
ずるい。

「それでもお前がいやなら、俺はもうお前には話しかけないし、触りもしない」

ふざけんな。……俺がここ数日、どんな思いでいたと思っただ。黒澤の胸倉を掴んでいる俺の手が緩まった。力なくそのまま黒澤を押してみても、黒澤はビクともしない。

俺よりも全然強くて、男らしくて。

「ズルいよ、黒澤……」

黒澤が、……ずっと頭から離れなかったんだ。嫌いなのに、頭から離れない。嫌いだから頭から離れないんだと思いいくんでも、嫌悪感のない思想。

嫌いな筈のその冷たい手に触れたいと思ったりとか。

お前は今俺の事考えているんだろうかとか思ったり。

思ってる事が多々あって、それぞれが違う考え方で、頭がこんがらがってどうすればいいのか分からなくなってる……。俺が聞きたかったのは、この言葉？ 求めていたのは、こんな感じ？ 選択権を得て、拒否権を与えられて、初めてヒト扱いされた気がした。

ここで俺が今黒澤を『拒否』すれば、全てが終わる。もう抱かれる事もなくて、喋る事もなくて、黒澤を恐れて友達を作らないようにする必要も無いし、壺も安全になる。

ここで全部終わりにすれば……。

「……い」

「……？ 矢西？」

出来ないよ――。

「おい、てめえ。っ何泣いてんだ」

「な……いてないっ……っ」

目から溢れ出す水滴は紛れもなく涙で、止めようとしてももう止められない。

「お、俺は、…黒澤が嫌いで、どうしようもない位大嫌いで、……俺の敵だとか思ってる…でも怖くて、ずっとずっとセックスされてて……お前にキレたりもしたけどやっぱり怖くて…、でも……黒澤の手が優しくて…」

「……」

どうしようもない位気持ち良くて、安心できて。

「でも、抱かれるのは嫌いで……俺は……俺は」

何もかも曖昧。

思考がぐちゃぐちゃ。目の前も霞む。力も無い。バカでアホで。

「……っゴメンナサイ……」

「やにし……」

でも、バカでアホなのは、お互い様なんだろう。

「黒澤の事、何も分かってあげられなくて……ごめんなさい……」

黒澤が暴力をふるうのも、セックスで体を繋ぐのも、全部、黒澤のSOSなんだ。

昔から黒澤は世間から邪険に見られていて、誰も黒澤を見てくれないで、寄ってきてもくれなくて、……誰かに気付いて欲しかったんだ。

自分の存在。自分がそこに居るって言う証明をして欲しかった。でもどうやったら分かってもらえるか分からなくて、……暴力や性行為しか分かってもらえるような術を知らないで。

「セックスは嫌だし、殴られるのも嫌だけど……俺は、お前とは離れたくない……っ」

「……っ」

「黒澤には、おれがいる……それで、柴田先輩がいる……」

「セックスも殴りもしねえ……なんて言っただけど、俺はまた、お前を傷つけるかもしれない。……もう長い間自分の気持ちを言葉にしなかったから、……それを文にするなんて事も俺には難しい……」

「……ばっかだなあ……」

アホだ。文にしなくても、伝わる事くらいあるんだよ。言葉にしなくても、暴力以外で、伝える術だってある。

「……矢西っ」

黒澤の胸倉を掴んでいた手を離し、俺はそのまま、その腕を黒澤の首へと回した。

抱きしめた感覚。

「……友達に、なってください……」

セフレみたいな関係じゃなく。一緒に笑えて、遊べて、喋れて。

……そんな関係。

「俺で……いいのか……?」

「……今ここで黒澤に友達になってって言うてるのに、お前じゃなきゃ、……意味ないじゃん。——俺、黒澤のこと分かるように努力するから、黒澤も、俺の事分かるように努力して……?」

それが友達って言う奴だろ。

「……」

ゆっくりゆっくりと、黒澤の冷たいその手が、俺の背中へ回された。

「……ごめん」

初めて黒澤の嬉しそうな笑顔を見た瞬間。

初めて黒澤の涙を感じた瞬間だった。

プロローグ（前書き）

テーマ、友達…？

とりあえずなげえっす…

見なくても話しに支障はありません

柴田と黒澤の話し。矢西は出ません。

ちゃんと読み返してないんで、誤字あったら報告よろしくです。

できれば活動報告の『誤字、脱字、間違いの指摘よろしく』・・・
ってここに

てか、遅くなってすみませんでしたマジで。

プロローグ

「黒澤、進路プリント。早く提出してくれないと困るよ」
中学3年。7月××日。晴れ。

「……」

今日の日直、柴田 奈緒。

「何？ 言いたい事があるならはっきり言わないと伝わらないよ」
周りは俺の事が嫌いだった。だから俺も俺の周りにいる人間を嫌
いになり始めていた。小学生の頃、周囲に溶け込まない俺を見かね
て、ちよくちよく話しかけてくるヤツが居た。

誰ともまともに喋らない俺を、自分は手懐けれるみたいな、自分
なら出来る、みたいな風に思ったヤツが、俺に沸いてきていた。

俺はそういう人間が一番嫌いだった。何の同情なのか。何の力試
しなのか。

どうでもいいが、俺に近づくな。

そう言うのと、そいつは親に言いつけ、そいつの親が学校に抗議を
し、俺の親に伝わって、どうしてそう捻くれているのかと、そう親
が泣いて、俺を避けた。だからそういうヤツが来たら、俺はとりあ
えず無視するようになった。そうじゃないヤツがいるんだらうとも
思うけれど、皆、全員、同種にしか思えない。

「んー、…忘れたの？ しょうがないなあ、じゃあ、はい。コレあ
げるから、今書いて」

コイツも、きつと同じ。

差し出されたそのプリントには、俺が今日家に忘れてきたプリン
トと同じ字が印刷されたプリントがある。俺はそれを乱暴に受け取
り、そのままプリントをカラの机の中に入れて、机の上に頬杖を付
いた。

「……」

「……」

「……？」

用が済んだのにいまだ俺の目の前から居なくならないそいつに不審を抱き、俺は顔を見上げた。

「い・ま、書いてね」

今と言う単語を強調させ、俺に笑いかけるソイツの顔が、凄く苛付く。

「忘れた」

「え……志望？ 自分の事なの？」

「高校の事なんて何も分かんねえんだよ。受験してもどうせ落ちるのは目に見えてる。つかお前に関係ないだろ」

「ふん……じゃ、一緒に決めてあげよう！」

……。は？

俺の言葉を一切聞かない言葉返し。ドン引きする俺の目の前で、前の席の椅子をこちらに向け、どっかつとそこに座り込んで、俺のいる机に手を組んだ。

「僕ね、シバタって名前、よろしくね」

「……」

握手はないものの、そう俺に笑顔を向けた。

「んで、黒澤は、高校どういうトコに行きたいの？」

おいおい、何勝手に話し進めてんだよ、ふざけんなっ！

「だから……てめえに関係ねえって——」

「大有りだよ」

「あ？」

「今日日直なの。んで、今日の日直は皆の進路プリント集めなきゃいけないの。わかる？ しかも僕は優等生。……教師裏切れないじゃん？」

何言っただコイツ。

——裏切るも何も、そりゃ勝手に押し付けられた『クラスのルール』だろうが。別に相手が提出しなかったで全て解決するんじゃないか。

「あー：そりゃそうだ」

その言葉に、きょんとした顔でそう柴田が呟いた。あっさりとしたオーバーなりアクション。：きつとこいつはそんな事分かりきっていた。

何故かそう、分かった気がした。

「でも、僕は優等生だからね。黒澤と違って」
妙にトゲのある言い方。

「それで、……なんか高校について希望ある？　てか高校行きたい？」

「無え。行きたくない」

「うーん、じゃ就職か専門校だね。親とか先生は絶対『高校行け』
って言うんだろうけど」

「……は？　なんで先公までんな事言われなきゃいけないんだよ」

「だって、教師ってのは、めんどくさいのが嫌いでしょ？　就職は
高校受験より遥かに複雑でめんどくさいよ。出来れば穏便に済ませ
たいんデシヨ」

そういうもんか……。

「そういうもんだよ」

柴田は優等生で教師を裏切らないわりには、教師の事をあんまり
良い風に思っていない物言いをしている奴だった。

「まあ、いいや。こういう職業に付きたいの？　あ、ヤクザとかは
駄目だよ？」

分かってるよ。

「大工とか、トビ職とか……」

「力系か。まあいいんじゃないかなー。黒澤力強そうだしっ。じゃ
あ、はい。プリント出して」

そう言われ、俺はゆらゆら机の中からプリントを取り出した。

柴田は柴田で俺の筆箱から勝手にシャープペンシルを取り出し、
勝手に俺の名前を書き出す。

「下の名前、……なんだっけ？」

「……」

「下のなーまーえ」

「シズカだよ。冷静の静」

ふーん、ドラえもん思い出した。随分性格に似合わない名前だね。……なんて呟く柴田に、俺はどうとうキレた。

「てめえ、うっせえんだよ！ どっかいけ！ 構うな！ 殴るぞ！」

その場がたんと立ち上がる。教室は先ほどまでクラスの連中がぎゃーぎゃーと騒いでいたが、その一言でシーンと静まり返った。

俺を見る目線がチラチラと気配をつける。肝心の柴田は、……そんなのお構い無しに志望の欄の職業に丸をつけ、第一志望を書く欄に『大工系』と記入していた。

「おし、ありがとね黒澤。多分再提出食らうと思うけど、まあ頑張るって」

そうしてサラッと俺の前から消えて行った。

……なんなんだ。

＊

その日の帰り。俺のスクールバッグの中には、再提出と書かれた進路プリントが入っていた。

まあいい。帰れば適当に底辺高校の名前を書いた進路プリントがある。もともとはそっちを出すつもりだったんだし。

「……」

周りは勝手だと思う。俺を散々避けておいて、『進学しろ』だなんて。さっき柴田あいつの言った通り、教師は『俺』と言うめんどくさい存在を『進学』させてさようならで済む話し。じゃあ親はどうなんだろか。

毎回毎回学校に呼ばれて、恥書いて。それでもまだ『進学しろ』？ ……そんなの絶対におかしい。

「じじい」

学校の帰り道。その時日課だったのは、買い食い。冬には肉まん、夏はアイス。その他菓子や飲み物やらが揃って置いてある店。その

店によるのが日課。

……今はもう連絡すらも取っていない、元セックスフレンド、先輩に教えてもらった店だった。気に入ってもう随分通っている。店主のじじいも気の毒だと、俺が来るようになってから周囲が口を揃えてそう言った。

「おい、じじい、いねえのかっ……」

店の中を覗いて見ても、店主、じじいの姿はどこにもなかった。代わりにある、先ほど見た面影。

「お、黒澤じゃん」

柴田 奈緒。

「……なんでてめえがここに居るんだよ」

「店番。黒澤の言う『じじい』は、俺のじいちゃんの友達で、俺も昔から仲良かったのさ」

「……」

柴田のじいちゃんの友達のじじい。意味分からん。

「それで、僕は今この店員さん」

「……」

「て言っても、いつもここで店番してて。黒澤の姿も何回も見てるんだけどね」

気付かなかった。だから理由つけて話しかけてきたのか？

「んで…なんの用かな？」

「あー、……アイス。『超モナカ王伝説』……クレ」

そのアイスは所謂、料理店とかに存在する『裏メニュー』的な感じのモノで、この地域では販売していないアイスらしい。じじいがどこから手に入れてるか知らないが、普通に冷凍ボックスに入れて店に出して置きたくないくらいに希少なアイスらしい。

その通り、美味しい。

先輩に教えてもらったアイスだった。

「はいはい、ちょっとまってね」

柴田が読んでた雑誌を置き、椅子から立ち上がり奥へと姿を消し

ていった。中の部屋の冷蔵庫が開く音がかすかに聞こえ、かすかに閉じた音が聞こえる。

「125円になります」

アイスを持ってきた柴田は、俺にそれだけ言った。

「……」

無言で金を置いた。他の奴等とは関わりたくはない。5円のお釣りを渡され、さっさと店を出ようとアイスの入った小さな袋を手に取りろうとした瞬間に、柴田が袋を手前に引いた。

「ねえ、ちよつとさ。話ししようよ」

「嫌だ。さっさとそれ渡せ」

「おじさーん！ 僕ちよつと店出たいんだけどー！」

「おい聞けよ！」

奥にじじいが居たらしい。大きな声で柴田がそう言うのと、小さくOKの合図が聞こえて来た。それを聞いた柴田はレジ前から出て、冷凍ボックスから安いアイスを取り出し、店の扉をガラガラと開けた。

「話しててなんだ？ ここで言え」

「ここじゃ無理。おじさんいるじゃん。近くの公園でも行こう」

「何の話しだ」

「……『先輩』からの伝言」

先輩の文字。俺の脳はその瞬間に拒否反応を示したが、少しの好奇心が拒否反応を押しつぶした。コイツは俺を何回も見た事があると言った。……きつと、先輩と俺のツーショットも見ているはず。

店を出て、歩いて2分も無い小さな公園につく。遊具が使用禁止にされた砂場とブランコ、後は小さなすべり台しかなく、子供は誰一人いない。俺達はちよこんと立っているベンチに座り込んだ。

「先輩だけでここについてくるから、……どの先輩かは分かっているだよね？」

柴田がアイスの包み袋をペリペリと破きながら横目で俺に言う。
俺はただ黙ってるだけだった。

「黒澤と先輩の話は全部聞いたよ。先輩が卒業してからもう連絡とってないんだってね。携帯番号も全部変えて」

「てめえに関係ないだろ」

「僕に泣きついてきてさ、少し同情しちゃった」

「……」

「『こうなるって事は分かった。黒澤君は僕をセフレとしか思っ
てなかったし、もしかしたらセフレ以下だったかもしれない。だから、もう連絡はしないよ』って、先輩僕に言ったんだ」

所為、いきなり俺から連絡を途絶えさせて、それから一回も先輩の顔は見えていない。それこそ先輩は物分かりの良い奴だと思った。俺は先輩をセフレ以上には思った事は無いけれど、セフレ以下とも思った事はない。

「『だけど、黒澤君はもう少し自分に正直になって、他の人をもう少し許してあげても良いと思う』」

「……」

自分に正直になって、他人を許す？

「分かりきった風な言い方だな」

てめえに分かってたまるかよ。たかがセフレの癖に。

「分かっているから言ってんじゃないのかな。先輩は1年くらい、僕達よりこの世界生きてるし」

「1年だけで俺達とそんな変わらねえだろ」

「でも僕等より分かっている」

「根拠は無え。こっちは迷惑だ」

俺の頑なな言葉に、柴田は呆れたように前を見据えた。それから数分間、アイスをかじる音だけが聞こえた。夕方を教えるかのようにかラスが鳴くと、それと同時に俺も口を開いた。

「お前は、俺を避けねえのか」

その言葉に驚いたように、柴田が俺をみる。

「僕は黒澤なんか怖くないし、皆どうして黒澤を避けるのか分からない」

黒澤……なんか？

「でも今日で分かった。皆が黒澤を避けるのは、黒澤が皆を避けるからだろ。もう癖になっちゃってるし、治すのは時間がかかるだろうね」

「俺は、…他人は信じられねえ。今、つるんでる奴等も、他とそう変わんねえし。だからもう、一生このままでも良いとも思い始める。……お前はどうかんだ」

「……何が？」

その気持ち悪いくらいに作りあげられた笑い顔。

「お前は どうしてそんなに自分を隠すんだ」

「……」

他の連中は、この作り笑顔に寄っている。何故だか分からない。何で全然気付かないのかも分からない。こんなつまらなさそうな笑顔。

自分を隠さない俺とは、正反対。

「社会は良い顔をして、そこそこ勉強出来ればあまり苦にはならないし。周りの大人は皆そうだろう？」

「……」

大人のモノマネだよ……柴田は静かにそう呟いた。

「ねえ、他の人は許せなくてもさ。僕の事は許してよ」

許せなんて……お前は元から俺に何もしてねえだろ。存在は知っていた。ただ話すのは初めて、横に並ぶの初めてで。何を許せって言うんだ。

「僕達は似てるね」

「……似てねえよ」

「似てるよ。正反対だけど、凄く、似てるんだ」

柴田は他と何か違う雰囲気を持っていた。大人を信用していない、周囲に妙に警戒心を抱いているような、そんな雰囲気。

マニュアル通りに構成されたようなそいつの会話や行動。他は気付いていないけれど、コイツはいつも『正しい行動』かしなかった

た。

俺とは全く違う存在。

「お前……なんで先公とクラスに人気あんのに生徒会にも委員会にも入んねえんだ？ 優等生なんだろう？」

「僕は、そこまで学校に『優等生』を貢献したいとは思わないよ。目立つのは嫌いだし。さっきも、……進路の事で先生に呼び出し食らったし」

「何でだよ。進学校の説明会とかの日付か？」

「まさか。僕、進学校には行かないよ。基準Eランクの高校に行くし。その事で呼ばれた。んで、進路調査表も親と一緒に考えろって、……再提出」

「は？ お前今の学力ランク何だよ？」

「ん？ 最近Bに落ちたな、そういえば」

そう笑って言いわけするその言葉で、俺自身の学力の悪さが身に突き刺さった。

「誰も志望してない結構遠い高校選んだんだ。しかも全寮制」

「……」

「呼ばれるのは当たり前かもしれないね。でも、あんまりランク高いところに行って優等生薄まっても嫌だし。今まで通り、ズバ抜けてない普通の優等生のままで……」

「ムカツクな」

「は？」

「なんでそこまでして自分を隠す？ 俺より沢山のモノも知識もあるだろお前には。何でそこで終わらせようとすんだよ」

ようするに。嫉妬、……だったと思う。俺よりも良い環境にいる奴が、わざわざそれより先に行きたがらない。正直ウザすぎて、吐き気がした。

羨ましい。俺とは真逆なのに。

「僕は、黒澤の方が羨ましいよ」

真逆なのに、感じ方は、似ていた。

「避けられても素で接しているんだ。僕にはそんな勇氣はないし、多分今後もしんな事は出来ない。……黒澤は凄くと思うよ。――ずっと思ってた」

「……」

似ていないけど、大きく似ている。

俺と柴田の目から映るこの社会も、大人も、周りのモノ全部、……感じ方は案外同じだったのかもしれない。

柴田は他とは違っている。

俺とも大きく違っていているけど、俺とはかなり近い人間。

「僕のこと、……許してくれる？」

「……最初から……許すも何もねえよ。……お前は。俺の事、どうとも思ってたねえんだろ？」

「うん」

頷いたその時の笑顔は、多分、柴田の本心からでた笑顔。それは生きてきて久しぶりに見た、俺を受け入れてくれる、光だった。

「お前、高校どこ行くんだ？」

結構溶けているであろうモナカを取り出しながら、柴田に問う。

「雛ヶ丘第一、……一緒に来る？ 知ってる人が一人もいなかったら、僕も少しは寂しいよ」

「ああ……行こうかな」

中学3年。7月××日。晴れのち曇り。

今日の日直。柴田 奈緒。

「なんでお前今日も日直なんだ？」

「今日日直の人が休みだったから。僕は優等生だからね」

職員室の前。俺と柴田は横に並びながらそう言っていた。それぞれ手に持っているのは紛れもない再提出をくらった進路調査表。

第一志望には、同じ学校名が記載されていた。

バイト

夏休み。の、少し前の事だった。期末テストが終わり、後は最近配られ始めた夏休みの宿題が最終的にはどれ程の量になるのかと恐怖を感じつつある頃。

期末の結果は中の下から中くらいで、頭が悪い……と言う肩書きがあるわりには普通の点数を取れた。学年のテスト結果の順位も大幅に上がったし。……多分、柴田先輩に教えてもらったからだと思う。

期末テストの前の日まで、黒澤と柴田先輩と俺の3人でテスト勉強をしていた。黒澤は今までの赤点地獄から離脱しようと必死だった。……何せ周囲に認めてもらうためらしい。来年には黒髪にするとかなんとか言っていたりしたけれど、来年までまだまだある。黒髪の黒澤を想像したら、凄く笑えた。

去年からいろいろあった黒澤と俺だけど、今は本当にごく普通の『友達』な関係になっている。

体の関係もなく、殴られもしないし、本当に本当に、『友達』。良かったと思う反面、少しガツカリしたような感情に近い気分になるのは、どうしてなのだろうか。

ガツカリに似た気分なんて……。

今までの関係、今までされた事。それを考えれば、どう考えても今の状況が良いに決まっている。そう言い聞かせて、いつも気分を紛らわした。

そして、夏。

夏休み。俺は今年もある事を思い出す。

「……バイト」

旅館のバイト。毎年夏休みの最後辺りに泊まりがけでバイトをしていた。

去年は行かなかった。否、行けなかった。俺のいない間に欲求不

満で壺に手を出されては困るし、第一、あの時の黒澤が許す訳ない
と思った。

だが今年。今の状況なら行けるだろう。だって友達。許す許さない
の問題以前に、関係ない。

「あ……バイト？」

「そう、毎年行ってるの。だから俺、夏休みの最後らへんはない
よ」

「矢西バイトなんかしてたんだ、偉いね」

黒澤と柴田先輩の部屋。行くのはいつも俺。
窓を全開にあげ、カーテンが纏められてない状態でフワフワと浮
いていた。少し寒いくらいの部屋で、強い風が吹き抜ける。

「去年なんもん行ってなかったじゃねえか」

「去年はどうしても行けなかったんだ」

今の空気を壊さないように、軽くそう言った。今の状況に、過去
は関係無い。

「だから今年行くの」

「何日？」

「1週間……とか……それくらい？ 泊りがけで」

「……ふーん」

驚くほど無関心にコーラを口に含む黒澤が居た。でもまあ、普通
の反応か……？

「そうなんだー、んじゃあ夏休み最後は寂しくなるねー」

俺にそう言いながらも、チラッと黒澤を覗く柴田先輩の顔。

「でも、まあ。頑張ってるね！」

「はいっ」

バイトに行くのはまだまだ先の事だが、友達らしい、先輩らしい
応援に、俺は笑いながら返事をしていた。

行くと決まれば話しは早い方がいい。俺は2人の部屋を出て、管
理人室の近くにある電話でバイト先に連絡するためにそこへ向かっ
た。

電話番号は覚えている。毎回毎回そこに電話をかけていた。1年かけなかっただけで忘れるわけがない。発信ボタンを押して1コール、2コール。たったそれだけ間を置いて、大きくて聞き取りやすい女性の声が聞こえてきた。

「あ、お久しぶりです。矢西 蘭です。あの、おじさ……支配人はいますか？」

「ええ。少し待っててくださいね」

「はい」

途端に鳴り響く保留音。1分2分経った後に、年老いた、それでも元氣のある声が耳に響く。

「蘭君か、久しぶりだね。そういえば去年は来なかったな……」

何かを聞いただすような冗談交じりの問いに、少しだけ背筋が凍った。

「あ、すみません！ 色々事情があって……今年は大丈夫なんですけど」

恐る恐る返してみると、さっきとは打って変わって陽気な声がまた戻ってきた。

「おお、そうか！ 助かるよ！」

「そんで……いつくらいがいいですかね？ 日にち。いつも夏休みの最後らへんでしたけど」

「それが、さ。今年は……少し早く来てくれないかな？」

「早く……？ いつですか？」

「出来れば夏休み始まってすぐくらい。いやあ……ここ最近泊まり予約人数は少ないほうだったんだけど。今年に入って結構多く入ってしまっただね。こっちも辞める人とかも居て、ダメかな？」

ダメかなって……。予想外の日にちに少し驚いた。いくらなんでも早いとは思ったけれど、去年は休んだ身。それに、今断ったら今年もいけなくなるかもしれない。

結局断れる筈もなく。

「あ……いえ、……分かりました！ 大丈夫です！」

返事をしていた。

「そう良かった！ ……それで、…もう一つ頼みんだけど…あと一人くらい、友達連れてきてもらってもいい？ 蘭君に接客頼もうとも思ったけど、それじゃ心配だし。接客上手そうで人見知りのしない子。ご飯も寝床もお金も出す！」

「はい！ 分かりました！」

返事をしていた。

異変

「俺のオジサンがさ、旅館の支配人やっててよ。夏休み始まってすぐ1週間忙しくなるらしいんだわ。普通にOKしちゃったけど、俺だけじゃ不安だって言われて、誰か他にこれる奴いないのか？　っ
てきかれたんだわ。お願い！　……だめ？　ギャラも出すし飯もだす！」

手を会わせて懇願した先には、飯を食う壺の姿があった。

食堂。おじさんとの電話が終わり、バイトを誘うなら誰が良いのか考えていた。黒澤は論外、柴田先輩に頼むにしても：黒澤には柴田先輩みたいな喋り相手はいるだろうし。

やっぱり最終的に頭に思い浮かんだのは壺だった。壺なら頭も回るし、人見知りもしない。結構接客向きの性格をしていると思った。さっそく誘おうと壺を探しているときに、丁度、食堂の前に壺の姿を見つけたので、一緒にご飯を食べながらバイトの話しを持ちかけようと考えた。

それでも、この前配られたばかりの夏休みの課題を夏休み前にやろうと、おばさんに食券を渡しながら『作るの早めに』と注文していた時には、バイトの話しを断られるんじゃないかと焦ったけれど。

「いーよ」

そんな焦りも虚しく、即答された。

「え、いいのかっ?！」

壺のことだから、夏休みの初めは勉強しなきゃ……みたいな感じに言ってくると思ったけれど……。まあ……人間、夏休みの全部が全部勉強しているわけじゃないし。……って、俺はしなさすぎなのか…。

「いいぞ」

もう一回、OKの返事をしながら、『バイトに行く』と言う事を再確認してきた。

「おー……なんかあっさり過ぎて逆にがっかりしたわ」

「断るぞこら」

「ごめんごめん！　つーか本当にいいのか？　後悔しない？」

いや、コレは嬉しい。……でも勉強に支障とか出たりしないかな、

…大丈夫か？

「いーもなにも、金もでる飯もでる……断る意味が分かんねえよ……で？　どこの旅館？」

一石二鳥じゃん。ともう一言。それから話しに完全に乗ったと言う感じに、バイト先を聞いてきた。

「一ツ橋森林旅館！　夏休み始まった2日目には出発だから、準備よろしくな」

「おう」

旅館は旅館だけれど……知名度は薄い。どこだそれ、みたいな顔をしている壺に、少し笑みを浮かべた。

それから、俺が頼んだB定食に、俺の大好きなマヨネーズをかけた。始めた。マヨネーズはいいよな……炭酸見たいにシュワシュワしてないから。

完全なるマヨラー。

そう言えば……黒澤は多分、炭酸モノが大好きだと思う。買ってくる飲み物は全て炭酸系だし、さっきもコーラを飲んでいた。俺は逆に炭酸モノが大嫌いで。

——去年の、黒澤に初めてあった時に部屋に連行された時の事を思い出した。

あの時も確か、黒澤が俺にくれた飲み物も、炭酸系だ。肺に染みて、しかもその時嫌いになった黒澤が目の前に居て、凄くまずく感じたのを覚えている。

それからの俺達の、性行為。

「お前……太るぞ」

引き気味に壺がそう言ってきた。

引いてこようが、相手が壺であろうが、ここは引けない。

「うつせーなあ。あれだ、マヨネーズとB定食は俺の嫁なんだよ!」
そんなギャグを言いつつ、頭に残る黒澤。

「一夫多妻制の国行け。日本じゃ無理」

一夫多妻制の国に行っても。俺と黒澤の行為は、絶対に受け入れられないだろう。だって男と男だ。俺は女じゃないから、結婚も出来ない。

セックスは誰とだって出来る。ただ気持ちの問題。ただ嫌悪とか、愛しさのそれだけの違いだけ。

ああ、まただ。

ガツカリに似た感情。気分。

「……あー…それもいーかもなあ」

何なんだろう。本当にコレは。

「？」

気持ちをかき消そうと、俺は一気に味噌汁を口の中にかき込んだ。

「ゲホっ……ゲホッ!　っ…!」

結果むせた。気持ちが焦って、落ち着かない。

「どーした？」

俺の異変に気付いたのか、壱が俺の顔を覗いてきた。

「……なんでもない」

本当に何でも無いと思わせるように、エビフライを口に含みそう
呟いた。

「そうか……ごちそうさま……じゃ、矢西。俺行くわ」

「ん、おう」

壱がこの場からいなくなった事を確認して、俺は少し、安堵した。
最近は、おかしい。この突然現れるガツカリした気持ち。俺の目
に映る黒澤。気持ちが悪いほどに、目が黒澤を追う。

血圧が上がる。ドクドクと脈打って。

「……」

この頃俺は、何かおかしいんだ。

好意（前書き）

ファイキーのサイドストーリーと言う事で、好きになった時の感情？
感覚？は一緒にしておきました。

好意

ここ2、3日、変な感じが止まらない。いや、……正確には止まるは止まるけれど、またすぐ同じ風になってしまふ。俺は、何か変な病気にでもかかってしまったんだろうか……。

「…そんなわけねえじゃんか」

そうだ、そんなわけない。あまり風邪も引かないような健康体だ。

——これはまた、別の何か。

……。何かって何だ？

いままでこんなこと何てなかったんだ。1回も。初めてこんなわけの分らない気分になったのは、黒澤と柴田先輩に会ってからだ。俺の高校生活も、一部の思考も何もかもが変わった。

こんな風になるのも……きっと——。

「あー！ ダメだ！ 気持ち悪い！ こんな俺じゃねえー！」

隣に邪魔にならないような、大声を出した。両手で両頬をパンと叩く。気合入れなおし。こんなジメつとしたのは俺じゃない。もっとコミカルに、テンション高く考えよう。

この感情はアレだ……俺は、今思春期だからだ！ 思春期真っ只中で、心も体も落ち着かない。今はそんな状態なんだ。

我慢すればいいんだ。そのうち収まるんだし！

「そうだそうだそうだ！」

そうだ、コレだ。コレが俺。

この調子で行こう！ 明日はバイトなんだし！

「そんでちゃんと2人に言わなくちゃな！」

バイト行くのが早まる事を、いまだに黒澤と柴田先輩には伝えてはいなかった。勿論、この気持ちのせい。行くなら今だ……！

俺は自分の部屋をで、この2、3日頑なに拒み続けてきたドアの目の前に立ち止まった。

「お邪魔します！」

ノックをし、思い切りドアを開く。

「あー、矢西ー！ いいところに来たー！」

……未知の光景が広がっていた。

「コレ……こいつ、静……離してくれない、かなあ……？」

あはは、っと。苦笑しながら俺に頼む柴田先輩の背には、重くのしかかった黒澤の姿があった。状況に戸惑う。

柴田先輩の背中に貼り付いている黒澤

「な……どうなってんですかっ？」

急いで柴田先輩の背後に回り、黒澤を引っ張った。

「うあ、……てか、黒澤酒くさ……っ?!」

黒澤の口から漂うアルコールの独特な匂いに、少しでも抵抗感を覚えた。まさかとは思うけど……寮で、酒飲んだのか？

「何やってんですか……」

呆れた声を出して、ようやく柴田先輩から離れた黒澤を置いて、俺は柴田先輩に聞いた。

「ごめんごめん、なんかいきなり『酒飲みてー!』……て騒ぎ出して出掛けたと思ったら。沢山お酒もって帰ってきてさ……」

「酒飲みたいって……この感じじゃ他からもっと嫌われるイメージしかないですよ……」

「そうだよなー、……これは本当に、僕の不注意……かも？」

そういう柴田先輩の息も少しだけ、ほんの少しだけ、アルコールの匂いがした。俺が柴田先輩を凝視するようにじっと見つめると、目を泳がせ、それから俺を見ようとしなない。

……一緒にになって飲んだな。完全に。

「飲みましたね……？」

「はい、……ごめんなさい」

俺に謝られても……てか、柴田先輩より優位に立てたのは、結構嬉しいから、まあいい。全然酔ってもいないみたいだし。

「んで、矢西は何しにきたの？」

「いや、あ、そうだ。俺、明日バイト行く事になってて」

「え、あした？　なんか早くない？　前は夏休みの最後らへんって……」

「なんか電話かけたら最初の方が忙しいみたいで……明日、壺と一緒に1週間くらいバイトです」

「あり…さわあ……？」

『壺』と言う言葉にいきなり反応したのは、柴田先輩の背中から引き剥がしてその辺に寝転ばせておいた筈の黒澤だった。

床に這い蹲り、こっちを朦朧と見つめる黒澤。

ていうか、なんで。…壺に反応すんの？

「んじゃあ、俺、戻りますね」

その胸の高鳴りは、何かの焦りだったのかもしれない。

立ち上がり、部屋に戻ろうとした時に俺に声をかけたのは、柴田先輩だった。

「矢西、……ごめん。シズカの事、1日だけ預かって…？」

「……何デスカ」

その理由は、黒澤がまた柴田先輩に押し掛かろうとしている行動をみて、聞かずとも分かった。

「バイト、行くならそのまま置いてっていいからさ。お願い……？　トモダチ、デシヨ？」

……。

「分かりました」

その笑い方……何か考えまくりのその笑みに、反抗なんて出来なかった。

＊

幸い夜。みんなそれぞれの寮室に閉じこもっていて、人は少なかった。柴田先輩にも手伝ってもらってもらい、なんとか他にはばれずに俺の部屋に黒澤を運び上げ、緊張を解いた。柴田先輩も自分の部屋に戻り。

この部屋には、俺と黒澤だけがいた。

「黒澤、……ベッド」

「……ここでいいつのー…」

「いや、それじゃ俺が困るから」

黒澤が寝転がった先に枕代わりにしていたのは、俺のバイト用の衣類を詰め込んだ旅行バッグ。

「ホラ、頑張って立ってよ」

「んー」

なんとか黒澤の腕を俺の肩に回し、無理矢理に引きずりながらベツドへと向かう。なんか……妙に言う事を聞く黒澤はどこことなく気持ち悪い。……これが、…柴田先輩が言っていた。黒澤は動物に例えるとネコ。……みたいな事なのだろうか。

こんなでかいネコって……無えよ、やっぱり。

「んしょ……っと」

ベツドの柵に手をつき、その流れで黒澤をベツドへ寝かそうと思いい、黒澤の体を少し強めに押した。思ったように簡単に黒澤の体がベツドに沈んだ。

「……って、うぐげっ?!」

自分の身の予想外の衝動に、変な奇声を発してしまった。俺の体も、黒澤の体と一緒にベツドに沈んでいた。

「黒澤……?」

俺の腕が、黒澤にギュっ掴まれていた。

「やにし」

「っ?!」

正直、ドキっとした。うつすらと開いた口と目、吐息交じりの声、赤い頬。油断した瞬間に、俺はベツドに押し倒された。……俺にまたがる、黒澤。

これは……なんか、やばいぞ。またあの時に戻っちゃう。ダメだ。

「黒澤っ、ダメだ。しないぞ。……っは、なせって…ちよ!」

「しないから…ヤラないから…触らせろ」

こんなのは、おかしいぞ。

「友達は、こんなことしないよ…くろさわ」

「……うつせえ…矢西、やにし。なあ、…まだ、俺、お前の名前呼べねえの？」

そう言い、俺を優しく、強く、抱きしめる黒澤が居た。

「な……に、言って」

「お前の名前…呼びてえよ……。なあ、俺の名前…も、呼べねえ？」

黒澤の、名前？

何だこれ。また、あの嫌な気分になってきた。胸が苦しい。おかしい。ドクドクと、高鳴る心臓。血圧が、上がったような感じがした。

怖いよ、黒澤――。

「矢西…矢西…」

「し、しず……」

「――っ好きだ、…や、にし……」

「……っ!？」

この頃何かおかしいんだ。黒澤も、俺も。

＊

次の日。

俺は黒澤の横で目を開けた。全然眠れなかった。

「サイアク」

黒澤がこのまま目を覚ますのに恐怖を覚え、まだ行くには早い時間だったけれど、壺をたたき起こし、早急に寮を出て、旅館へと逃げ込んだ。

好意（後書き）

※未成年の飲酒は法律で禁止されています

困惑 1

「くあっ……眠い…」

列車の中、壺を向かいに、大きなあくびをした。

「矢西…このやろっ……お前さっき俺の眠り妨げといてどの口が眠いかいってやがんだよ…」

「え？ ……だってさあ……俺昨日余り寝てないんだもん…」

余り寝ていないと言うか、全く眠れなかった。安心したからだろうか、列車に揺られているからだろうか。物凄く眠くなっていた。壺には本当に申し訳ないけれど、とりあえずマジで眠かった。

列車に乗車して動いて、それから初めて安堵した瞬間。それまでは、ありえないほどに心臓がバクバクと動いていて、もう地獄だった。

「寝てていいよ、ついたら起こすし」

ふと、壺がそう言った。俺が無理矢理壺を叩き起こして来たのになんか悪い風に思い、そっちは眠くないのかと聞き返してみる。

「もうとつくに目え覚めてるよ、だから寝てていいって。どうせついたらすぐ手伝いするんだろうし、少しは睡眠取っとけ。足手まといになるしな」

優しいのか、厳しいのか。壺はそう言ってゆっくりと軽く微笑んだ。

「サンキュ……」

お礼を言ってお言葉に甘える。目をゆっくりと閉じると、いつもより少し明るい暗闇が広がった。耳からはガタガタと車輪とレールが擦れ合う音が聞こえた。それが凄く気持ち良い。冷静な気持ちを取り戻して、俺は改めて思った。

黒澤に好きだと呼ばれた。あれは、なんの冗談なのか？ からかってるだけなのか、本当なのか。どういう好きなんだろうか。

俺と黒澤は今友達の状態。セフレでも何でもなくて、一緒に飯

だって食べるし、勉強だって一緒にするし、喋るし……。

でも『好き』だなんて、言われるとは思っていなかったし、そんな感情は無いと思っていた。元セフレだ。体だけの関係で、恋愛要素なんて全く無く。俺は黒澤を憎んでたくらいだし。

それでももう、嫌いじゃない。嫌悪なんて全然抱いてないし。むしろ最近黒澤という楽しいと思えてきた。あの時の黒沢と今の黒沢。……俺の感情は、全く真逆。

俺の名前なんて、……幾らでも呼べるんだぞ。俺はただ嫌いなやつに呼ばれたくないだけなんだから。柴田先輩だって、壺だって……お前だって、名前を呼んでも、俺は何とも思わないよ。

黒澤は、何か勘違いをしている。友達なのに、お前の事嫌いなわけないんだ。

その癖、俺の名前も呼べないのか。何て。

呼んで欲しいのか？ ……そして俺も、何故あの時名前を呼ぼうとしたんだろうか。理由は分からない。でも……今だってちゃんと呼べるんだ。嫌じゃない。逆に呼びたいくらいだ。

なあ――。

あの好きの意味はなんだ？ 恋愛か？ 友達としてか？ 友達としてなら、俺だってお前の事はもう好きだ。恋愛としての好きなら……俺はお前の事が好きかなんてわからない。男と男だし、恋愛感情の好き嫌いを見つけられる事自体が凄なことだと思う。

他人から見れば男が男に好きなんて言われるのは気持ち悪いかもしれない。でも黒澤。俺はお前に恋愛感情で『好き』って言われたと考えると、全然気持ち悪くもないんだ。

……どうして？

「シズカ……」

矢西……と、外から小さな声で俺の名を呼ぶ声が聞こえた。薄っすらと目を開けるとそこには俺の肩を揺さぶる壺。荷物を持って俺を起こしていた。旅館のある駅にもうすぐ付くらしい。

どれくらい寝ていたんだろうか。

分からないけれど、複雑な夢を見たと思った。

心意（前書き）

明けてましておめでとうございます

心意

その日、いつもなら寝起きの悪い俺の脳が、はつきりと目覚めた。俺の部屋と変わらない同じ2段ベッドだと言うのに、自分の部屋の物じゃないと言う事も、低い天井を見ただけではつきり分かった。

「……」

だから、そのハッキリしまくりの脳が、夜、俺が矢西に何を言ったのかも、しっかりはつきり覚えていた。そして今更になって後悔した気になる。

酒の勢いってのは恐ろしい。ていうか酒を飲んだ俺は何なんだ。

何がしたかったんだ。

「なんつー事言ってるんだ、俺は」

好きだ。と言った。お前の名前を呼ばせろと、出来ないなら自分の名前を呼べと。……完全にイカれてる。

矢西の部屋。ここまで、柴田と矢西に連れられて来た事も分かっている。部屋の空気も、シーツも、枕も、何もかもに矢西の匂いにして、頭がクラつとした。

匂いにさえ心臓が爆発しそうなくらいにバクバクと高鳴っている。様は『興奮』だ。

「ガチじゃねえか……」

どっからこんな風になった。

……多分、：『友達』になる、前？ それらしき感情は、少なくとも抱いていた筈だ。じゃなきゃ『友達』なんかにはならないし、そもそも有沢壺を好きじゃなかったなんて暴露はしない。

「ていうかアイツ。……どこ言った？」

とりあえず、顔が見たかった。変な誤解をされちゃ困るし、避けられても困る。断られるならそれでもいい。別にそれで諦めもしない。ただ誤解だけはされたくない。

有沢の時みたいないな『好き』じゃないんだ。他の奴等に渡したくな

い。お前が他の奴の所に行くのが、凄く怖い。……コレは、こんなこと、誰にも抱いた事は無かった。

お前だけなんだ。

そう、きちんとやってやる。俺は逃げねえ。

「え？ 矢西？ バイト行ったよ。1週間くらい帰って来ないってさ」

部屋に戻り、開口一番に矢西の居場所を聞くと、これまた開口一番に柴田がそう一言言った。

……あ、いつ…。

「夏休みの最後らへんって言ってたじゃねえか」

「うん。でも、予定変更しちゃったんだって。あれ、もう部屋にいなかった？ こんな早く行くものかなー……？」

逃げたな。自分で俺に逃げるなって言っておきながら、逃げやがった。

「クッソ……帰って来たら覚えてろよ…」

「？ 矢西と何かあった？」

「……ちよつとだけな」

「――そう」

俺の誤魔化しを素直に受け入れ、再び課題プリントを覗く柴田。けろつとした顔でスラスラと問題を解いて行く。書いたあとに、稀に消しゴムを取り出し、回答を書き換えている。

「お前、…それわざと間違えてるだろ……？」

「ケアレスマスだよ、ただの」

コイツの、ちゃんと性格を晒さない性格ってのはまだ直ってねえな。俺にでかい口叩くくせに……。コイツの性格ばらしたい気もするけど、俺が何を言ったって信用ねえんだよな。

早く他人から受け入れられるようになんねえと……。

その前に。

マズは矢西。……と課題だ。

決断

1日24時間がこれほどまでに長い物なのかと、俺、黒澤静はイライラを募らせていた。最近では俺の周りに流れる時間は短いほどに感じていたが、久々に時間が長く思えた。退屈で窮屈。久々のソレは、思った以上に苦しい。

矢西がバイトに行った。もう3日も経っていて、まだ3日しか経っていない。話したい事が山ほどある。多々あって、それはいまだ話せないで、約70時間は我慢している。70時間も我慢したのは初めてだ……。あと4日。ほんの4日待てばいいのに、4日向こう先がこれ程までに遠い。長い。

その間にアイツがどこか、他の奴の所に行ってしまうそうだ。

気付いたらもう、余裕なんて無えんだよ。

「シズカ、ペン止まってるよ」

柴田の声が少し遠くから聞こえた。額に冷や汗を滲ませながら苦しく柴田の顔を見ると、柴田は俺の心中に気付いたのか、ふと苦笑した。

「勉強進まないね。休憩しようか？」

「いや……いい」

「そう？ 相談でも乗ってあげようと思ったんだケド」

頼れ。とでも言う風に目を細める柴田に、俺はペンを教科書の上に寝かせて教科書から手を退かした。教科書のページはその瞬間に空間を仰ぎながらペラペラと自由にめくれ、仕舞いには表紙ごとパタンと綺麗に閉じてしまった。

「矢西に好きって言った。酔ってたけど、ちゃんと覚えてる」

「……」

矢西が早くに寮を出たのもそのせい。

「話したいこと大量にあって、声が聞きてえ」

1秒でも早く顔が見たい。抱きしめたい。

傍に居ないだけで、こんなに不安。

「何で俺、矢西のことこんなに好きなんだろうな」
好きすぎて死にそうだ。

3日近くにいないだけでこんな状況で、あと4日。精神が持っていられるんだろうか。

「声、聞きたい？」

目の前に出された簡潔な質問に、即効にゆっくりと頷く。

「それで4日持てる？」

1回目の質問とは明らかに間を置いて、それでも早く頷いた。

「んじゃあ聞かせてあげる」

「……っは?!」

聞かせてあげる。

むしろ何故聞けると自信が持てるのかと、俺は本当に目の前に居る柴田をその時だけは神とでも思えたかもしれない。

椅子から立ち上がり、廊下へ出ようと柴田の手招きで、俺も後から付いていく。

「バイトとか長期外出する時は管理人さんに渡される用紙にいろいろ書かなきゃいけないじゃん？」

「知らねえよ……」

「ああそっか。シズカは長期外出とかしたこと無いもんね」

お前もしたことねえじゃんかよ。

「行き先住所とか、緊急連絡番号とか、何しに行くかーとか」

「……」

「つまり、管理人さんに言ったら緊急の場合のみ連絡とってくれるって事。それ以外は相手先に迷惑が掛かるからダメだけどね」

俺の場合は、『緊急の場合』なんて呼べるレベルなんだろうか。そんな疑問を抱いているうちに、柴田が管理人室の窓口を開け、何やら管理人と喋っていた。

「すいません。2年の柴田ですけど。1年の矢西蘭て子が外出してて。急遽連絡したい事があるんで、電話繋いでもらえませんか？」

「ああ、柴田君。……1年の矢西蘭君ね。……ちょっと待ってて」

「はい」

柴田が『どう？』みたいな感じに得意気な顔でこっちを見たのが、何故か異常にムカついた。

うっぜえ……。

それを口に出してしまうと電話を却下されてしまいそうなので、……黙ってる事にする。

「はい、柴田君。迷惑掛からないように出来るだけ早めに済ませてね」

「はい」

子機が柴田に渡り1回柴田が自分の耳に子機をあて、何故か一言も喋らないまま柴田から俺の手に渡った。

恐る恐る耳に子機を近づけて見ると、地味で単調な保留音が鳴り響いてきた。胸がドキドキとその保留音とシンクロするような感じで高鳴っていく。

それは長いと感じてきた時間の中では飛びつきり長い少しの間だった。

「もしもし。矢西です」

プツツといきなり切れた保留音の次の音は、俺がはやく聞きたいと待ち望んでいた矢西の声だった。

困惑 2

恋愛感情の、ナニモノでもない。

＊

3日目の仕事が一息つき、バイトの厳しさにも慣れた。

朝早くから大量の飯を作り、昼飯の仕込みも早々に済ませ。あと10分もすればまた忙しくなる。力と体力勝負なところはあられるけれど、それなりにやりがいもあった。

それに、贅沢にも温泉に入り、ご飯も食べさせてもらって、更に一人部屋。バイトの癖に、俺は今、贅沢で豪華な待遇を受けている。ホッと一息ついて、肩を撫で下ろした。

仕事中は集中しまくりで、黒澤のくの字も何も頭には浮かばなかったけれど、いざ一息つくと脳があの時のを振り返る。

「好き、なあ…」

やっぱり、あの状況で、あのタイミングで、あの顔で『好き』なんて、恋愛感情込みの『好き』以外に、何もないんじゃないだろうか。どうしても、友達に向かって友達としての『好き』を言っている顔じゃない。

でも……なんで俺？ 俺である理由はどこにあるのだろうか。アイツは昔からセックスフレンドと言う相手は沢山居た感じだし、俺もその一人つてのは変わらない。俺を抱く前には女性だって抱いているだろう。俺は体だってちゃんと男だし、胸だって膨らんでないし、付いてるものもちゃんと付いてる。

いや、男と言う俺と前々からセックスしているし、『何で男の俺に』なんて疑問はそもそも間違っているのかもしれない。

男に性的興奮があるくらいだし、別に恋愛感情があっても可笑しくなんかない。アイツは男に恋愛感情を抱ける人間なんだ。

そう、これはそれで解決する。じゃあ。

「何で俺？」

何で俺である必要があるんだ？ 元を辿ればただの性処理見たいな扱いだったじゃんか。愛着でもわいたとか？ ……黒澤が？

やっぱり単にからかってるだけとか。……でもあの顔。…演技？ 酔ってんのに？

「……やっぱわかんない…」

俺は俺もよくわからない。

黒澤がもし恋愛感情として俺に『好き』と言ったと考えたとして、俺はそれが全然嫌じゃなかった。

黒澤がもし友達感覚で俺に『好き』と言ったと考えたとして、それはそれで別に良い。……なんて思ってる半面。ちよつとガツカリだなんて思ってる俺がいた。

友達感覚の好きがちよつとガツカリなんて。

——それはつまり、俺自身が黒澤に恋愛感情を抱いてる。

「っな……?!」

あまりの驚きに椅子から転げ落ちそうになったのを一気に立ち上がる事で何とか支えた。転げ落ちるのを何とか耐えても、顔の驚きは隠せない。

「蘭君、電話だよ。……どうしたの？」

一人居る厨房のドアが開き、叔父さんが手に事務室にあった子機を持ってやってきた。

「あ、いや。え…電話ですか？」

「うん。学校のお友達だって」

「……友達？ あ、ありがとうございます」

「悪いけど、終わったら事務に子機戻しにきてくれるかな？」

「はい分かりました。ドモです」

そう言う叔父さんはニッコリと笑い、厨房を去って言った。

……それにしても…友達って誰だ？

「……もしもし、矢西です」

学校の友達から電話…なんて叔父さんに言われて、俺は不思議に保留音を切った。スピーカー部分を耳にあて、そうお決まりの挨拶

を口にする。間を置いて、変わらないその無言電話に気味の悪さを感じだした時だった。

「てめえ、逃げやがったな」

声からでも、黒いオーラが見えた。

「くろっ……?! なんで?!」

「お前に話す事がある」

「話して……」

その話してのの内容が、なんとなく分かった瞬間。

「ああ、…そうだっ」

なにか聞くのが怖くなって。俺は少し、話を逸らしてみる。

「夏休みの最後だって言ってたのに、最初の方にバイト行っちゃってゴメンね! しかもちゃんと言わなかったし、…怒ってる? なーんて……コイビトみたいなこと……」

「好きだ」

どっちの好き?

「言わないで」

「俺は酔ったときの事も、今の事も、無かった事にする気はねえぞ」

「……言うな」

「お前が目の前に居ないだけで、俺は限界だ」

それは、つまり。

「コレ以上、……俺の中から居なくなるなよ……」

「くろさわ」

「……帰ってきたら。またお前に好きって言ってやる。…お前が答えだすまですっ」と

脅迫するみたいな言葉の後に強制的に切られた電話には、ツーツーと言う音が流れている。

「言うなって言ったのに——っ……」

椅子に座らず、頭を伏せるようにしてしゃがみ込む。
開いた口の端が微かに上がった。

「……シズカ……」

それはつまり、恋愛感情のナニモノでもないわけで。

結論（前書き）

事情により全然更新出来ませんでした。
すみませんでした。

結論

「矢西……っ……！」

一瞬にして暗くなる視界。

その一瞬の黒さの次の、青暗さと日の赤さに目を覚ました。

懐かしい夢を見た。いや、懐かしいと言うほど遠く昔の夢なんかじゃないし、良い夢でもないけれど。懐かしい夢を見た。

俺が黒澤に抱かれた最後の日。

「忘れてた……」

あの日の事なんか。

ブルーレイ並の綺麗さをしていた目の前の画質は、低画質の低画質と言う程に見づらくなってしまうていた。消えかかった黒澤に口元にまた何度か吹き替えしてみるけれど、やっぱりしっくりした言葉は当てはまらない。

そもそも何で今頃こんな夢を見たんだろうか。

「3時30って……」

インパクトある夢を見て、一発で目が覚めた。いつもならこんな時間に起きたら普通に2度寝してるところだけど、目がぱっちりと言えてる。

窓の外から大きくカラスの鳴き声がした。その場に近づき、全開に窓を開けてみる。

小さくスズメの鳴き声。朝の空気は何もかもがりセットされた風に澄み切った感じがして、少ししっとりとしている。

「黒澤はまだ寝てるなあ……」

最初を思い出してみれば、印象は最悪の最悪だった。ファーストコンタクトはもっと最悪で、セカンドは絶望的で。そんなヤツのセックスフレンドで、しかも殴られて、その時は人間みたいな扱いなんてされた事がなかった記憶。

俺は黒澤が大嫌い。だった。

酷い扱いを受けすぎて、ちよくちよく見せてくる些細な優しさが気に食わなかった。ウザかったし。

色々あって、本当に色々あって、……何故か『友達』なんて関係になってしまった。何故かと言うか……なろうと言ったのは自分の方。黒澤も黒澤でその話しには乗ってくれて、そんなわけで『友達』だ。まあ……そんな友達生活もこのバイトを気にお終いだ。

黒澤に好きだと言われた。酔っていたから忘れているのかと思っただけ、本人は忘れてさえいなかった。電話までかけてきて再度告白。

ずるいやツだと思う。

それでも、その好きだと言う告白に拒否反応を起こさない俺。別に嫌じゃないし、むしろ嬉しかったし。そうじゃないと悲しいと思っただし。

……そんな事思っている俺はきつと、絶対。

黒澤が好きだ。

「あー……重症だぁ……」

だって、元俺を人形みたいに扱ってたヤツを好きになってんだぞ。Mか……。いや、そうじゃないと思いたい。

ていうかそれよりも、これからどうすれば良いんだろうか。

話しからして両思いだぞ。黒澤に告白されて、俺も黒澤が好きだ。でも、俺は男なんだぞ。

「……」

山の向こうから上がってくる日が、俺の目の前で眩しく揺れた。

目の奥が一瞬潤んだのは、多分気のせい。

「会いたい、……なあ」

会いたいなんて、ただそんなことを思いながらバイト日数を重ねていった。

バイト期間が一日のび、今日が帰る日。いざ帰る日になってみると、色々と複雑な気持ちが込み上げてくる。いや、それは元々か。でも色々気持ちが込み上げて来たって、それを考えたって、俺は

壺や柴田先輩みたいに頭が良いわけじゃないから良い答えなんて出ない事は分かってる。

それに、思ってるほどそんな複雑な問題じゃないんだ。

好きだ。って言われて、好きだ。って返すだけ。ただそれだけ。

たったそれだけなのに、そう考えるだけで苦しくてつらいのは、俺が本当に黒澤のことが好きだからなのかな？

眩しい太陽に目を細めながら、俺は少女漫画の主人公な気分ですう質問してみた。

「……アホらし……」

突っ走るしかないんだよ。俺は女の子じゃない。

好きな相手が男だって、元セフレだって。『未来』なんか考えてられない。俺は『今』しか考えられないんだ。

だから、帰ったら絶対に言ってやる。好きだって、何回も言いたい。名前だって呼んでやるし、呼ばせてやるし。

男なら男らしく行こう。

後悔はしたくない。

告白

「うぁー……」

真夏の快晴。気温は最悪な程に高く。それに比例したように俺の心境も最悪だ。

先ほど戻ってきたばかりの、8日ぶりの見慣れた街。見慣れてる街を見渡して、俺の機嫌は損なわれ続けている。

後悔はしたくない。だとか、好きって何回も言ってる。……なんて言っただけで、……考えなんてのはちよつとの時間で変わってしまうものなんだと思う。

いざ思うと恥ずかしいと言うか、言いづらいと言うか。だって相手は黒澤なわけだし。

いやでも……こんな事になっちゃってるけど、俺はこの気持ちを言わずに諦めるつもりもない。後悔したくないのは本当だし、帰ったら俺が答えだすまで黒澤が好きって言ってやる……とか。

言ってたし。

好きって言われたら俺も好き！　って――。

「自分から言いたかったんだよね……」

電話ではフライングされたから、今度は俺の番だと思った。でも好きなんて言葉、人間を対にして言ったことないし……。

黒澤は本当に俺と面と向かって好きなんて言えるんだろうか？

電話では顔見てないから告白する勇氣は多少出るとは思うけど。

「なんか普通に言いそうだな……」

軽く好きって言えそうだし。

俺も挨拶並に軽く言えいいのかな。通り過ぎる時に軽く手上げて『好き！』……って。

「変人かっ」

幾らなんでも軽すぎるし。そんな軽い言葉でもない筈。

ていうか俺が考えすぎなだけなんだろう。実はそんなドキドキ

しないとか。他はこんなに緊張しないとか？

わかんねー。

精神的にも体力的にも疲れて、俺はコンクリートの上にしゃがみこんだ。コンクリートも熱を帯びていて、俺の皮膚を温める。

「……心折れそう」

世の中の告白したことある人達全員を心からリスペクトした瞬間だった。

考えただけで心臓がバクバクする。そんな苦しい状況をこの快晴のせいにして、俺はゆっくりと起き上がった。

こう考えよう。

俺は甘い。

普通皆、誰かに告白するときは答えが分からなくて怖いと思う。

……でも俺は答えなんて分かっている。しかも良い方だし。何も怖いことなんか無い。

俺はそんなに女々しくない。

一瞬、涼しい風が俺の背中から吹きつけた。それと同時にさっきよりも数倍早く歩みを進めてみる。もう見えない、先に行ってしまった壺の背中を追いかけた。

暑い暑い寮までの道をひたすらと歩く。遠くには陽炎かげろうさえも見えて、この日の高い温度を物語っていた。

電柱を越えて越えて少しだけ見えた寮に、俺はもう少し歩みを速くしてみる。

早歩き。太ももが少しだけ痛んだ。

着いた玄関にわき目も振らず靴を脱ぎ通り抜けた。通り過ぎようとした管理人室の窓口から管理人さんが顔だし、俺の足を止める。

「こら、帰ってきたんならちゃんと言いなさい！」

管理人さんと顔見知りつてのもなんか面倒くさいものだど、小さく愚痴を心の中でしてみる。

「ごめん管理人さん。ちょっと急いでたっ。帰ってきました！」

今の切羽詰まった顔でまた足を止められては俺のイライラが募る

ばかりなので、『いつもの矢西』らしく、笑顔で親しみを込めた口調で挨拶をした。

「はい、よろしい！」

何気の友達会話でOKサインを貰い、俺はまた振り返り階段に向かって走りだした。

「こら！ 走らないのっ！」

「ごめんなさい！」

謝りつつも走っていると後ろから大きなため息が聞こえてくる。

それでも悪いとは一切思っていない。このまま歩みを止めてしまうと、やっぱりまた黒澤に告白する勇気が失われてしまうと思った。

そんな心の姿勢のまま階段を駆け上がり、自分の部屋のある階も通り過ぎ、柴田先輩と黒澤の部屋へと向かう。

手をドアノブに伸ばし、ボタンっ！ と音がなる勢いで部屋を開けた。

「くろさ……っ！」

目に映るのは殺風景な部屋と、眼鏡越しに目を丸くする柴田先輩。派手な髪色をした不良はどこを見渡してもいなかった。

「び、つくりしたあ……おかえり矢西。…静はここにはいないよ？」

「え……とっ……。ただいま、デス。ど、どこにいますか。黒澤」

ターゲットの人物がいないと知り、露骨にがっくりした俺を見て、柴田先輩が笑みを漏らした。

「矢西の部屋にいるよ」

「え……俺の部屋？」

「そ。矢西が帰ってきたら真っ先に好きって言ってやるって――。

あ、ごめん、ネタバレしちゃったね」

「……」

多分さっきの俺と同じで全然悪いと思っていない。

「まあでも、矢西も同じ事考えてたのかな？」

「うへ……あ、……えと」

普通に脳内を見透かされている。返答に困り、変な擬音語だけが

口内をすり抜けた。

「早く言ってあげなよ。1週間のはずなのになんで帰ってこないんだ……ってムカついてたよ」

「あ……—」

「そうだ……黒澤と柴田先輩にはバイトは1週間て言っていたんだっけ……」

「そうします。どうもでしたっ！」

「うん、頑張ってたね」

柴田先輩の優しい笑顔と声援に少しながら勇気を分けてもらった。ドアをゆっくりと閉め、それから俺の部屋へと向かう。

黒澤は開口一番に俺にまた告白するらしい。何故か闘争心が燃えた。

絶対に俺が先に言ってやる。

そんな甘んじない闘争心。

「……」

目の前に俺の部屋の中へと続くドアを見据えた。数回ばかり深呼吸をして、ドアノブを握り、思い切り捻り思い切りドアを開けた。

同時に発せられる俺の告白。

「しゅきだあっ！」

「——っ?!」

柴田先輩よりも目を大きくさせて頭の上にハテナマークを浮かべた黒澤を瞳にとらえると同時に、俺は大事な大事な告白を台無しにした事を脳内で理解する。

「……あっ」

「噛んじゃったよ——」。

ミッドナイトブルー（前書き）

これ最終話です。

完結にはせずファイキーの話・・・の矢西視点少しずつやってこうと思います。

総アクセス78000あります！

本家PV26万越えも感謝です

ミッドナイトブルー

目の前で足を組んで座っている黒澤は目を大きく開いて俺を見つめていた。俺も自分の空気の読めなさに驚く。

「あ……っ 嚙……」

無言の部屋に、俺の間抜けな声が響いた。気付いたときにはすでに遅い。時は戻せないってヤツを、怨んだ。

「矢、…西」

「ちよっ！ な、何も言わないでっ！」

口を開いた黒澤にこれまたビックリして、俺は数倍大きな声を張った。

笑われそうで嫌だったのと、嚙んだのを良い事に『好き』と言われそうだと思ったのと、本気で恥ずかしかったのと。まあ色々はいくつもあって、ごちゃごちゃになっていて、どうでもいいから口を閉じてほしくて、俺は手を前に突き出して手振り突きで黒澤を止めた。

「お、おオレが言いたいの！」

「え……何を？」

疑問に思う黒澤。……気づけよ！ いや、やっぱ気付かなくていいけど…。

「だから、俺が先に好きだって言いたいんだよっ！」

そんでまた、俺は何かを間違えた事に気付く。

「あ、あ……い、今のなし！ なしだからな！ 忘れろ！」

展開はグダグダのグダグダで、頭を整理させたいけれど、混乱していてそれどころでもなかった。心臓がバクバクしていて、もう『好きだ！』って言ってしまいたいのに言えなくて。

必死に言葉を撤回する俺は、凄くみっともない気がした。俺のここに来るまでの想像はきつと、全然こんなじゃなかった。

こんな事なら黒澤から好きって言うてくれるのを待ってればよか

ったんだ。

「……いや、だから。」

ダメだって、それは。ちゃんと男らしく自分で言うって決めたんじゃない。

自分の一つ前の考えを訂正する。

「だから、えと……」

ああ……やばい。頭ではちゃんとわかってる筈なのに、何も言えない……。

「矢西」

「だから先に言うなって！」

「ああ、だから」

床の上に座っている黒澤がゆっくりと立ち上がり、ゆっくりと俺に近づいてきた。俺の目の前間近まで来て、薄く笑う。

こんな展開も俺の想像では全然なくて、つい言葉を失った。

「俺のこと、好きか？」

好きか？　なんて、聞かれる想像さえなかったし。

「っ……」

そんな事を聞いた黒澤も、頬を少しだけ赤く紅潮させていた。自分もこんなことになるのは慣れていなかったんだろう。

ああ、もう。どうしてこうなっちゃったんだろう。全部、全部。

黒澤の顔を見るだけで、好きだけじゃ伝わらないほどの想いが、感情が、心の奥深くから溢れてくる。数日顔を見なかっただけで、顔を見ただけでこんなにも泣きたくなるものなんだろうか。

俺よりも幾らも高い身長を屈かがませて俺の顔を覗いている。

その目も、口も、手も、……もう本当に、大嫌いだったものが愛しすぎてたまらないんだ。もうそんな事思ってる俺も黒澤の存在も怖くて、逃げそうになる。でも逃げて、黒澤の手の中に俺じゃない誰かがいるってのが一番恐ろしく思えた。

「……」

好き。

大好きだ。

「……っずか」

黒澤の後ろ髪をくしゃっと手で掴んで、それからゆっくりと頭ごと引き寄せる。俺もゆっくりと踵かかとを上げて、そしてまたゆっくり、俺は黒澤の唇に自分の唇をくつつけた。

触れるだけのキスってのも、俺からするキスってのも、こんな柔らかいキスも、初めてで。黒澤とする2回目のキスだった。

「好き」

勇気を振り絞って呟いた告白は、息混じりで本当に小さかったけれど、ちゃんと聞こえていたんだろう。

「……っおま、今、キっ……いや、それよりも名前……」

本人は俺の告白よりも、キスよりも何よりも、自分の下の名前を呼ばれた事に一番驚いていたみたいだった。

……俺の告白をスルーするなっ！

「俺は、……もう黒澤は嫌いじゃないから、……何度だって呼ばせてあげるし、俺だってお前の名前くらい呼ぶし」

「じゃ、今のキスは……？」

「だ、だから。ホラ、キスってのは……」

――す、すす……好きな人とするもんじゃん……。

小さな声で言った途端に、俺は黒澤の胸の中に押し込まれた。

「やべえ……」

やばい……？

「何が？」

「俺、お前が俺を好きな事よりも、お前の事好きだ……きゅんとしちゃった俺は、重症だろうか。」

「俺の方がす……好きだ」

「可愛いこと言ってんじゃねえよ、ヤッチまうぞ」

男の俺が可愛いなんて言われて嬉しいとは思わなかったけれど、逆に少しムカッとしたから、最後の言葉に即肯定だけした。

「いいよ」

男らしいところを見せ付けたかったのか……考えはよく分かんない。
「セフレとするんじゃないセックスしろ」

小さく笑って、俺は黒澤を抱きしめ返した。

「キス、していいか……？」

肯定する前にキスしてきそうな近さでそう黒澤が聞いてきた。

「……」

返答せずにもっかい自分から唇をくつつけたのが始まりの合図。

＊

俺と黒澤は今日その日、死にそうな程繋がって、窒息しそうな程キスしまくって、何年分も名前を呼び合った。

「っん、…蘭……はあ、俺、……お前がいねえと……っ生きてけ、ね……かも」

「っ……はあ……うあ……。っ！」

あのブルーレイ並に誇っていた画質。最近はずっごい濁って見えただけど、…その言葉を聞いた瞬間に、それと今の黒澤が、ぴったりと重なった気がした。

束縛な言葉。それが何故か嬉しくて。

ああ、なんだこいつ。……めちゃくちゃ俺のこと好きなんじゃん、って、そんなことを思った。

＊

カーテンの閉まっていけない窓から見える空が、青暗く光っている。満月がくつきり見えているから、明日はきつと、晴れだろうか。

「……腰、いだい……」

綺麗な空だとは思いうけれど、俺の体はもう限界だった。

「自分でやっていいつつってただろ」

ここまですると思っとなかったんだよ……。つと、少しだけイラっとしながら、横になり、重い体をベッドに沈めた。

「好きなら好きなりに加減するべきだと思います」

「……考えとく」

面倒臭そうにそう呟いて、俺の頭を撫でた。

「すっげ前から俺のこと好きな癖に……」

「あっ？ ……すっげえ前って、…いつだよ？」

「……」

あれ、…マジで無自覚？

本当にきょとんとした顔をしている黒澤をガン見した。

「？」

「……教えねえー」

「教えろっつの……おいコラっ！」

＊

次の日の朝の話になるけれど。

朝の一発？ ……て言うんだろうか。そんな事を到底我慢できる男ではない黒澤に、強制的につき合わされているとき。

いきなり部屋のドアを開けてズカズカと入ってきた柴田先輩。やっぱり情事中で、それを柴田先輩に見られた俺が、見られたと言う絶望と下からの快感に欲を弾かせ、そのまま意識を飛ばした。

っていうその話しは、……絶対にしないです——。

ミッドナイトブルー（後書き）

これからどうしようかまだ考え中ですが・・・。
ファイキー2はもう少し先で、もうちょい話しまとまったらうpします。

ちよいと短編とかやってみてーとか思ってますね。

明後日もおわらせないとなあ・・・

ただリアルが少しだけ忙しくなりつつあるぜえ・・・

あとなんかネタが無い・・・。

なんかリクエストくれると嬉しいかもです。

○○が○○で○○・・・みたいな・・・

例・・攻めが嫉妬でお仕置き

的な・・・なんかすみません。

とりあえず主語と述語しっかり書いてくれれば嬉しいです。

who, why, whatちゃんと書いてくれたら歓喜します。

最後に・・・、感想・最終評価。よろしくです。

幸福（前書き）

番外編・・・か？

壱にアメリカ報告された時の矢西君

幸福

その年。夏休みが過ぎた、どこのクラスも学年も、学園祭の準備に追われる。そんな時期だった。

正に真夏とでも言おうか、そんな暑い、陽の高い空の下。

昼間はせみが鳴き喚き、夜は鈴虫が囁き鳴き。その年の夏だって、いつも通りの穏やかな風景で、俺はなんの疑いもせずに1日1日を生きていた。

黒澤とも上手くいって、クラスの友達だって作った。この時期に少々遅かったとは思ってはいたけれど、相手も俺も笑って流した。柴田先輩とも仲良くやっていて、勿論壺とも――。

「え……転校？」

その日の放課後、ひと気の無い体育館裏。教室のドアで壺に呼び出された俺は、黒澤と柴田先輩に確かに『先に帰ってて』と伝え、それから壺の背中を追ってここまで辿り着いた。

「転校する」

そう言った壺の言葉を、絶対に聞き間違えはしなかった。

「なんで？ いつ？」

「落ち着けよ」

動揺なんて、隠し切れはしなかった。心臓はいきなりバクバクとして、脳内は突然パニックに陥っていて、転校なんて言葉。信じられるわけがなかったし。

だってそんな……いきなり。

「父さんが、アメリカに転勤になった」

「アメ……転勤？」

アメリカとか、そんな言葉を聞いて、俺は本当にもう、この暑さとその言葉を聞いて倒れてしまおうかなんて思った。都合良く意識が無くなってくれれば嬉しいと、そんな風に思う。

「親は行くか行かないかは自分で決めろって言ってくれた」

「じゃ……っなんで……?!」

じゃあなんで。なんて、こんな簡単な質問を聞く方が馬鹿なんだと思った。

「そりゃ……、親にこれ以上心配かけたくないからだろ……日本とアメリカだぞ」

「まあ。や、そだけど……さ」

それが理由の全て？ 俺の知っている壱は、こんなにあっさりとしていたのだろうか？ 親に心配かけたくない。……それは勿論重要な理由に入っているんだろうけれど。

いや、それより。

「壱、お前……棗はどーすんだよっ！ このこと言ったのか?!」
一番の疑問が浮上する。この前は、棗に告白されたって言っていた。その次にこの話し。

納得なんて出来るはずはなかった。出来るほうがおかしいよ。下から睨み上げる俺の目をじっと見つめ、それから横に少し逸らしてから、壱こんな風に言った。

「言ってないよ」

淡々とそう言って、言いやがって、俺はキレた。

「言えよ！ 俺よりまず先に棗じゃないのかっ?!」

俺なんかよりまず先に、言わなきゃいけない相手がいるじゃないか。

「棗には、言わないでおこうと思ってんだよ」

壱はいつも大人だった。大人が高校、大学、受験小中学校みたいに試験で決められる世の中だとしたら、多分きつと、壱はすでに大人だったろう。

全部自分で抱え込んでしまう、どうしようもない大人。

「……なんで……? アイツはお前のこと……」

そんな壱の脳内を、ガキ子供の俺には到底理解なんて出来なかった。

「アイツに言ったら、棗はぜってー、俺のこと止めるだろ」

それでも、俺はこのヒント的な一言で、何か察してしまったよう

な気がした。

「お前……もしかして、なつめのこと……」

「矢西、それ以上言ったら殺す」

棗のこと好きなの？

言ったら本当に殺されてしまうかも……なんて不安はコレっぽちもなかったけど、それ以上の言葉を口にはしなかった。

それから数秒言葉を交わすけれど、その中でも俺は言葉と言う言葉が発せは出来なかった。

「壱、俺……このこと誰にも……」

「ああ、誰にも言わないでお願いしてくれ、棗には知られたくない。……んじゃ」

全てを俺に話し、でも棗には話さないと。そう俺に話して、壱の背中が小さくなっていく。

「……」

逃げた……？

俺からじゃなく、棗に。棗と、自分の気持ちから。

「俺は、……逃げなかったぞ」

声が擦れる。

逃げたこともあったけど、最後にはちゃんと向き合ったんだ。お前みたいに遠くて良い逃げ道が無かったからかもしれないけど、逃げなかったんだぞ。

「なんでだよ」

俺の心に、怒りとも、嫉妬とも似つかない感情が小さく芽生える。壱と棗の仲なんてのは、確かに俺には関係ないけれど、壱の下した結論に苛ついた。

そんな意味不明な俺がまた気持ち悪くて、泣きたくなくて、俺は全速力で寮へと戻っていった。

＊

寮に戻ってから、俺は自分の部屋ではなく、二人の先輩の部屋へと駆け込んだ。昔は嫌いすぎた顔で、今はもう見るだけで安心出来

るようなそんな顔を見た瞬間に、俺は堪えた涙を零しだした。

あたふたする黒澤と柴田先輩が俺の元へと寄ってくる。

「壺が…アメリカに行っちゃうよ……」

「は？」

「へ？」

二人が口を揃えて別々の単語を口にする。間抜けヅラの顔を見て、俺はもっと、幼稚園児みたいに泣きつぶれた。

良い年した高校男児が本当、何やってんだよ。みたいに言われてしまうほど。

それからまた、俺は赤ちゃんみたいな感じにあやされながら泣き止まされ、ゆっくりながらも事の状態を全て説明した。

あったこと、言われたこと全部。

「……んだ、そんな事かよ」

そっけない黒澤の言葉に、カッとなる。

「そんな事ってなんだよ……！ 黒澤性格悪すぎだよっ！ もう少し人に同情ってか関心を……」

「有沢に同情して欲しいのか？」

「して欲しくねえよ！ すんなよっ！」

「どっちなんだよ……」

意味わかんねえ…と付け足して、それから何を機嫌悪くしたのか、飲み物買いに行くと言呟いて部屋を出てってしまった。

バタンとドアが閉まる音がして、柴田先輩がため息を零す。

「しょうがないね、シズカは。矢西と有沢の友情に嫉妬でもしちゃったのかね……？」

「え…しっ……？」

柴田先輩の言っていた事はよく分からなかったけれど。よく理解出来ない間に柴田先輩が話を進めた。

「それで、矢西は何で泣いてたの？ アメリカに行って欲しくないから？」

「そ、…じゃなくて。棗に好きって言われてて、壺も絶対棗のこと

好きなのに。それなのに何も言わないで行っちゃうってなんか格好付けすぎて、逃げてるようにしか思えなくて、…そこで、俺は最後逃げなかったのに、…ムカついて——」

涙の理由を口にしたらもうホント自分が子供^{ガキ}すぎて、とんでもなく恥ずかしかった。

「可愛いね」

「可愛くねえですよっ！」

柴田先輩の口から飛び出てきたのは思っていたのと全然違うコメントで、俺は絶句して突っ込んでみる。

「矢西はもう少しステップアップしなきゃね」

「……」

「いいじゃん、何も言わないでアメリカとか。格好良いじゃん」

なんでそんな風に考えられるんだろうか。俺には全然わからなかった。別に有沢とは友達でも何でもないからどうでもいいっての？

「関係が無いからって意味で言ってるわけじゃないよ」

「……」

「『逃げるが勝ち』って言う言葉。あるでしょ」

「はい……」

「まあ、戦略的撤退？　って言うのかな。一先^{ひと}ず……その、棗^{はな}ってヤツから、逃げたほうがいい。みたいな風に思ったんじゃないの？」

逃げるが勝ち。戦略的撤退。壺は何か考えでもあってアメリカに行くのか？

なんで？

「まあ、…なんでって聞かれれば困るんだけど。それはその棗と有沢の中の問題だから、矢西には分からないと思うよ。勿論、僕にも、シズカにもね」

「……」

確かに俺にはわからない事かもしれないけれど、中に割り込めないモノかもしれないけれど。

何も言わないで、それで終わり？　……本当に？　好きって、ち

やんと気付いているくせに何も言わないなんて、そんな悲しいことは無いじゃんかよ。

そんな逃げの勝ちがあるわけない。

つらいのは、結局自分だ。

「ああ、でも――」

柴田先輩が何かを思いついたように顔をあげた。

「関係ないって言われても、矢西がそうじゃないだろ！　って思うんなら、少なからずお助けする事は許されるんじゃないかな？　それが本当に正しいならだけど」

「お助け……？」

「軌道修正、って言うのかな。大きな修正は相手にも迷惑掛かって駄目だけれど、少しの修正で、誰かが少なからず今よりも良い時間を会得できると思ったんなら、修正するべき。なーんて、僕は考えるな。……って、意味分かったかな？」

「うん……、分かりました」

陰から支えてやればいいんだと思った。脇役でいいから、壺を支えてやりたい。だって俺の憧れだから。友達だから。

少しでも良かったって、そんな思いをしてほしいんだ。

そのためなら、別に嫌われてもいいかもしれない。

「ありがとうございます……。柴田先輩」

「ん？　別にお礼言う事でもないよ」

そんな会話をした後に、ちょうど部屋のドアが開いた。壺は勿論大事だけれど、それよりも大事な人。

俺は黒澤がいれば、もう最後の最後まで生きていける気がする。

「話し、終わったか？」

「うん」

「そうか。……オラ、奢り」

手渡された缶ジュースは冷たくて、それを俺に渡した黒澤の手も充分冷たかった。

そんな些細な事を愛しいなんて思える人を、壺にも見つけてほし

いって、そう思うんだ。
だってこんなに、幸せだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2182/>

physical pain

2011年3月11日05時55分発行